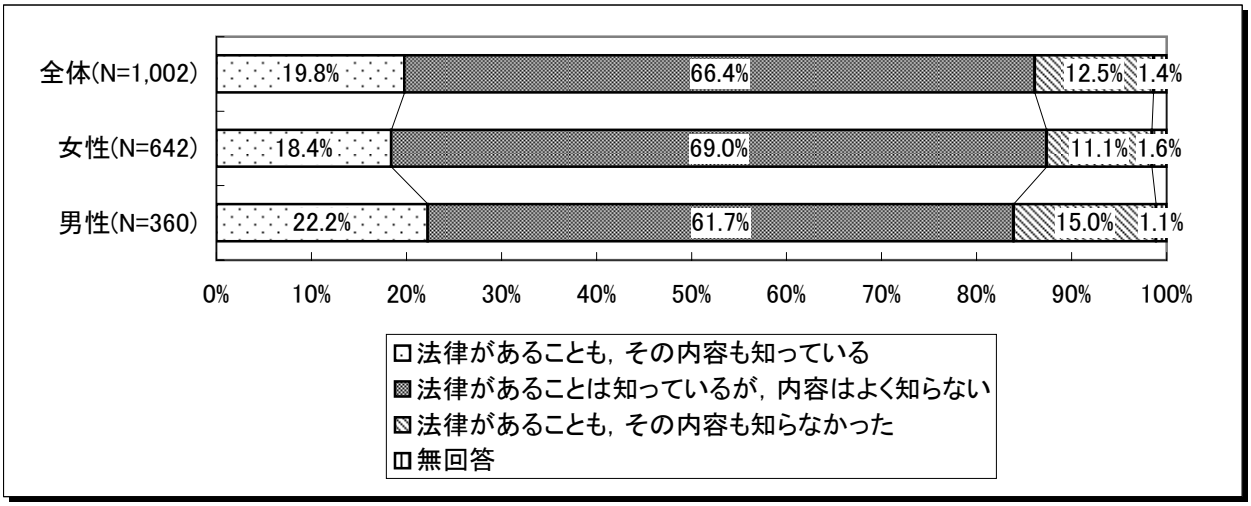
第3章　調査結果

1　配偶者暴力防止法の認知度について

「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（配偶者暴力防止法）」の認知度については，「法律があることは知っているが，内容はよく知らない」が66.4%と最も高く，次いで「法律があることも，その内容も知っている」が19.8%，「法律があることも，その内容も知らなかった」が12.5%となっており，法律の存在は認識されているが内容まで十分に理解されているとは言い難い。

性別でみると，配偶者暴力防止法の認知度に大きな差はみられない。

図1-1-1〈配偶者暴力防止法の認知度（全体・性別）〉

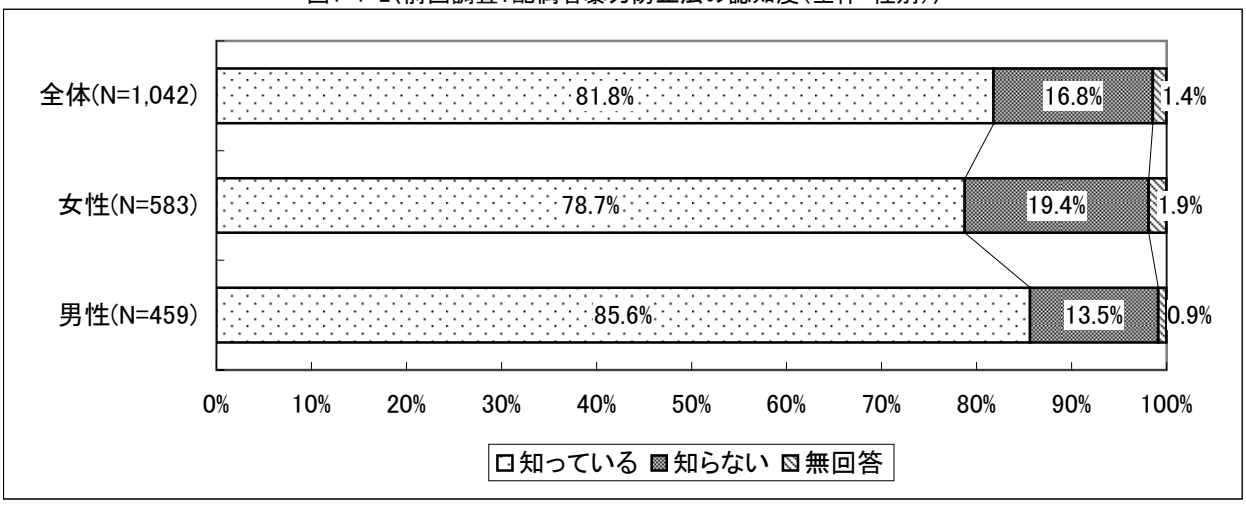


【参考：前回調査との比較】

前回調査では，配偶者暴力防止法の存在及び内容を「知っている」か「知らない」かの二者択一として調査を行った。

今回の調査では，法律があることを知っている割合は86.2%で，前回調査より4.4ポイント上昇しており，特に女性の認知度が進んでいる。

図1-1-2〈前回調査：配偶者暴力防止法の認知度（全体・性別）〉



【参考：内閣府調査との比較】

内閣府調査と比較すると，今回調査の方が法律の存在・内容ともに知っている割合が男女ともに高く，また「存在も内容も知らなかった」割合が低いことから全国平均と比べ認知度は高いと言える。未既婚別に見てもほぼ同様の傾向となっており，特に既婚者の認知度が高くなっている。

図1-1-3〈内閣府調査：配偶者暴力防止法の認知度（全体・性別）〉

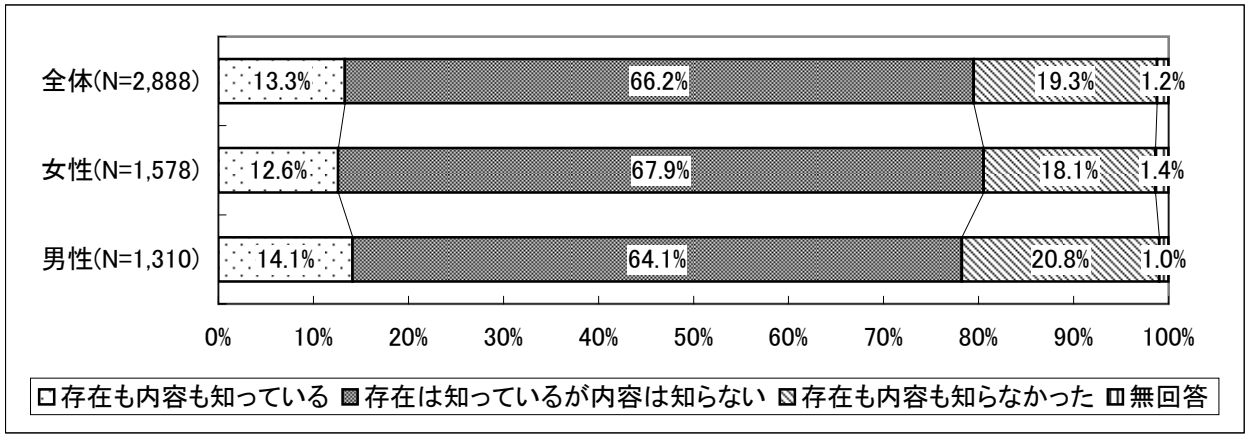


図1-2-1〈配偶者暴力防止法の認知度（性・未既婚別）〉

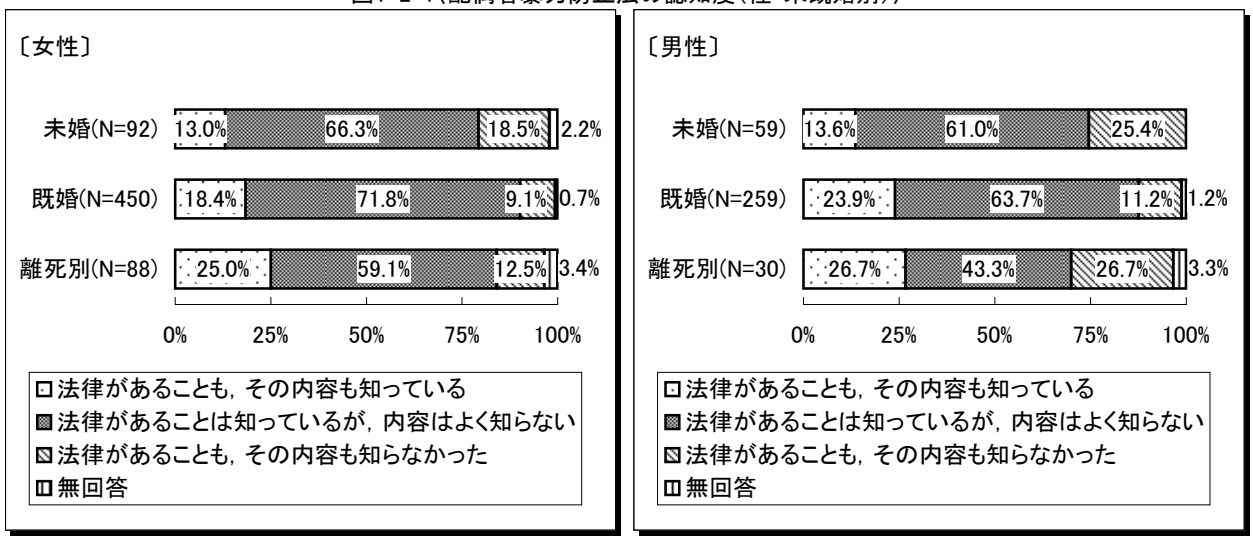
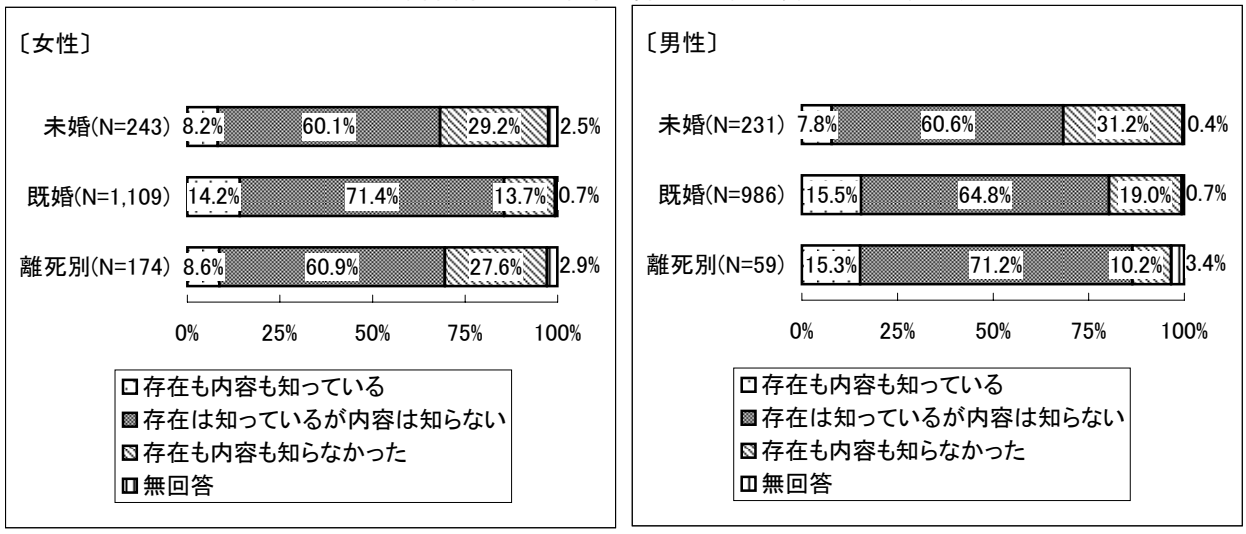


図1-2-2〈内閣府調査：配偶者暴力防止法の認知度（性・未既婚別）〉



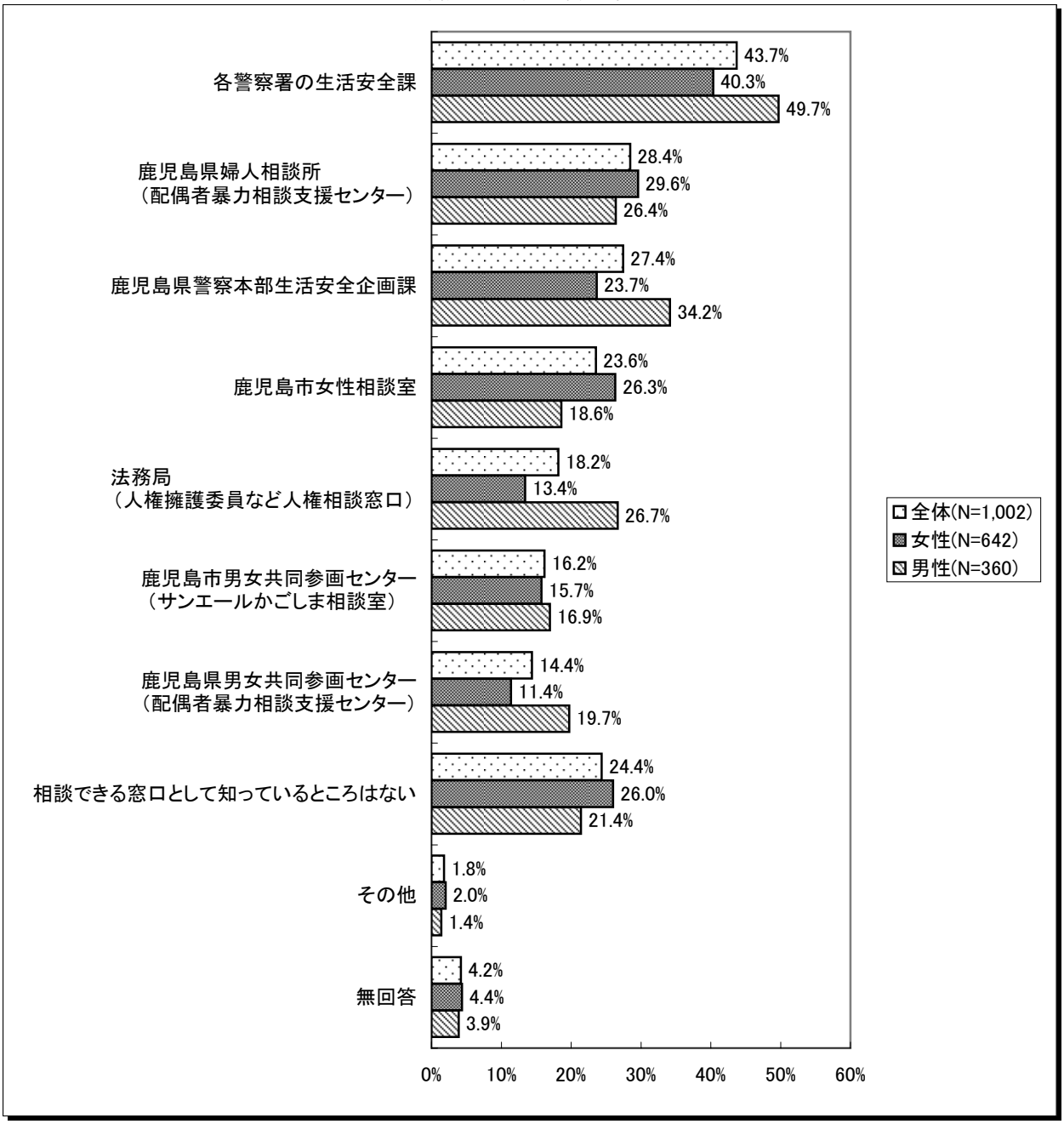
2　相談窓口の認知度について［複数回答］

配偶者からの暴力に関する相談窓口としての認知度は「各警察署の生活安全課」(43.7%)が最も高く，次いで「鹿児島県婦人相談所（配偶者暴力相談支援センター）」(28.4%)，「鹿児島県警察本部生活安全企画課」(27.4%)の順となっている。

また，24.4%が「相談できる窓口として知っているところはない」と回答している。

性別でみると，男性の認知度が女性を上回る傾向があるものの，「鹿児島市女性相談室」及び「鹿児島県婦人相談所（配偶者暴力相談支援センター）」については，女性の認知度が高くなっている。また「相談できる窓口として知っているところはない」とした回答も女性が上回っている。

図2-1〈相談窓口の認知度（全体・性別）〉



【参考：内閣府調査との比較】

配偶者暴力防止法の認知度別・相談窓口の認知度を，内閣府調査と比較すると，今回調査においては，法律の存在も内容も知っている人の相談窓口の認知度が最も高く男女ともに9割以上を占めている。法律の存在のみを知っている人の相談窓口認知度が7割前後，存在も内容も知らない人の相談窓口認知度は4割前後となっている。

法律の認知度別の相談窓口の認知度の傾向は内閣府調査と変わらないが，全体的に本市調査結果の認知度が高くなっている。

※今回調査結果については窓口別に複数回答となっているため，いずれかの窓口を「知っている」とした回答と，「知らない」及び無回答に分類した。

図2-2-1〈相談窓口の認知度（性・配偶者暴力防止法の認知度別）〉

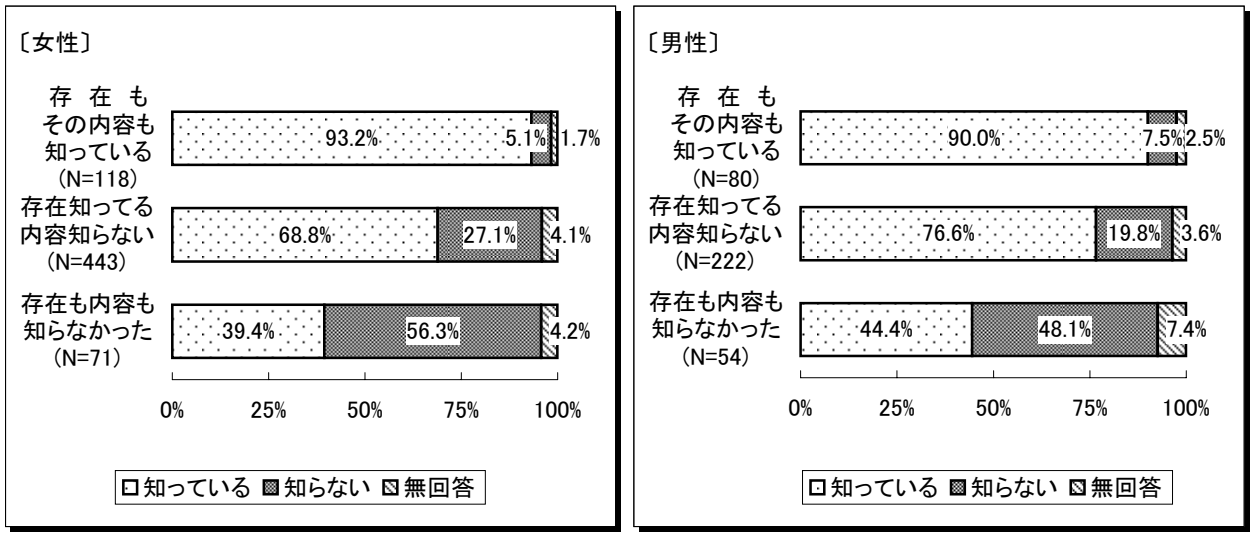
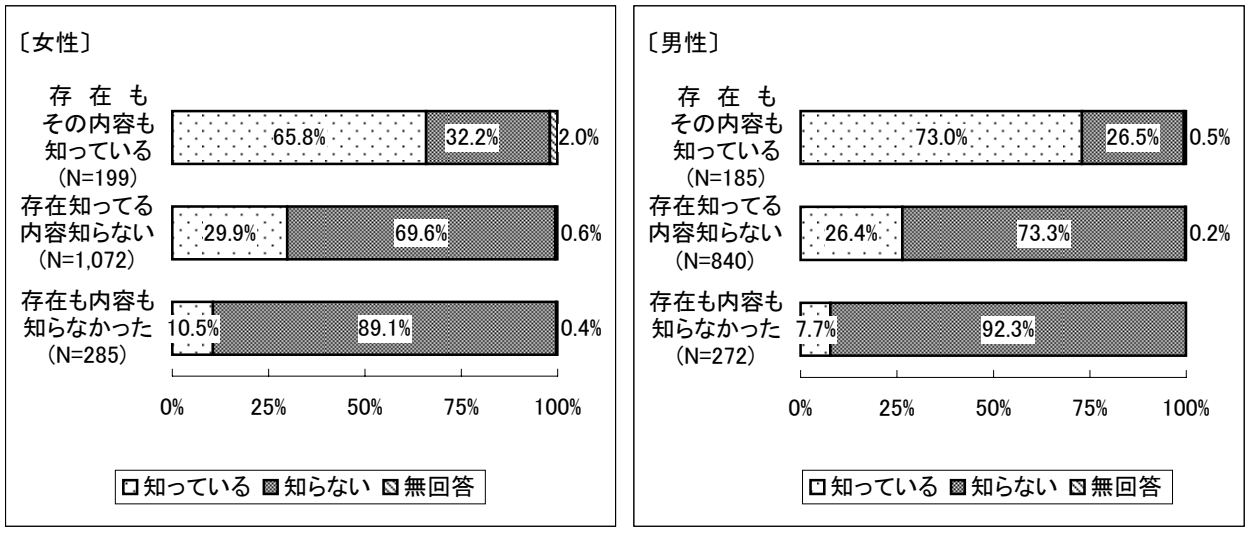


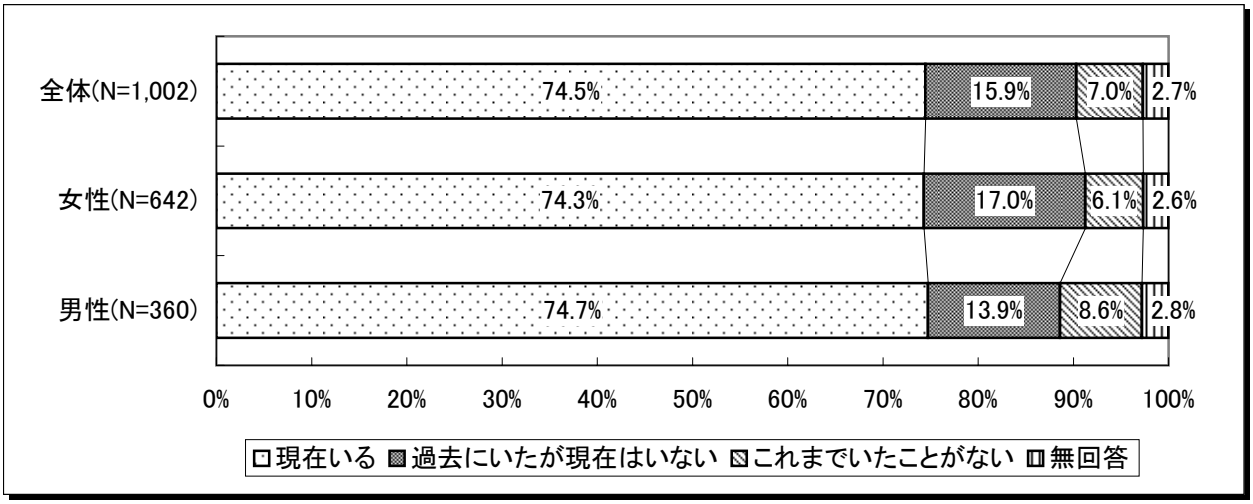
図2-2-2〈内閣府調査：相談窓口の認知度（性・配偶者暴力防止法の認知度別）〉



3　配偶者等の状況について

現在又は過去の配偶者や恋人の状況は，「現在いる」とした回答が74.5%，次いで「過去にいたが現在はいない」(15.9%)，「これまでいたことがない」(7.0%)となっている。

図3〈配偶者等の状況（全体・性別）〉



4　配偶者等からの被害経験について

（1）配偶者等からの被害経験の有無

図4-(1)-1〈配偶者からの被害経験：1，2度あった（全体・性別）〉

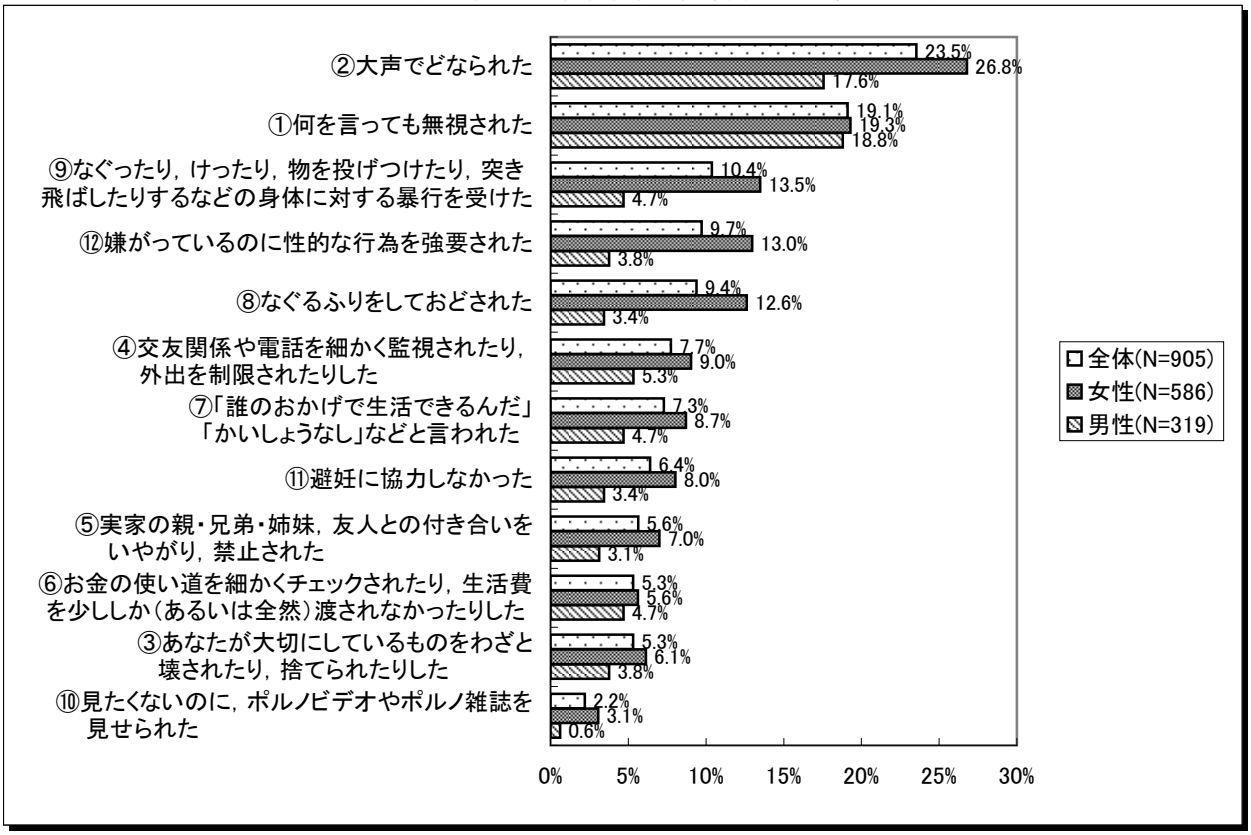
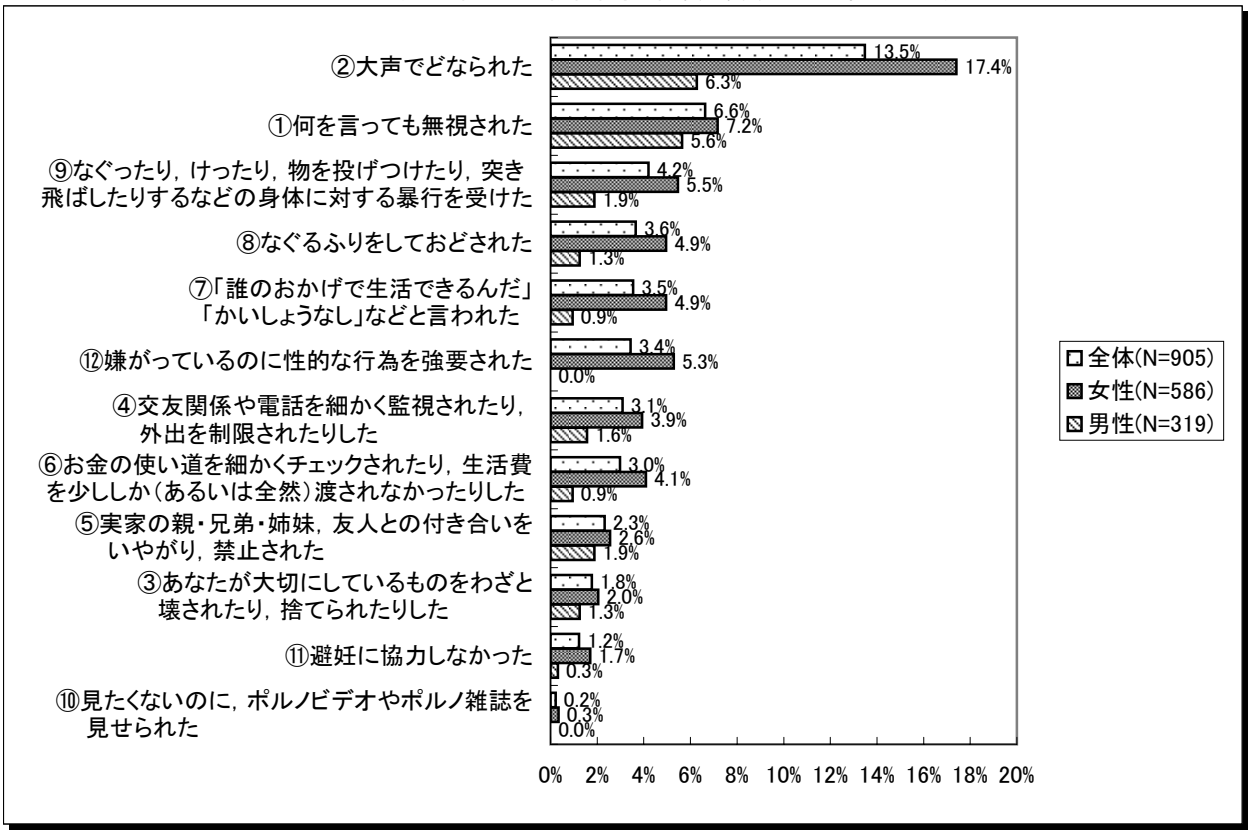


図4-(1)-2〈配偶者からの被害経験：何度も度あった（全体・性別）〉



配偶者や恋人からの暴力が「1，2度あった」「何度もあった」とした回答を暴力の種類別にみると，「大声でどなられた」の割合が最も高く（女性：44.2%，男性：23.8%），次いで「何を言っても無視された」（女性：26.5%，男性：24.5%）となっている。

図4-(1)-3〈配偶者からの被害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

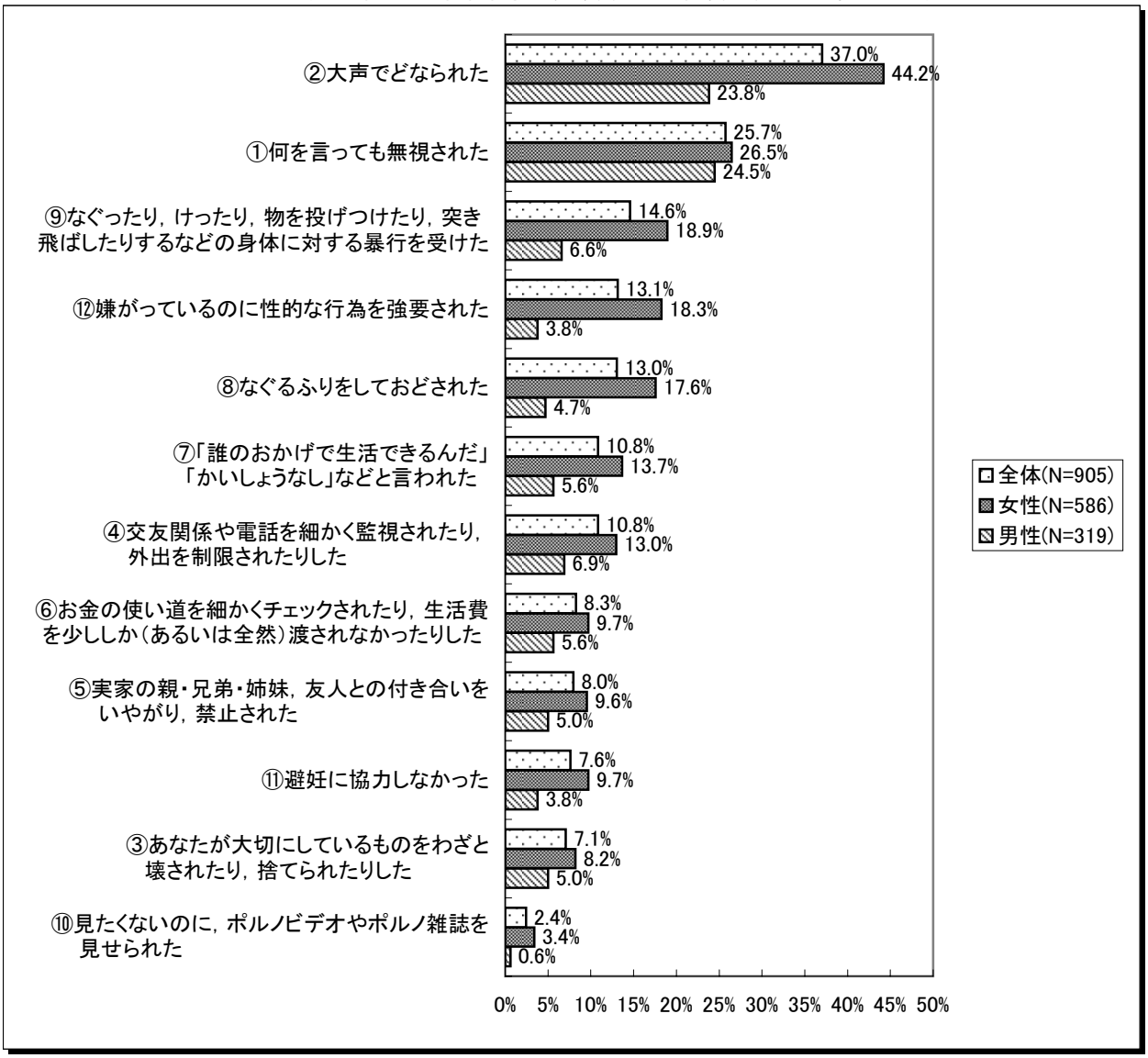


図4-(1)-4-①〈身体的暴力の被害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

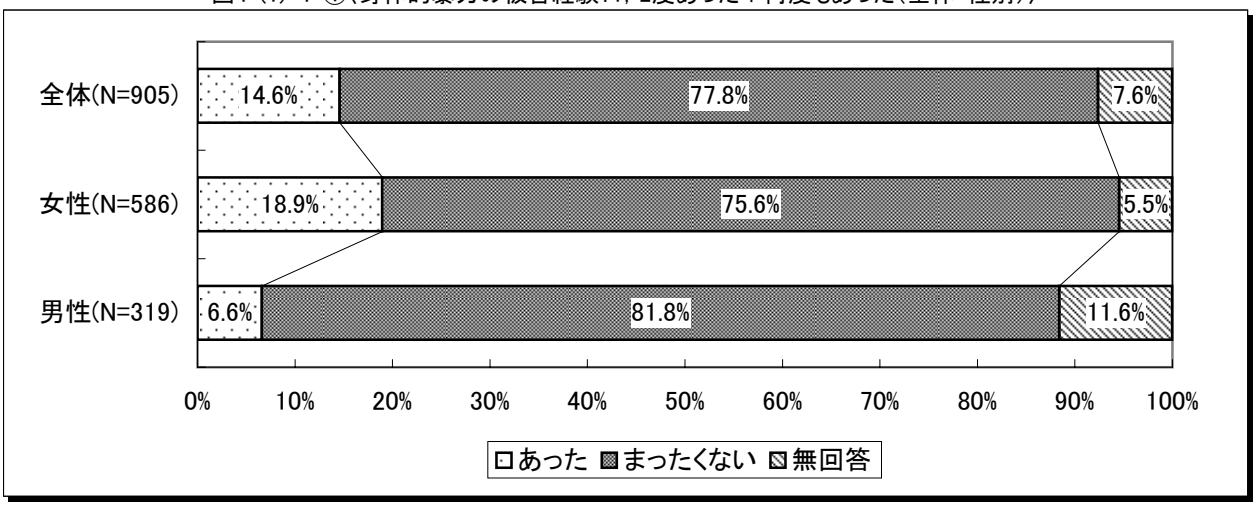


図4-(1)-4-②〈精神的暴力の被害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

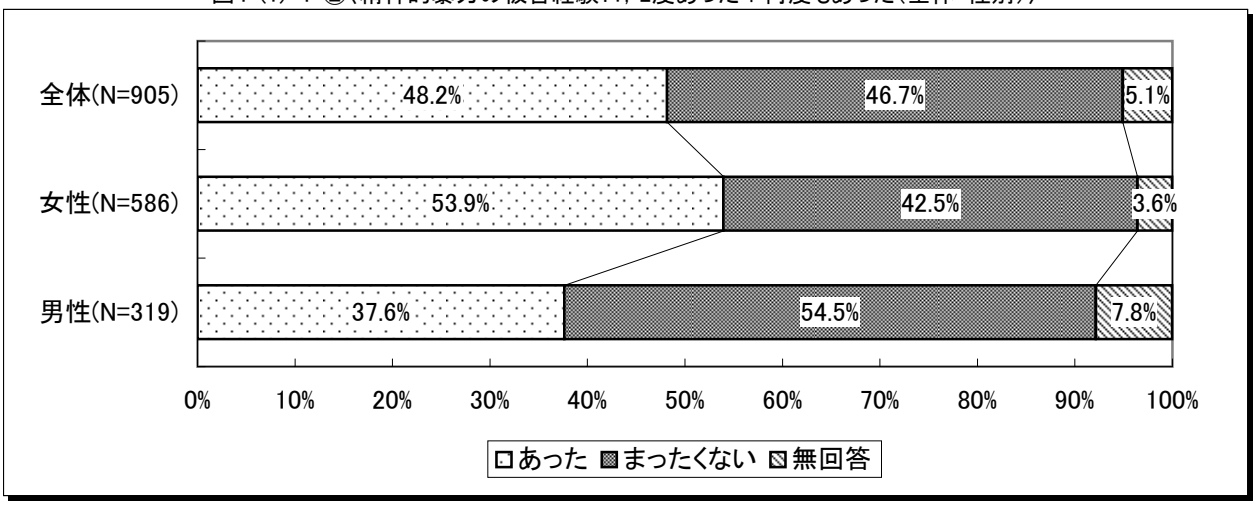


図4-(1)-4-③〈性的暴力の被害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

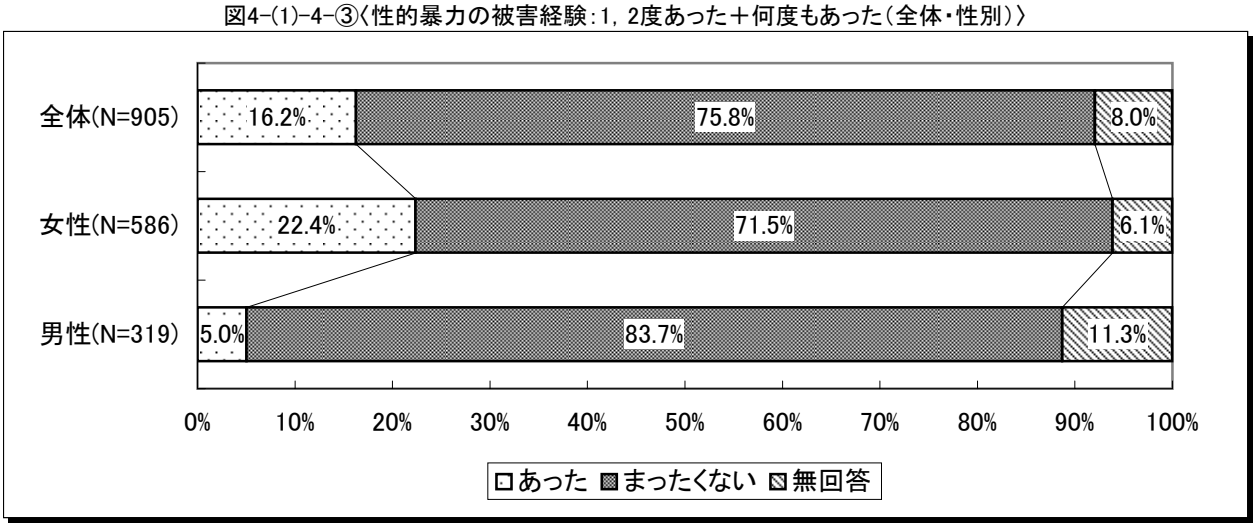
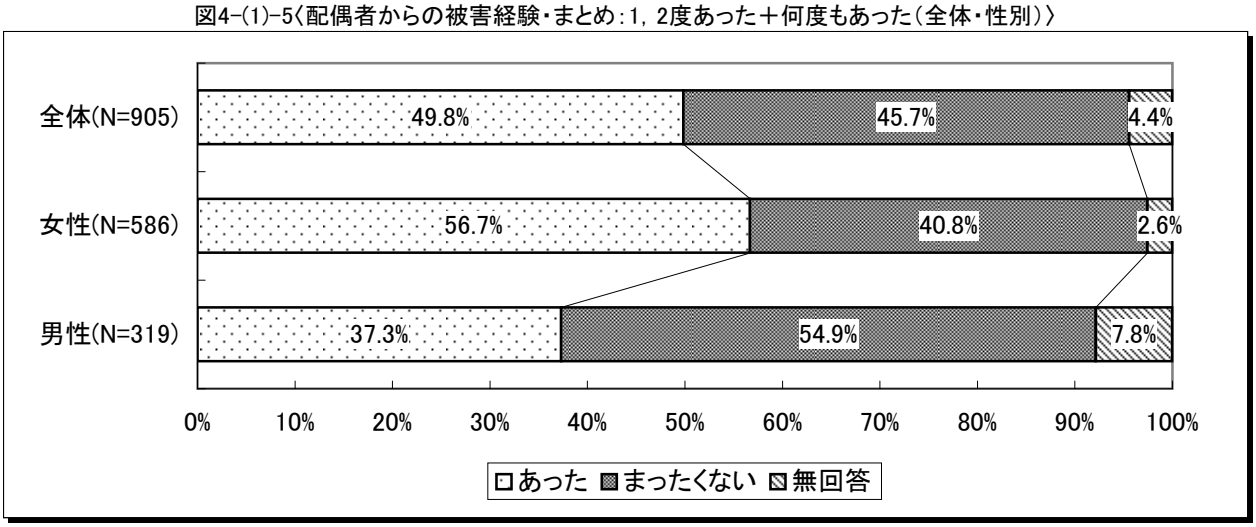


図4-(1)-5〈配偶者からの被害経験・まとめ：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉



※図4-(1)-5は，配偶者や恋人がいる（いた）人のうち，①～⑫のいずれかの暴力が「1，2度あった」若しくは「何度もあった」と回答した人の割合。

【参考：内閣府調査との比較】

被害の種類を「A:身体的暴力」，「B:精神的暴力」，「C:性的暴力」の3つに分類して比較した。

A:身体的暴力

「あった」とした回答は，内閣府調査では20代女性が最も高く，20代男性が最も低くなっているのに対し，今回調査結果では20代女性が最も低く，20代男性が最も高くなっている。

図4-(1)-5-①〈身体的暴力の被害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉

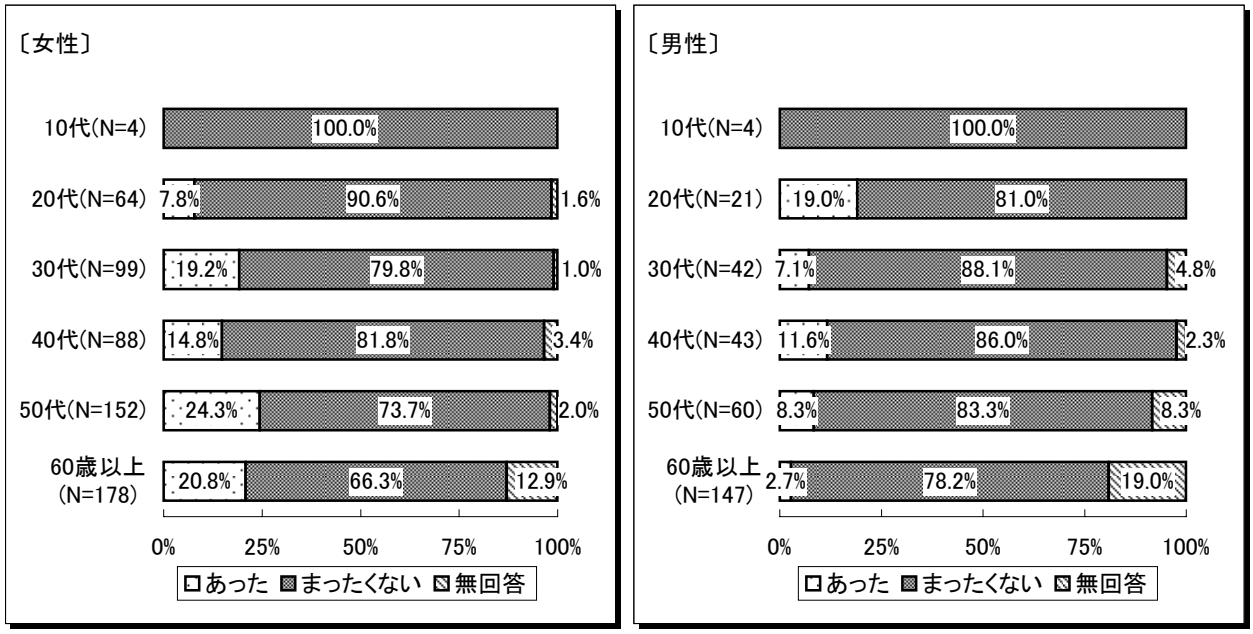
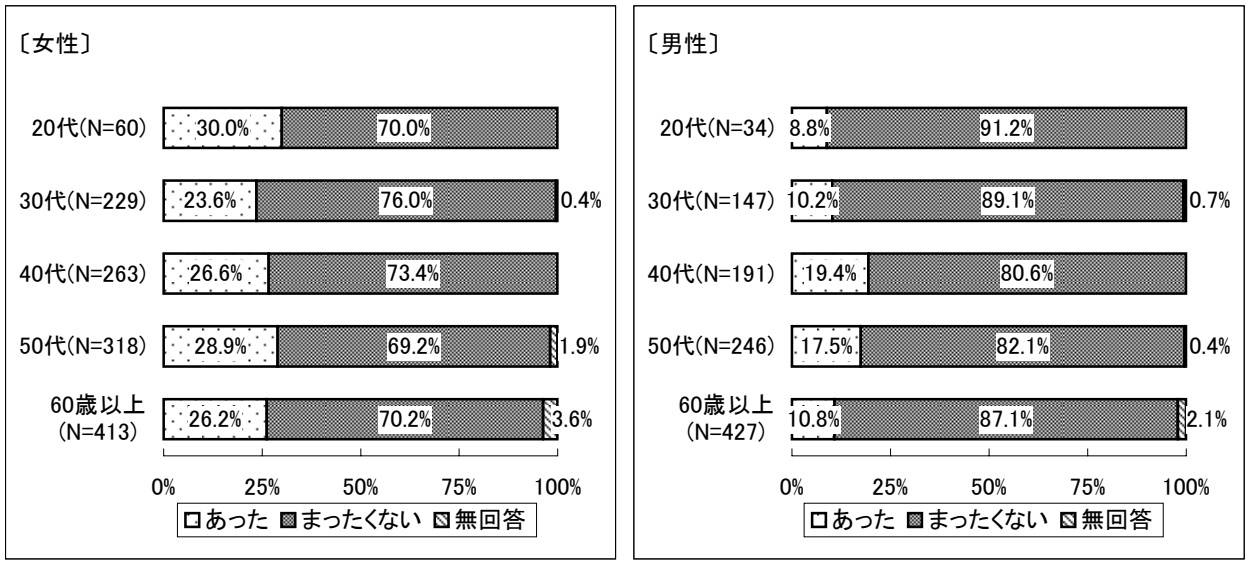


図4-(1)-5-②〈内閣府調査:身体的暴力の被害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉



【参考：内閣府調査との比較】

B:精神的暴力
　男女とも，すべての年代において「あった」と回答した割合が，内閣府調査を大きく上回っている。

図4-(1)-6-①〈精神的暴力の被害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉

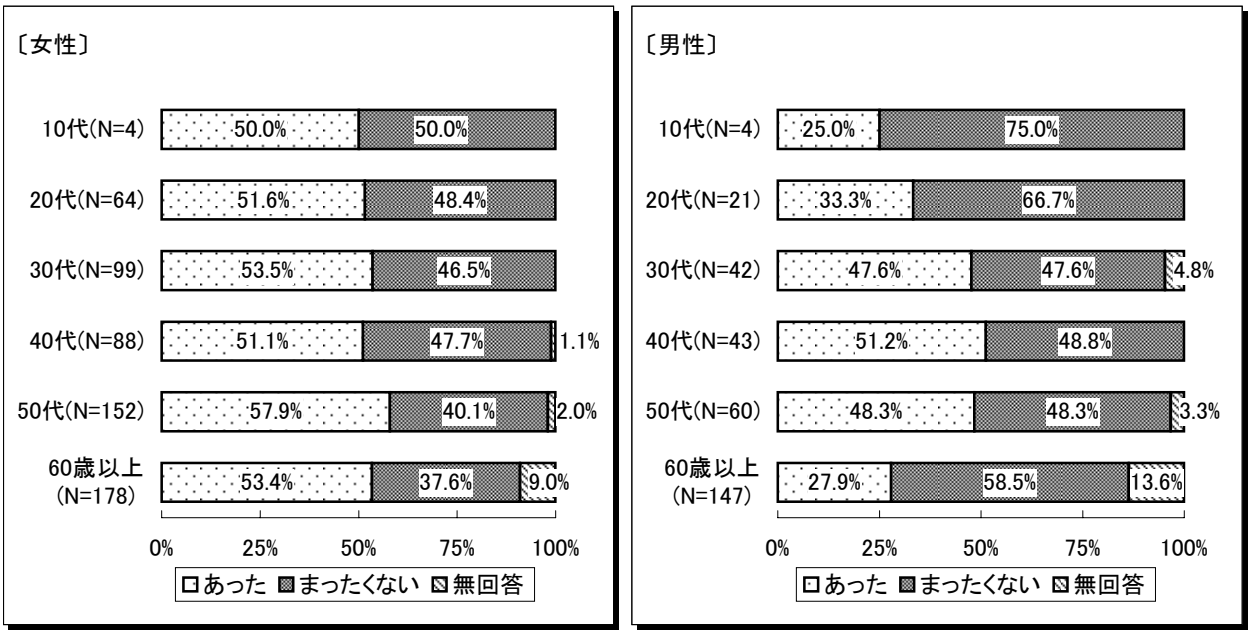
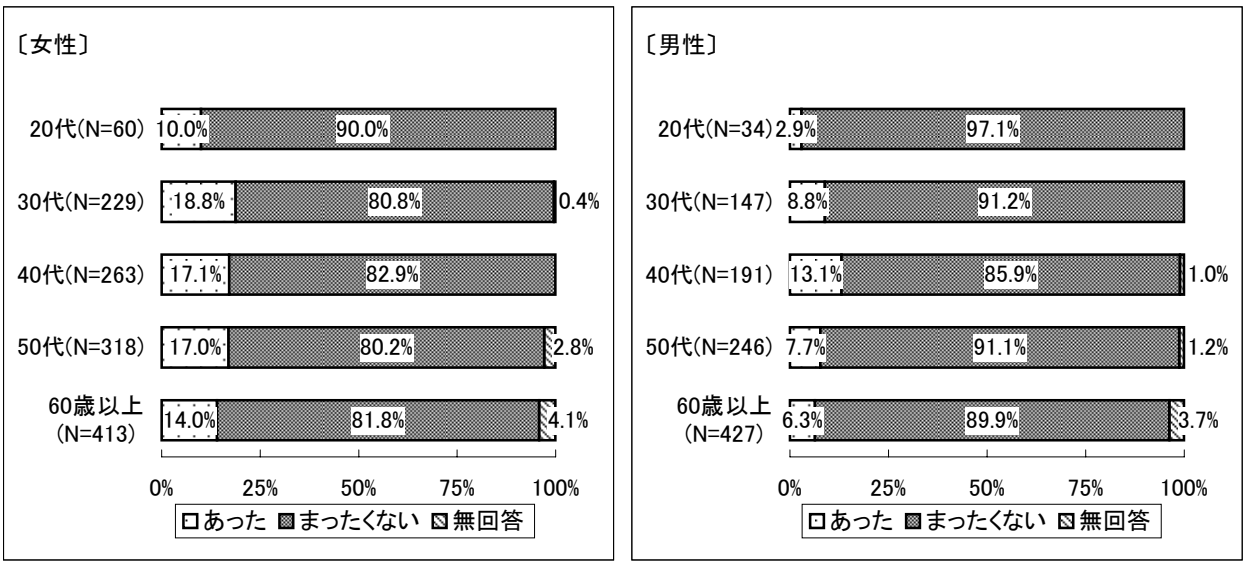


図4-(1)-6-②〈内閣府調査:精神的暴力の被害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉



【参考：内閣府調査との比較】

C:性的暴力

男女とも，すべての年代において「あった」と回答した割合が内閣府調査結果を上回っており，特に20代男女の割合が高くなっている。

図4-(1)-7-①〈性的暴力の被害経験：1，2度あった＋何度もあった（性・年代別）〉

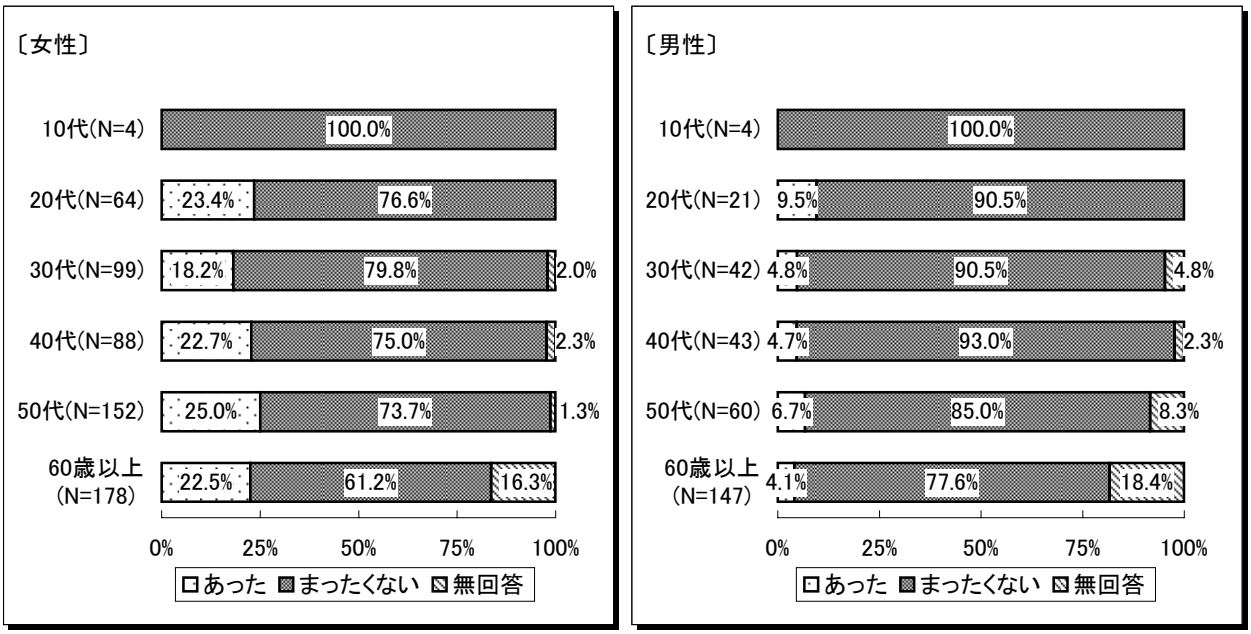
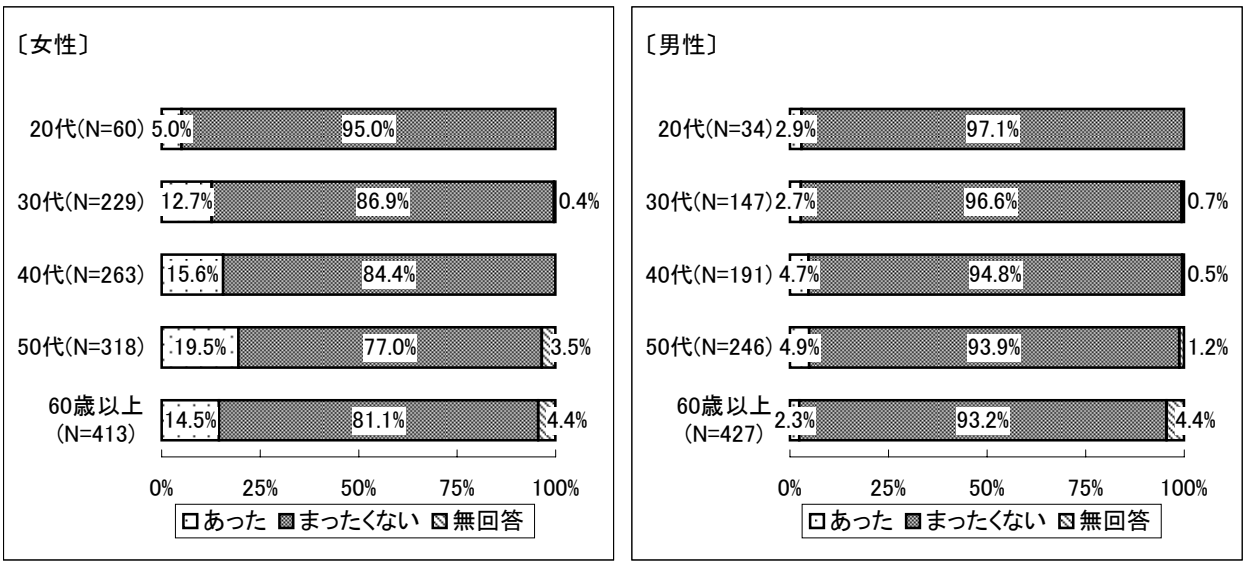


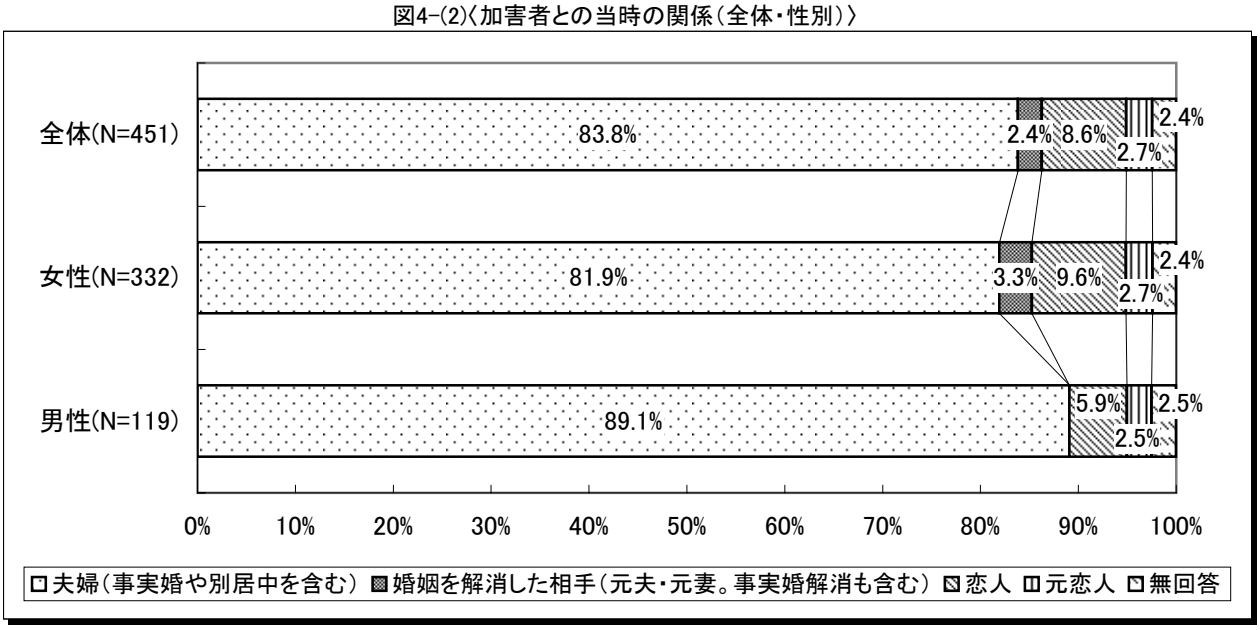
図4-(1)-7-②〈内閣府調査：性的暴力の被害経験：1，2度あった＋何度もあった（性・年代別）〉



（２）加害者との当時の関係について

暴力を受けた相手との関係は，「夫婦（事実婚や別居中を含む）」が83.8%を占め，次いで「恋人」(8.6%)，「元恋人」(2.7%)，「婚姻を解消した相手（元夫・元妻。事実婚解消も含む）」(2.4%)となっている。

図4-(2)〈加害者との当時の関係（全体・性別）〉

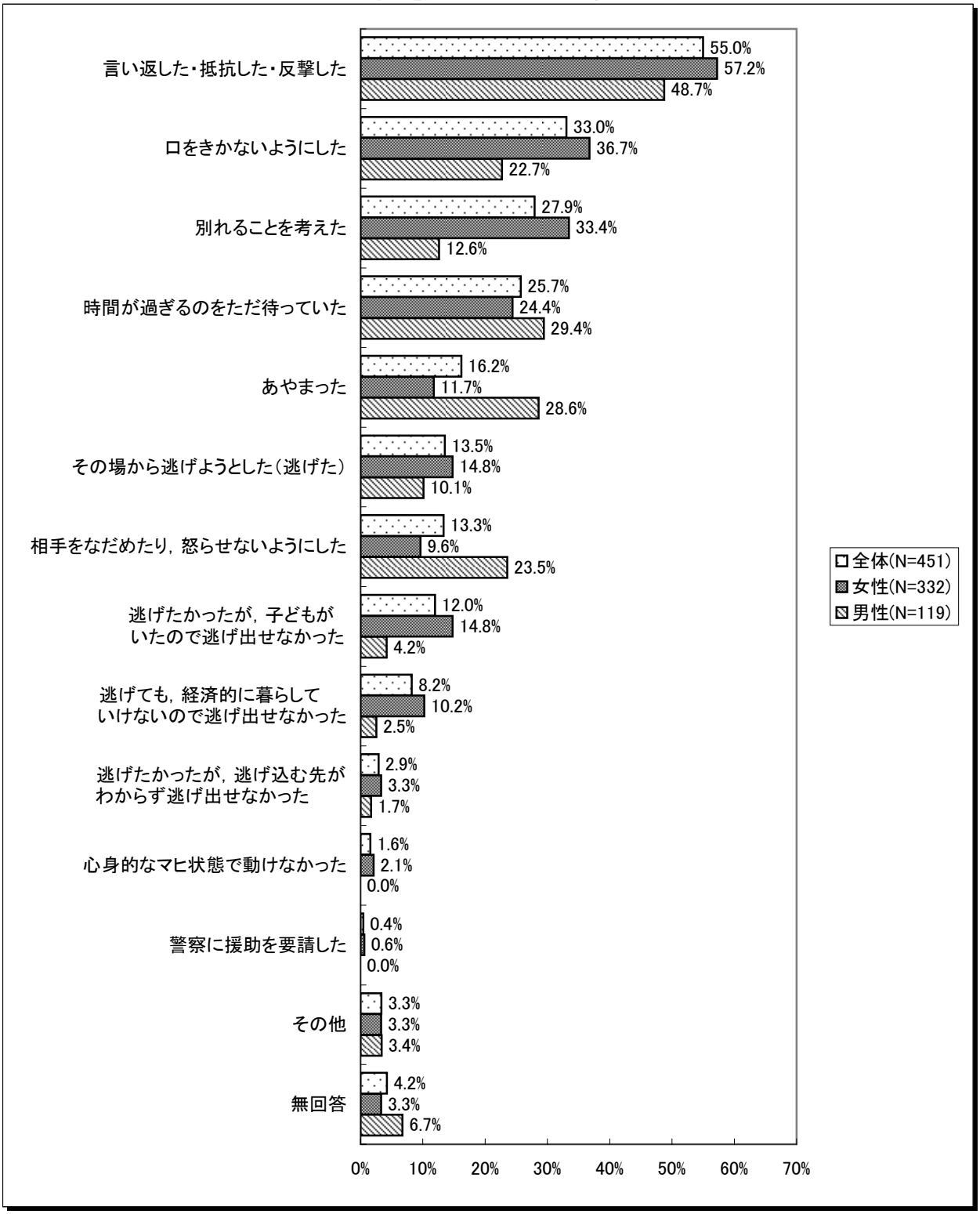


（３）暴力を受けたときの対応について［複数回答］

「言い返した・抵抗した・反撃した」が55.0%と最も高く，次いで「口をきかないようにした」(33.0%)，「別れることを考えた」(27.9%)と続いている。

これを性別でみると，「逃げても，経済的に暮らしていけないので逃げ出せなかった」(男性2.5%に対し女性10.2%)，「逃げたかったが，子どもがいたので逃げ出せなかった」(男性4.2%に対し女性14.8%)，「別れることを考えた」(男性12.6%に対し女性33.4%)の男女差が大きくなっている。

図4-(3)〈暴力を受けたときの対応（全体・性別）〉

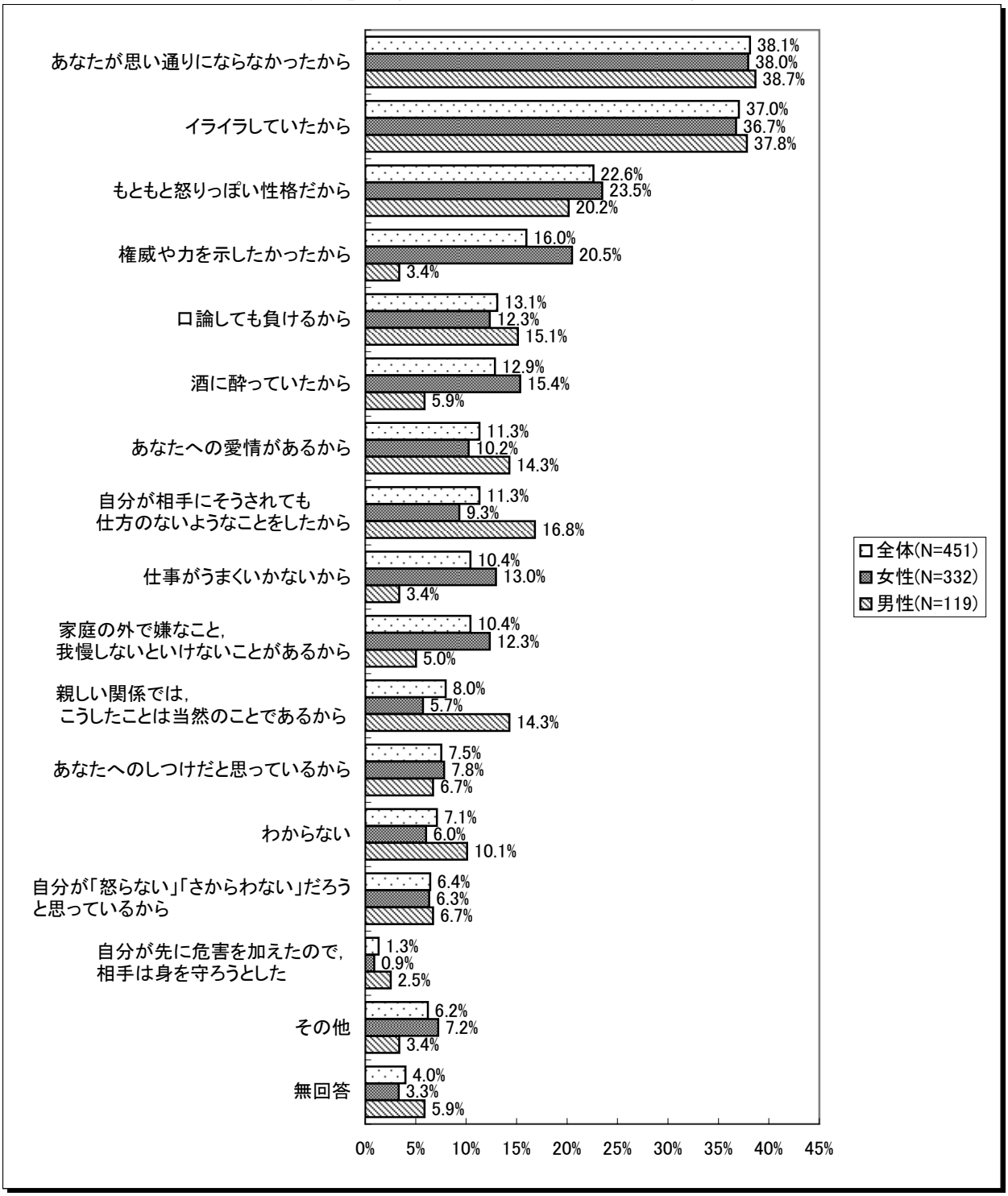


（4）暴力をふるわれた理由として考えられるものについて［複数回答］

暴力をふるわれた理由として考えられるものは，「あなたが思い通りにならなかったから」が38.1%，「イライラしていたから」が37.0%，「もともと怒りっぽい性格だから」が22.6%と続いている。

性別でみると，上位3項目については女性・男性ともに同様の傾向を示している。また，男性は，加害者が暴力をふるった理由を「親しい関係では，こうしたことは当然のことであるから」「自分が相手にそうされても仕方のないようなことをしたから」と考えている人が女性よりも多くなっている。一方，女性は，加害者が暴力をふるった理由を「権威や力を示したかったから」「仕事がうまくいかないから」と考えている人が男性より多くなっている。

図4-(4)〈暴力をふるわれた理由として考えられるもの（全体・性別）〉

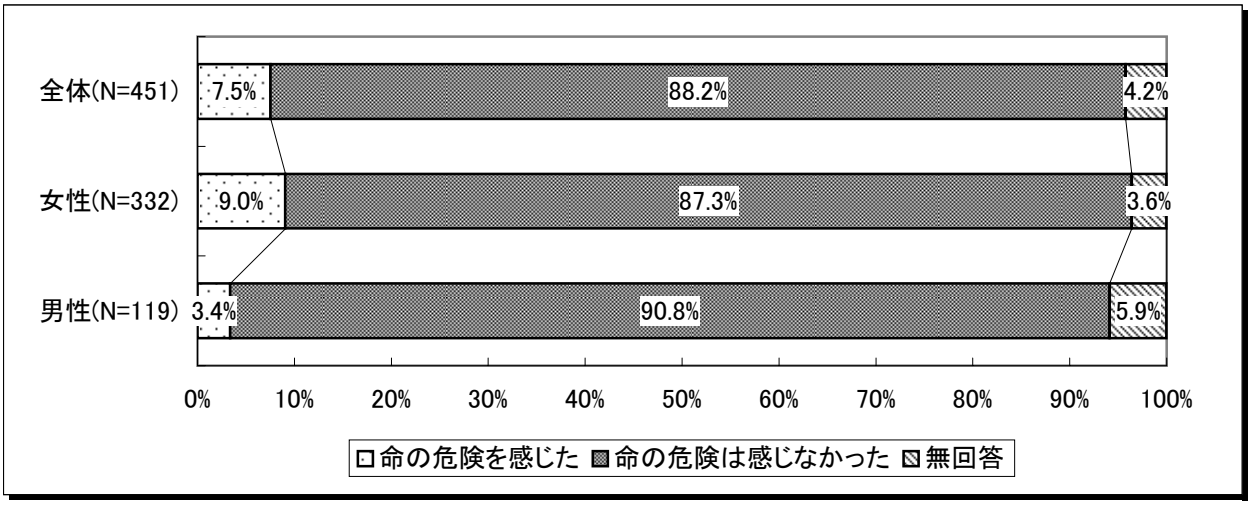


（５）暴力による命の危険を感じた経験について

「命の危険を感じた」とした回答は7.5%，「命の危険は感じなかった」は88.2%となっている。

性別でみると，「命の危険を感じた」男性が3.4%であるのに対し，女性は9.0%となっている。

図4-(5)-1〈命の危険を感じた経験（全体・性別）〉

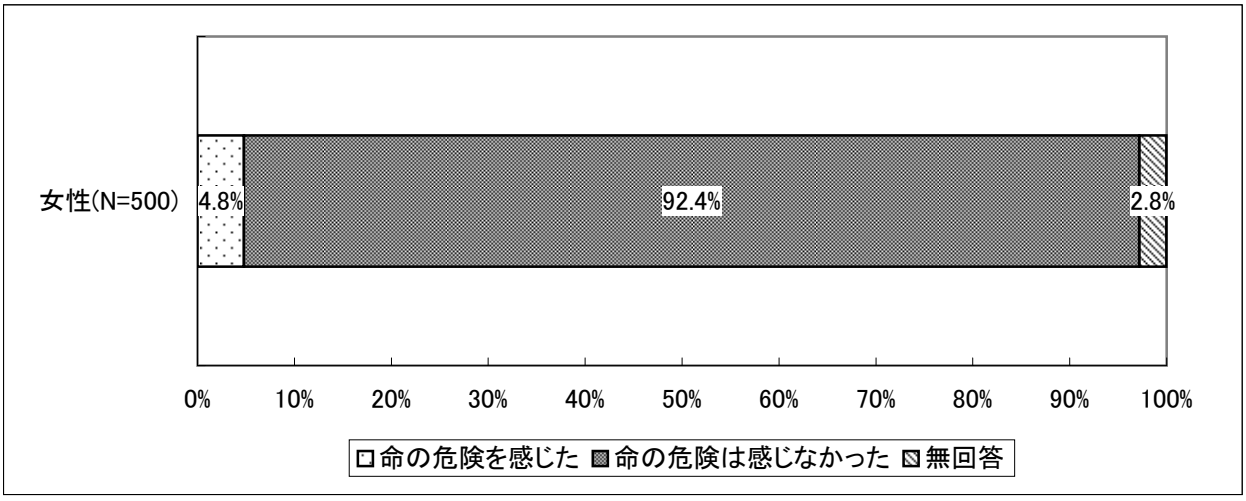


【参考：前回調査との比較】

前回調査とは，設問内容が異なるため単純に比較することは難しいが，暴力の被害により命の危険を感じた割合は4.8%となっていた。

※前回調査における「何度もあった」及び「1，2度あった」の合計を「命の危険を感じた」に，「まったくない」を「命の危険は感じなかった」に読み替えている。

図4-(5)-2〈前回調査：命の危険を感じた経験（女性）〉

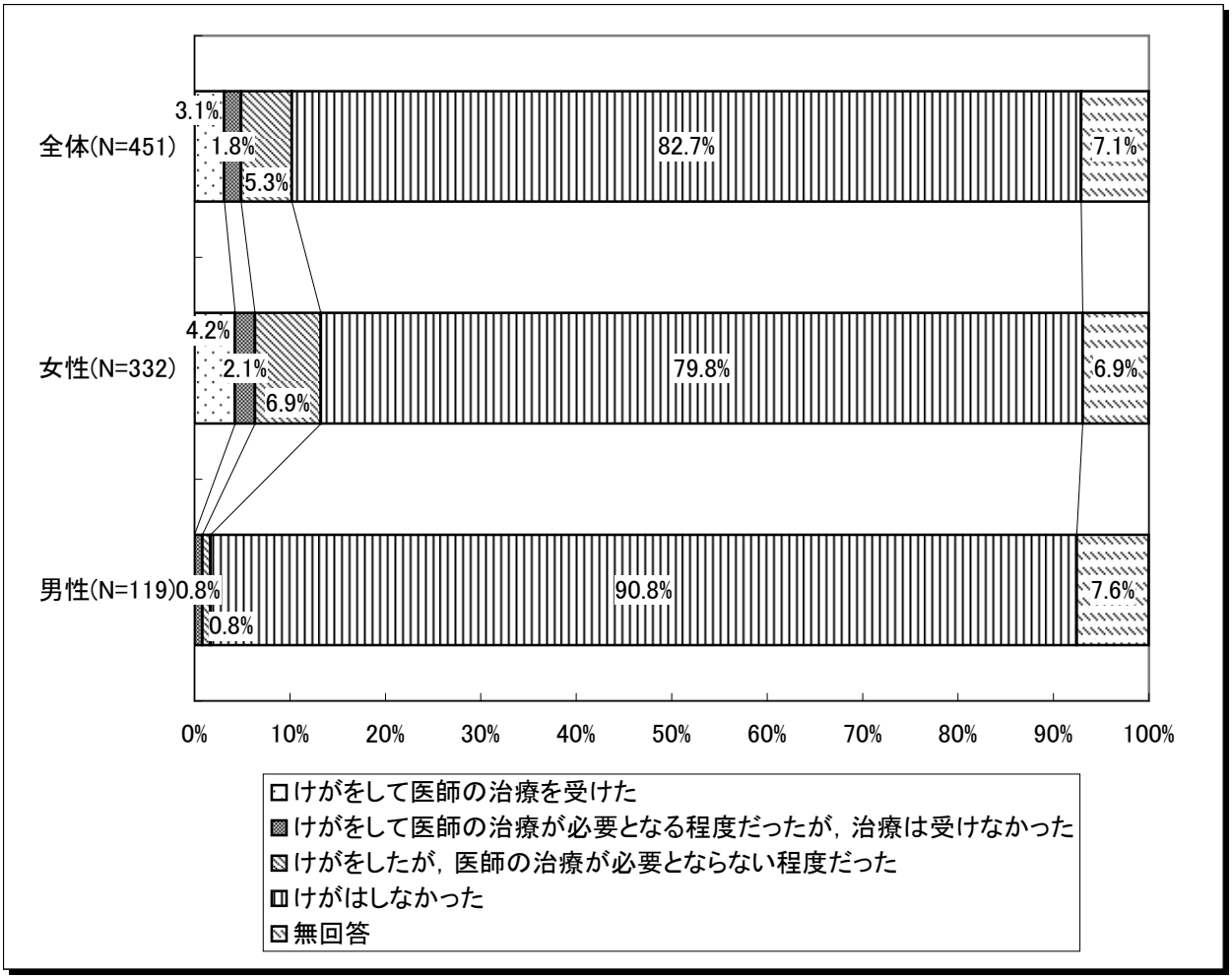


（６）暴力によるけがをした経験について

「けがをしたが，医師の治療が必要とならない程度だった」が5.3%，「けがをして医師の治療を受けた」が3.1%，「けがをして医師の治療が必要となる程度だったが，治療は受けなかった」が1.8%と続いている。

性別でみると，程度にかかわらずけがをした女性が13.2%であることに対し，男性は1.6%となっている。

図4-(6)-1〈けがをした経験（全体・性別）〉



【参考：前回調査との比較】

前回調査とは，設問内容が異なるため単純に比較することは難しいが，医師の治療が必要とならない程度の暴行を受けた経験は「何度もあった」(4.8%)，「1，2度あった」(8.2%)であった。また，医師の治療が必要となる程度の暴行を受けた経験は「何度もあった」(1.8%)，「1，2度あった」(2.8%)であった。

図4-(6)-2〈前回調査：医師の治療が必要とならない程度の暴行を受ける（女性）〉

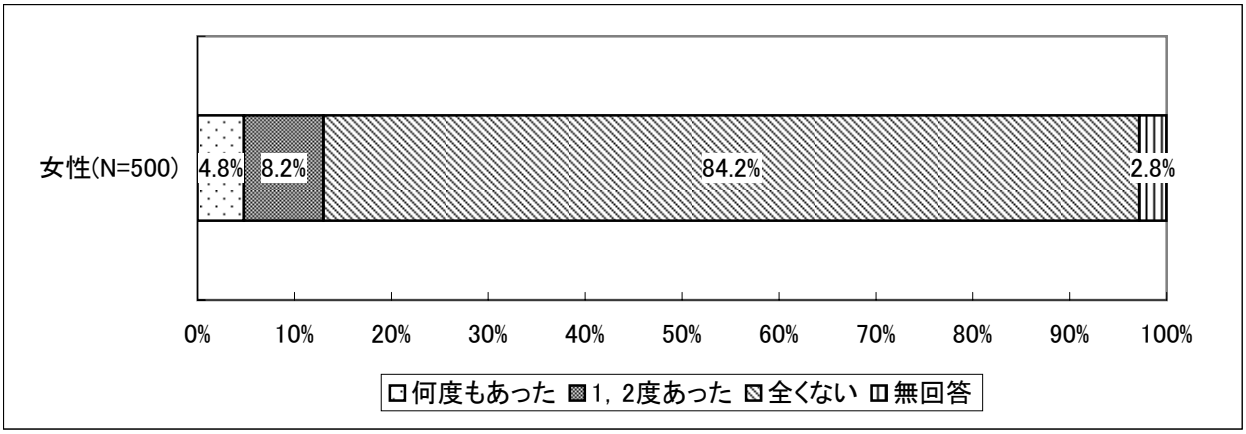
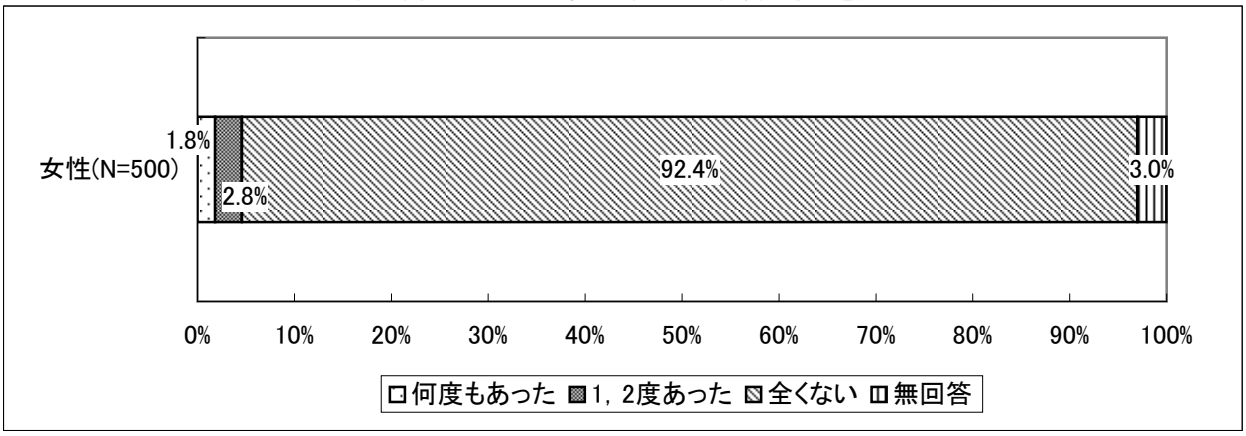


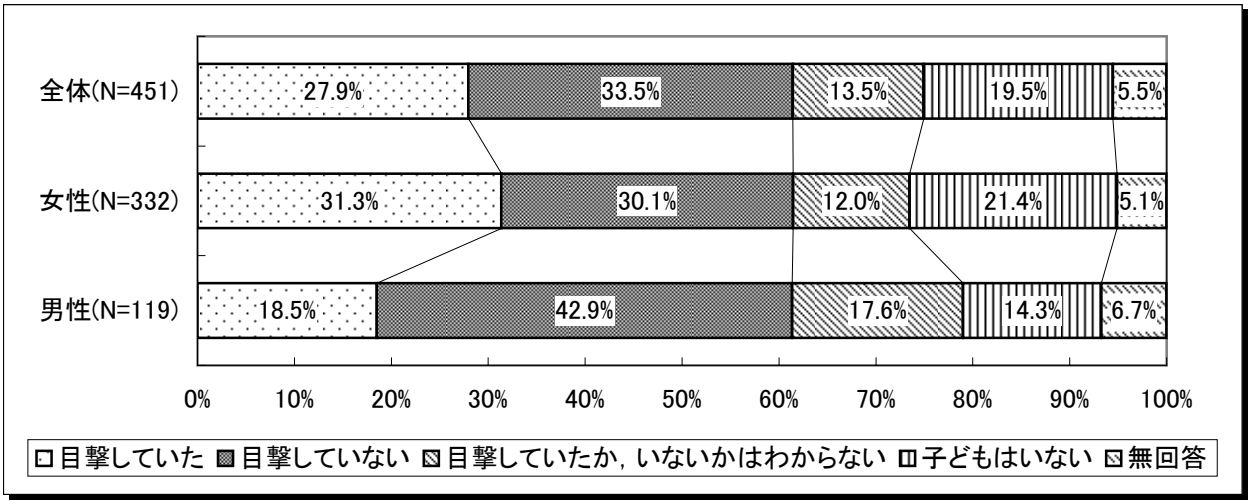
図4-(6)-3〈前回調査：医師の治療が必要となる程度の暴行を受ける（女性）〉



（７）子どもによる目撃について

「目撃していない」が33.5%と最も高く，「目撃していた」(27.9%)，「子どもはいない」(19.5%)，「目撃していたか，いないかはわからない」(13.5%)と続いている。
性別でみると，「目撃していた」と回答した女性が31.3%であることに対し，男性は18.5%となっている。また「目撃していたか，いないかはわからない」と回答した女性は12.0%，男性は17.6%となっている。

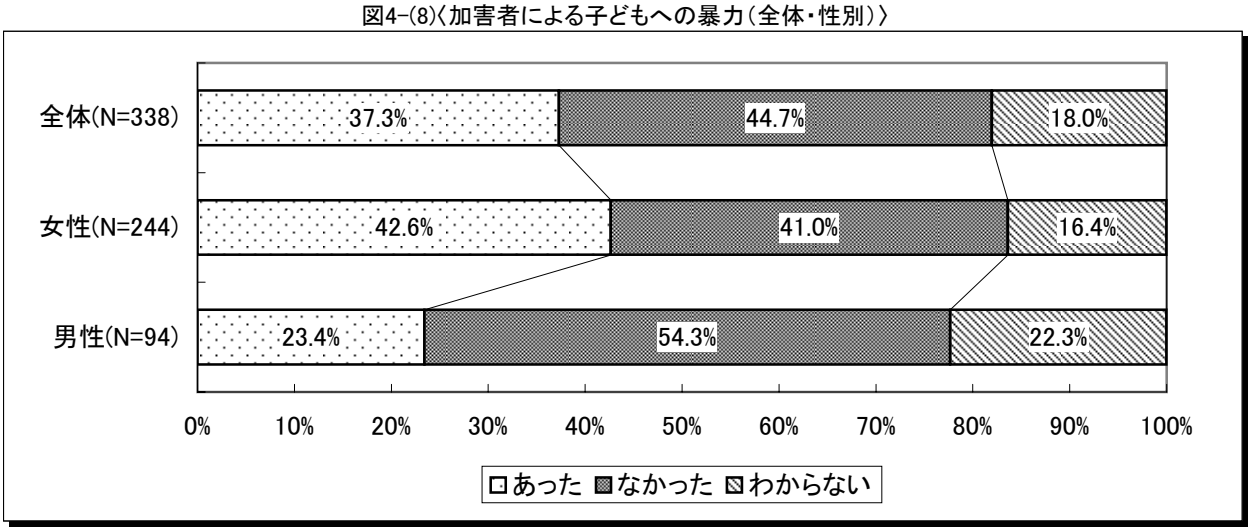
図4-(7)〈子どもによる目撃（全体・性別）〉



（８）加害者による子どもへの暴力について

「なかった」とする回答が44.7%，「あった」が37.3%となっている。
性別では，「あった」と回答した女性が42.6%であることに対し，男性は23.4%となっている。

図4-(8)〈加害者による子どもへの暴力（全体・性別）〉

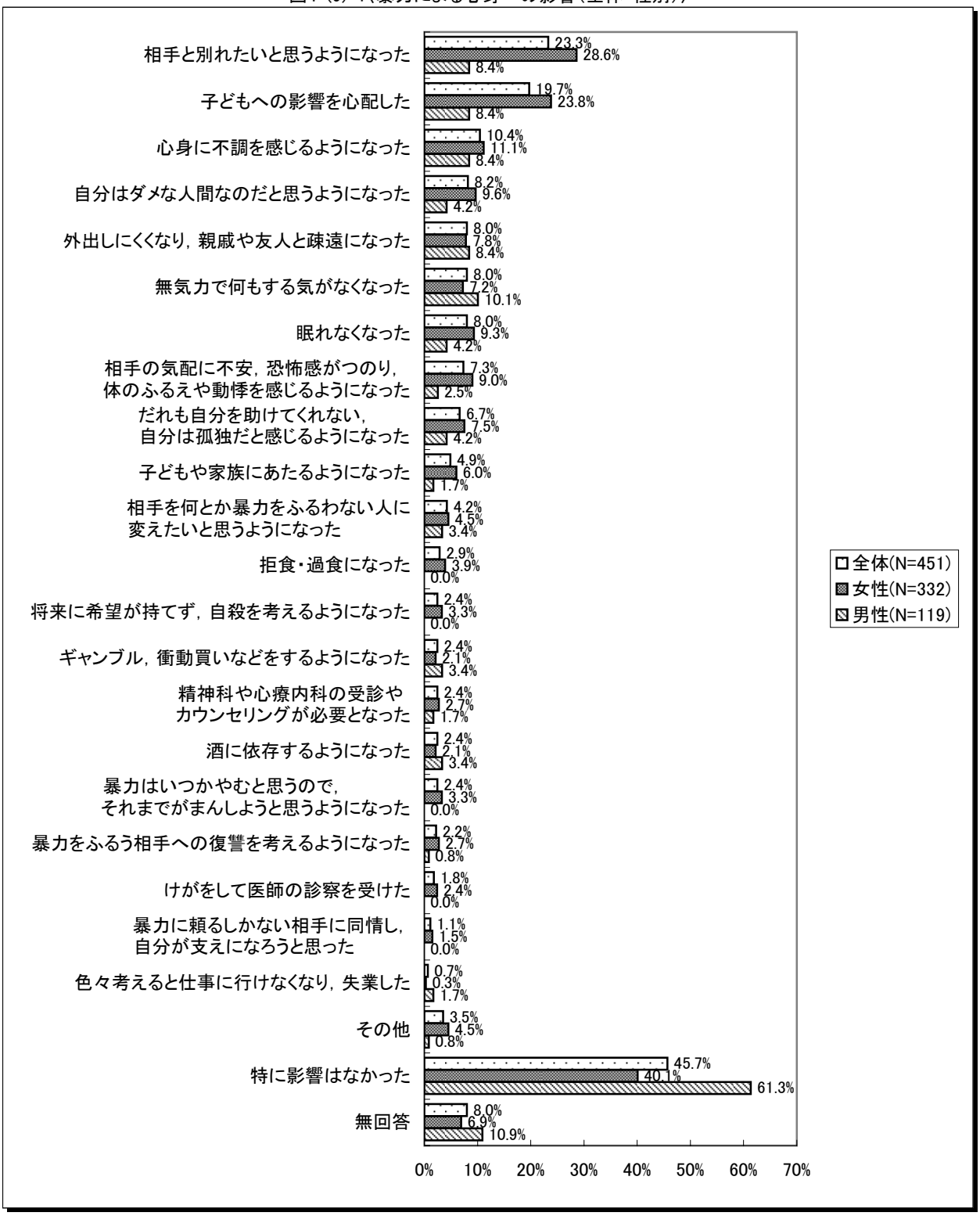


（9）暴力による心身への影響について［複数回答］

「特に影響はなかった」が45.7%と最も高くなっており，「相手と別れたいと思うようになった」(23.3%)，「子どもへの影響を心配した」(19.7%)と続いている。

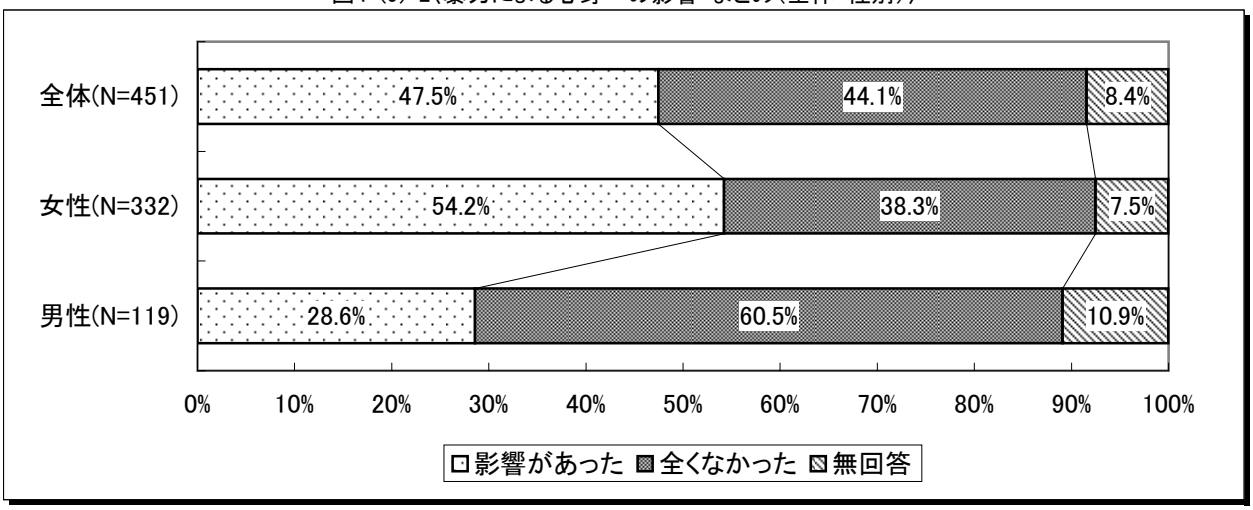
性別でみると，女性は全体と同様の傾向を示していることに対し，男性は「無気力で何もする気がなくなった」(10.1%)が最も高くなっている。また，「特に影響はなかった」「相手と別れたいと思うようになった」「子どもへの影響を心配した」については，男女間に大きな差がみられる。

図4-(9)-1〈暴力による心身への影響（全体・性別）〉



暴力被害経験者のうち，一つでも心身への影響があったと答えた人の割合は，47.5%で，性別でみると，男性28.6%に対して女性は54.2%の人が，何らかの影響があったと回答している。

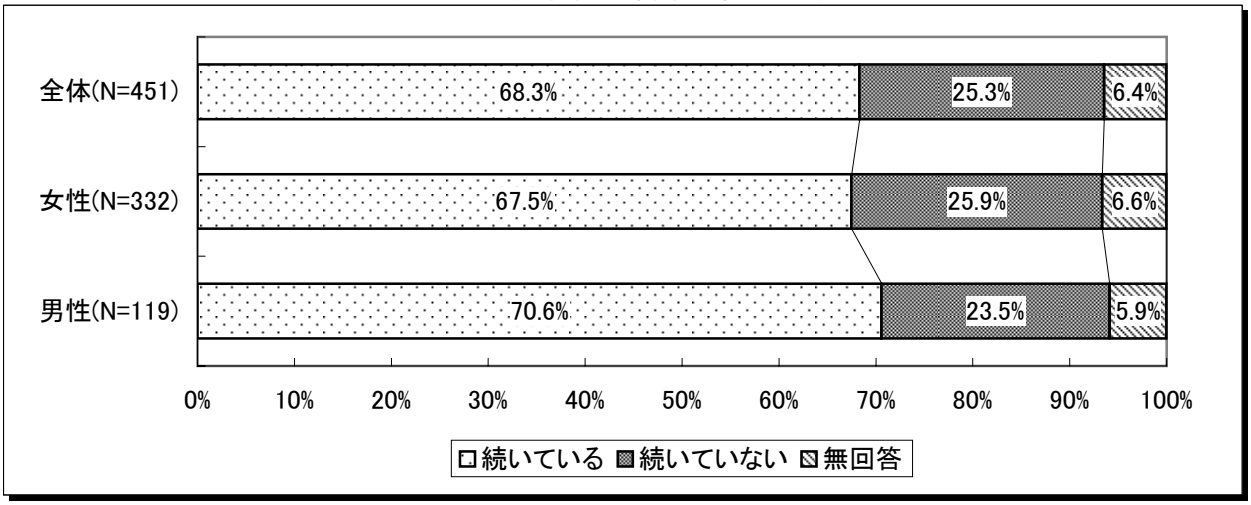
図4-(9)-2〈暴力による心身への影響・まとめ（全体・性別）〉



(10) 加害者との関係について

暴力加害者との関係は，「続いている」が68.3%，「続いていない」が25.3%となっている。
性別による大きな差はみられない。

図4-(10)〈加害者との関係（全体・性別）〉

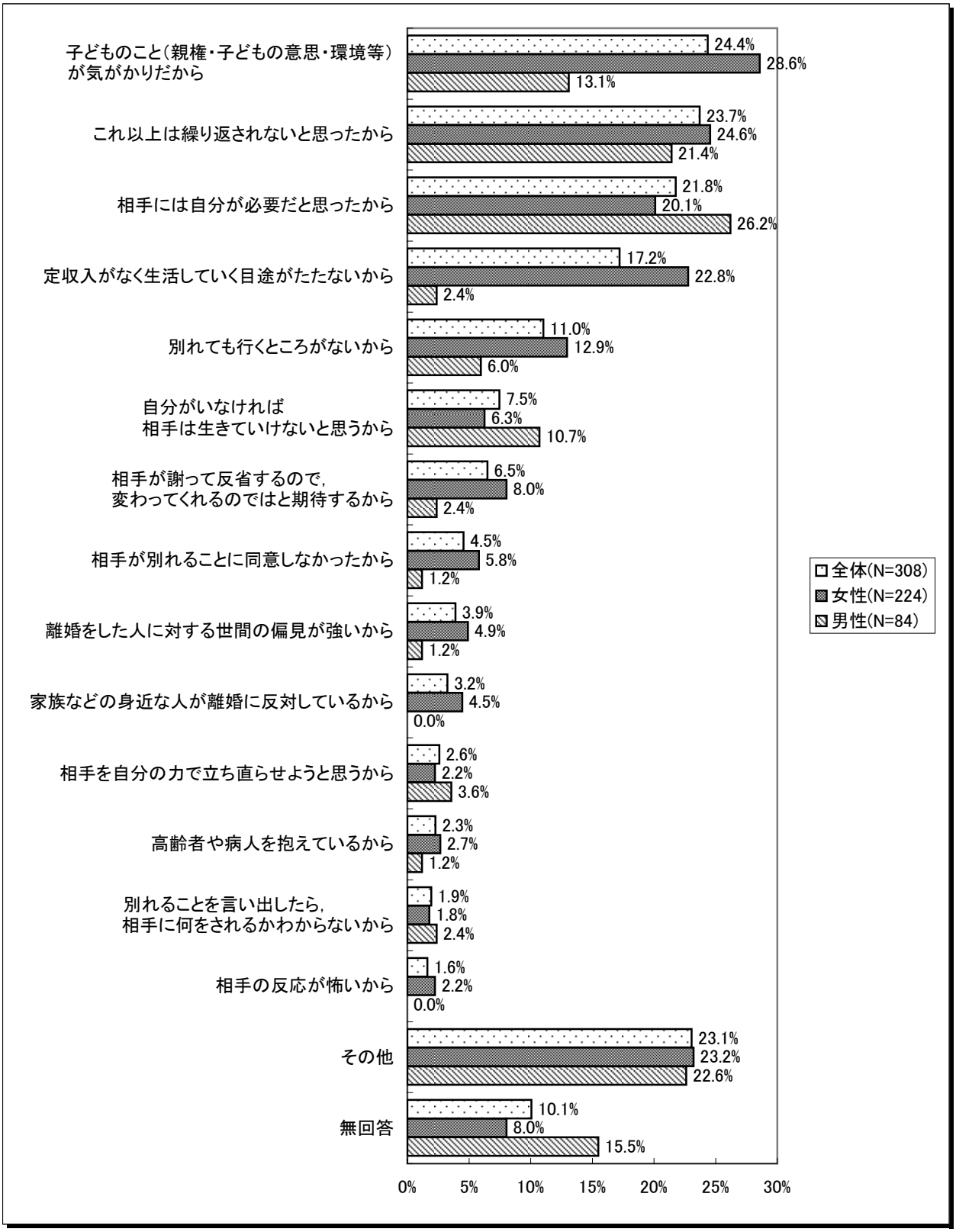


（11）加害者と関係が続いている理由について［複数回答］

性別でみると，女性は「子どものこと（親権・子どもの意思・環境等）が気がかりだから」(28.6%)が最も高く，次いで「これ以上は繰り返されないと思ったから」(24.6%)，「定収入がなく生活していく目途がたたないから」(22.8%)となっている。

一方，男性は「相手には自分が必要だと思ったから」(26.2%)が最も高くなっている。

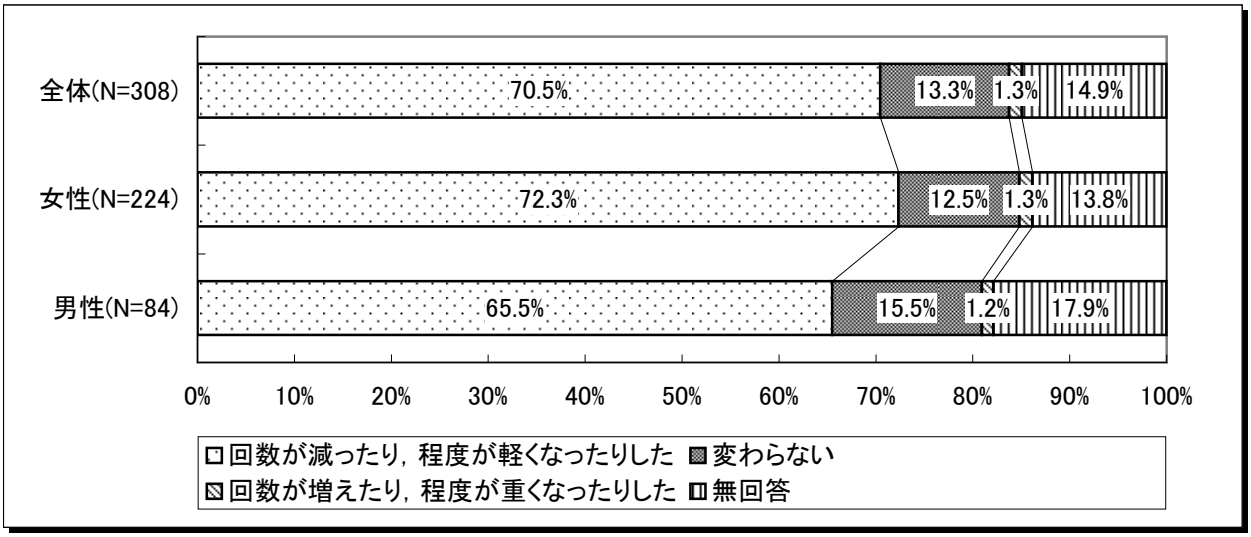
図4-(11)〈関係が続いている理由（全体・性別）〉



(12) 暴力行為の増減について

「回数が減ったり，程度が軽くなったりした」が70.5%，「変わらない」が13.3%，「回数が増えたり，程度が重くなったりした」が1.3%となっている。
性別でみると，「回数が減ったり，程度が軽くなったりした」と回答した女性が72.3%であることに対し，男性は65.5%となっている。

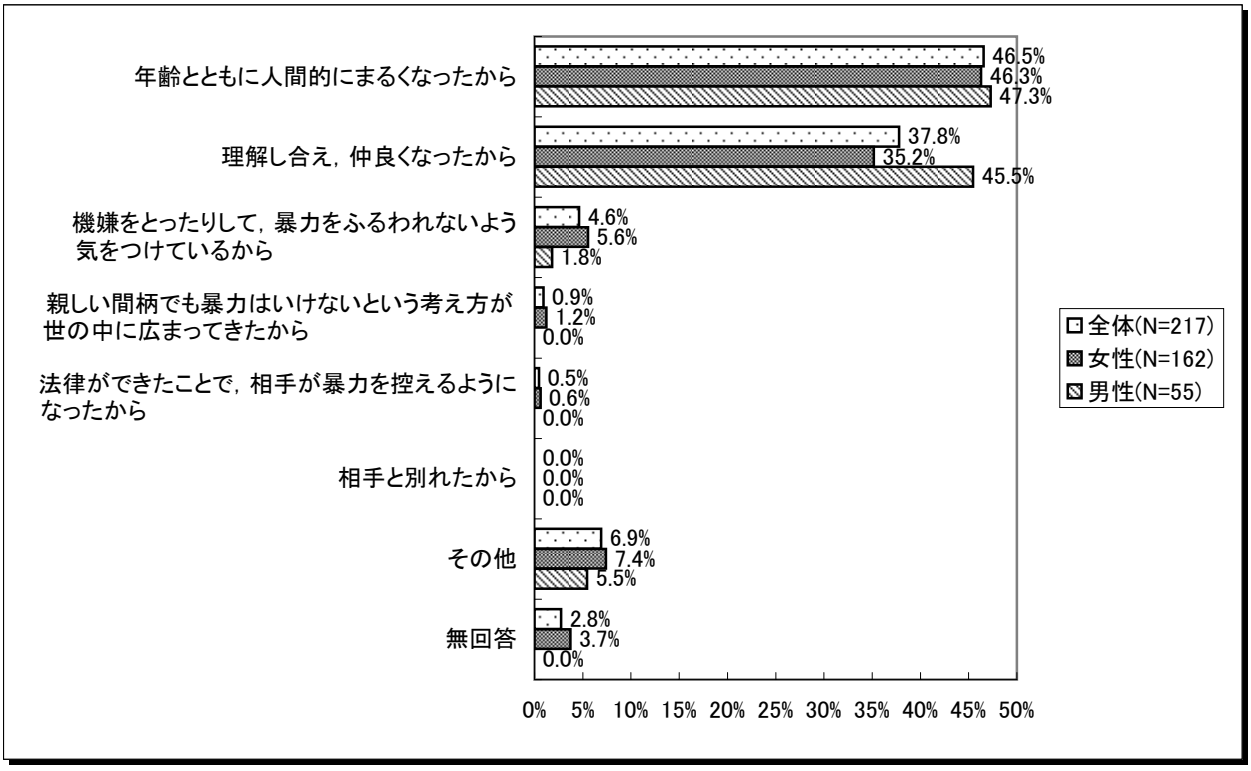
図4-(12)〈暴力行為の増減（全体・性別）〉



(13) 暴力行為の減少の理由について

「年齢とともに人間的にまるくなったから」が最も高く46.5%，次いで「理解し合え，仲良くなったから」(37.8%)となっている。
性別では「理解し合え，仲良くなったから」と回答した男性が女性より10.3ポイント高くなっている。

図4-(13)〈暴力行為の減少の理由（全体・性別）〉



(14) 暴力被害の相談先について［複数回答］

「どこ（だれ）にも相談しなかった」が49.9%と最も高く，「友人・知人に相談した」(23.5%)，「家族に相談した」(18.2%)と続いており，それ以外の相談先と差が開いている。

性別でみると，家族や友人・知人への相談は女性が男性を大きく上回っており，男性は「どこ（だれ）にも相談しなかった」とした回答が68.1%と高くなっている。

図4-(14)-1〈暴力被害の相談先（全体・性別）〉

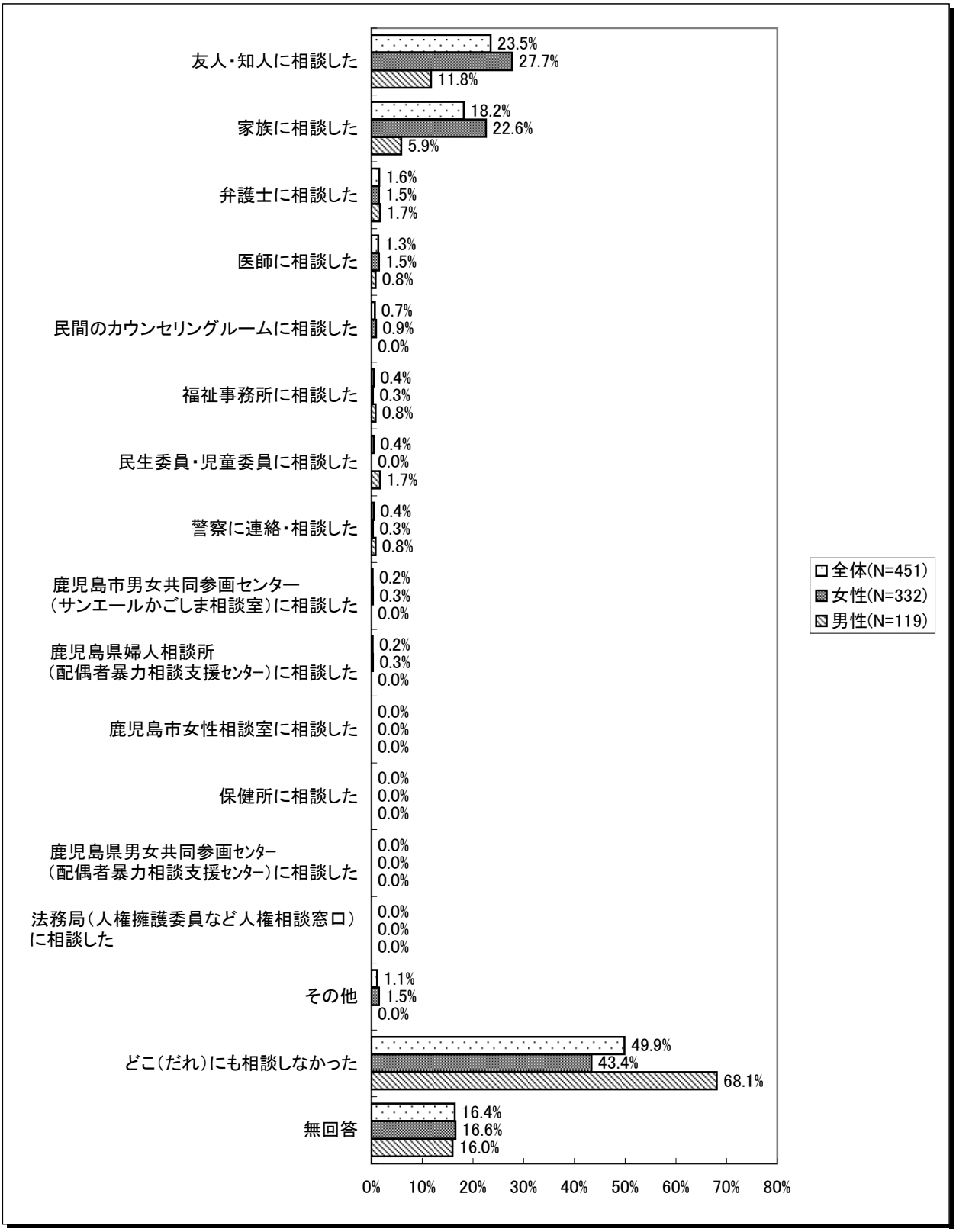


図4-(14)-2-①〈暴力被害の内容ごとにみた相談の有無：1，2度あった（女性）〉

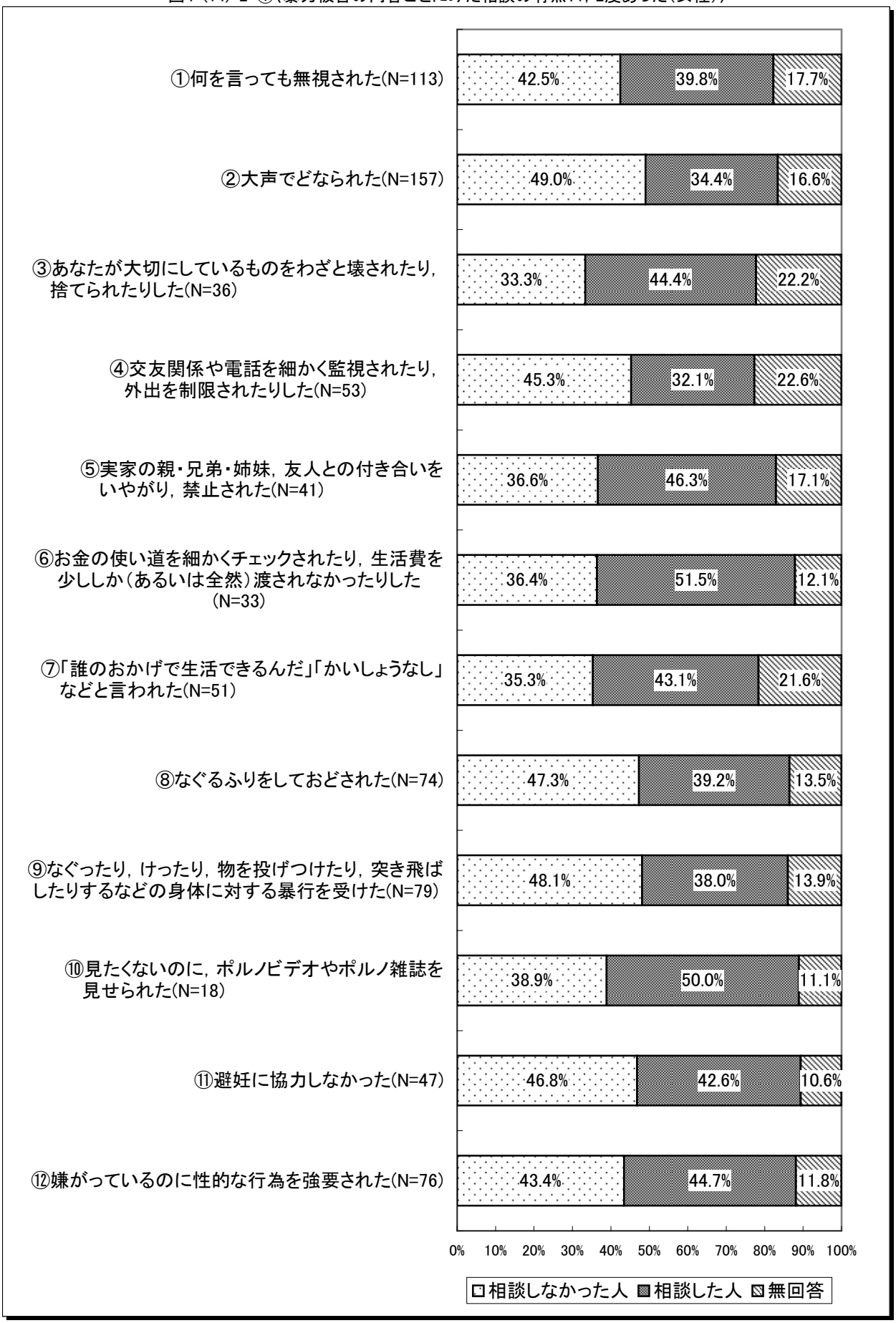


図4-(14)-2-②〈暴力被害の内容ごとにみた相談の有無：何度もあった（女性）〉

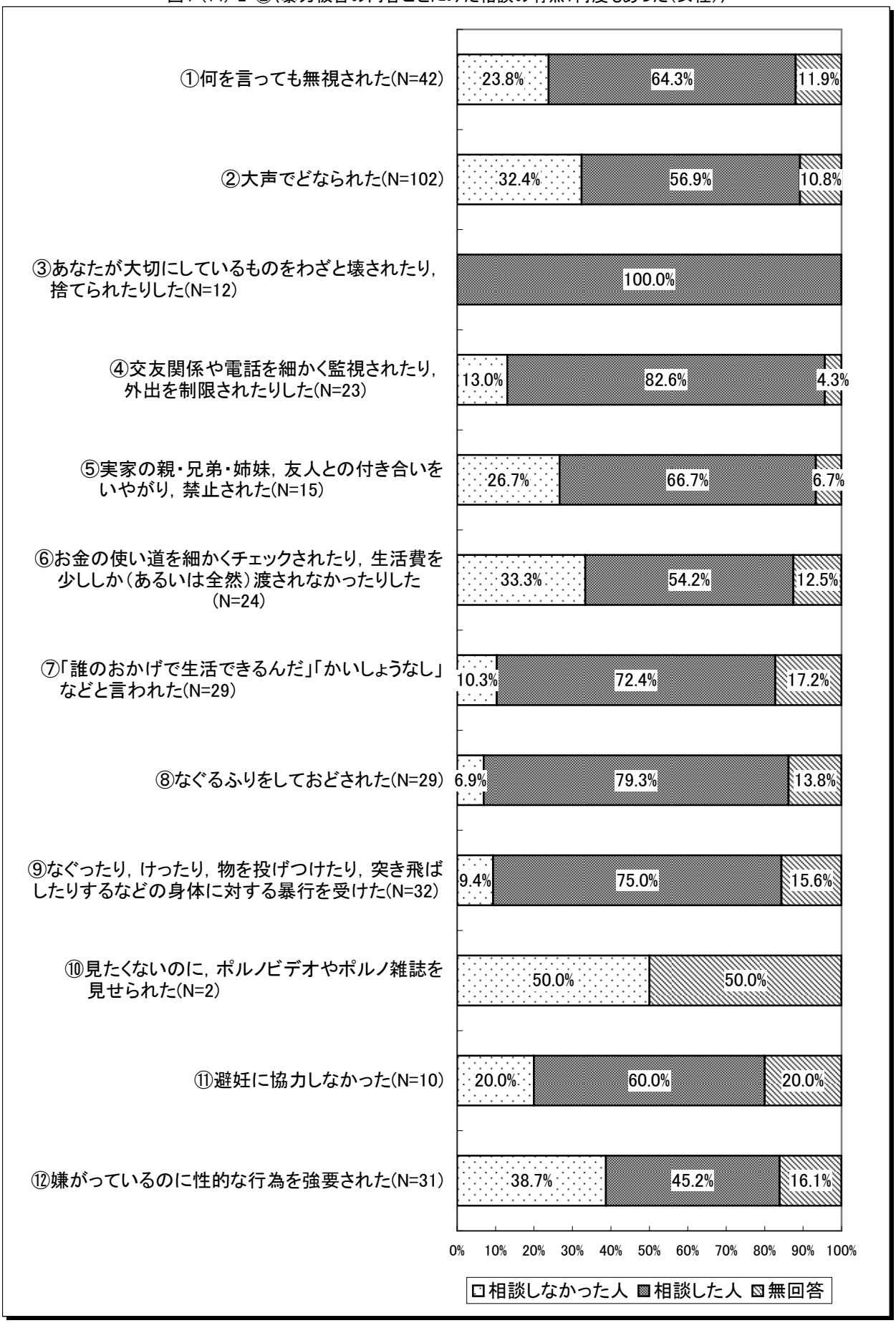


図4-(14)-2-③〈暴力被害の内容ごとにみた相談の有無：1，2度あった（男性）〉

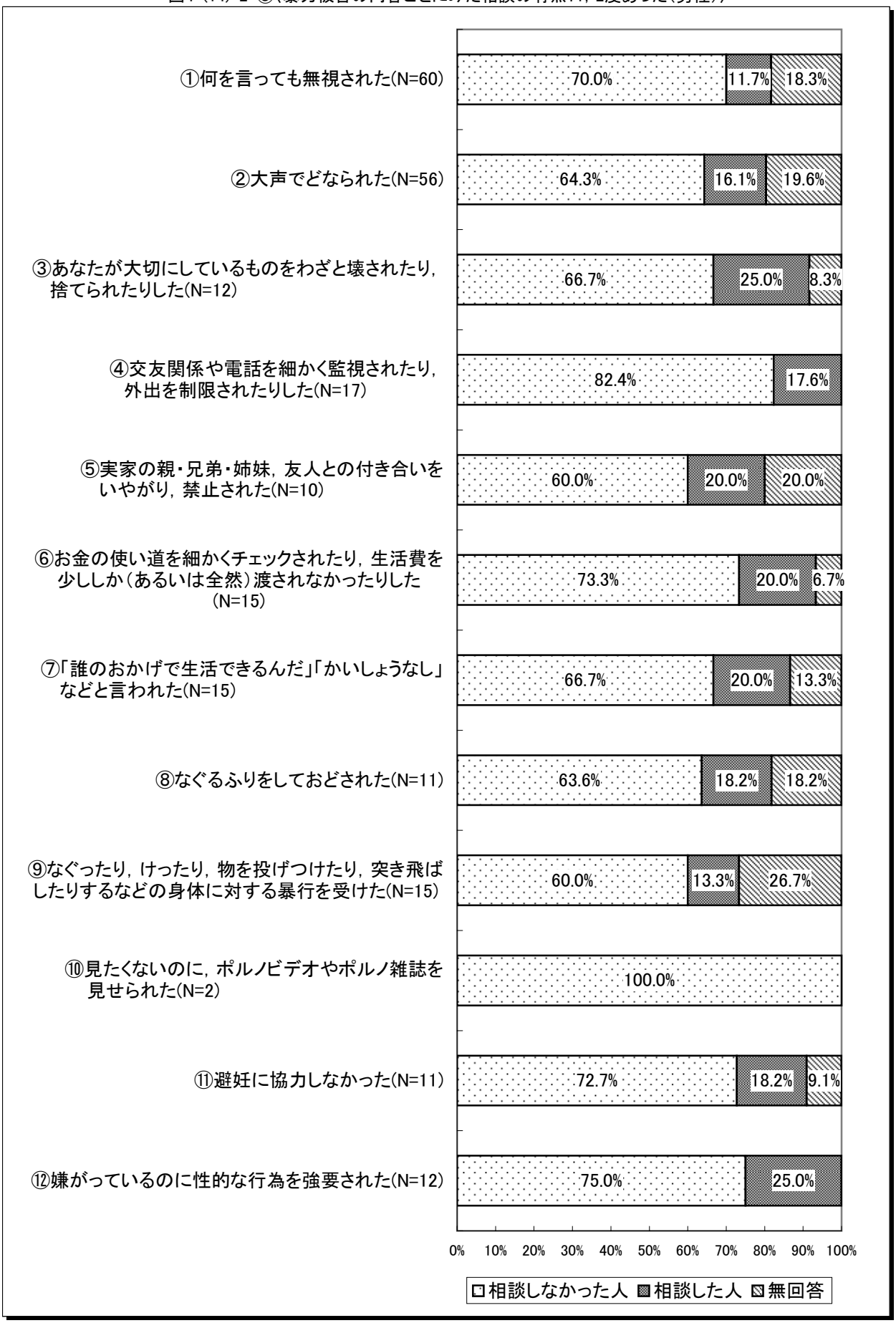
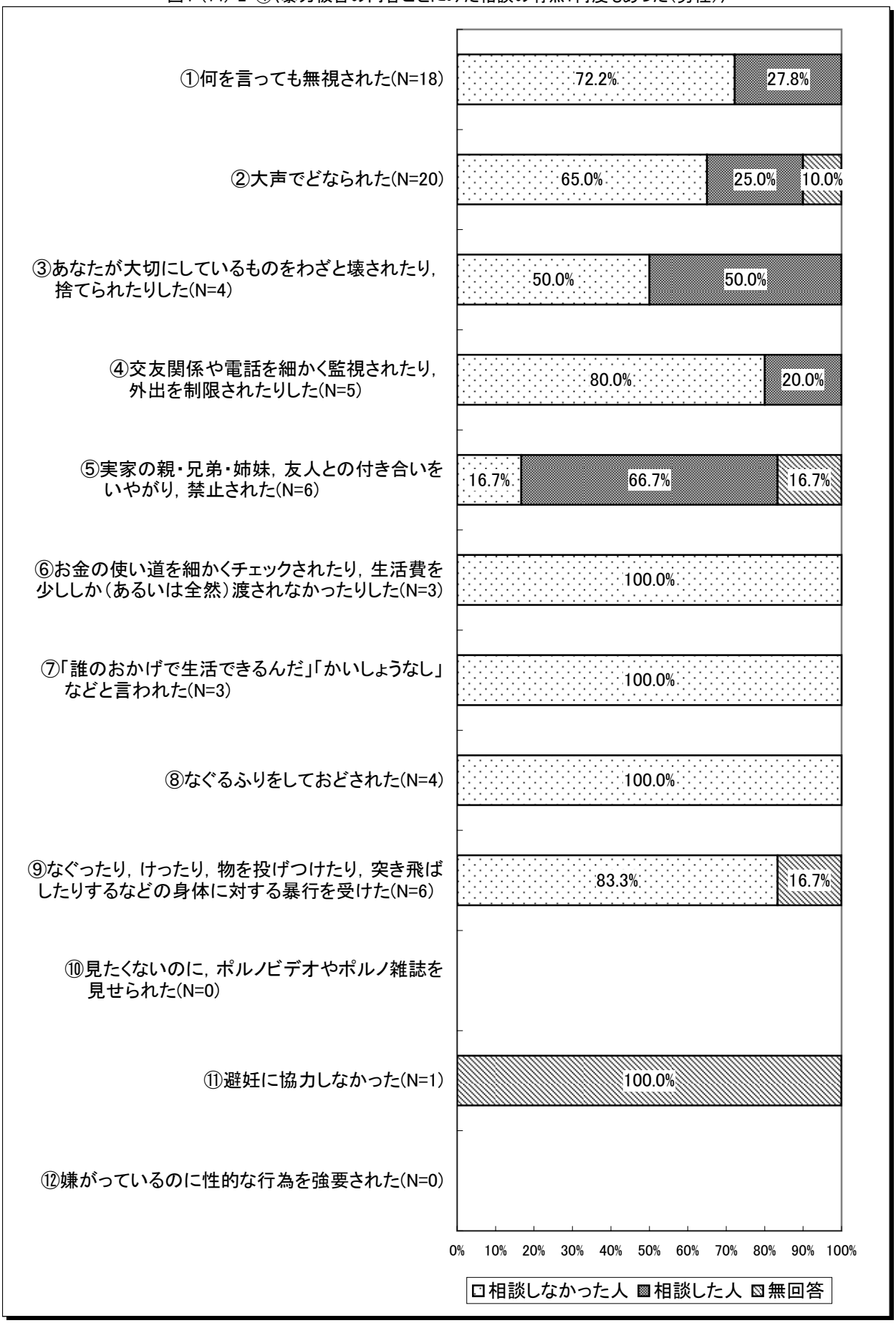


図4-(14)-2-④〈暴力被害の内容ごとにみた相談の有無：何度もあった（男性）〉



【参考：前回調査・内閣府調査との比較】

暴力被害を受けた女性の相談の有無について，今回調査とは設問項目が異なるため単純に比較することはできないが，何らかの相談をした人の割合が，前回28.8%であったものが40.1%となっている。

図4-(14)-3-①〈暴力被害相談の有無（女性）〉

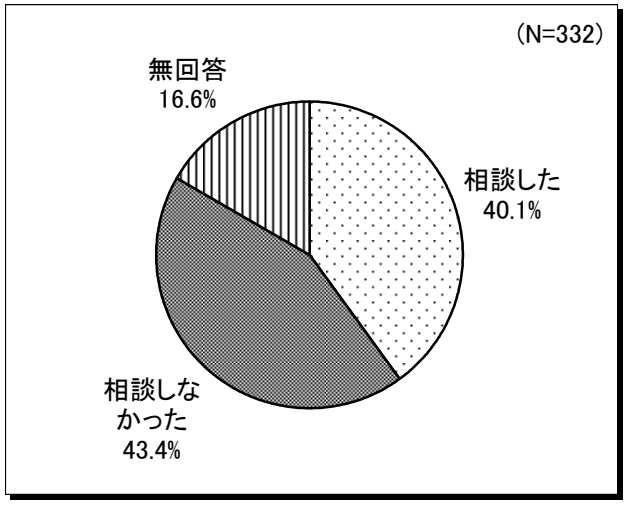
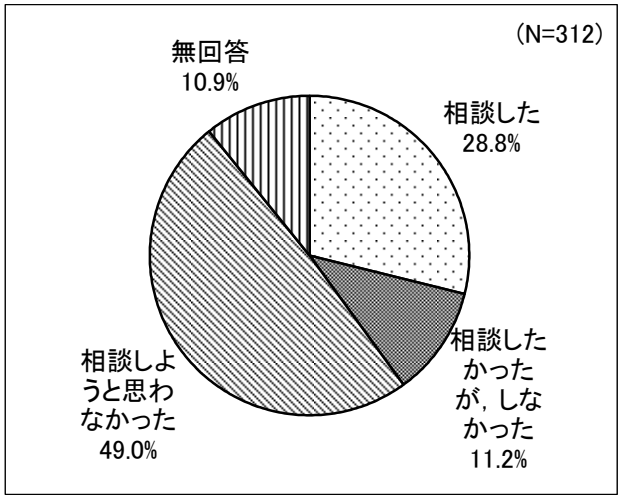
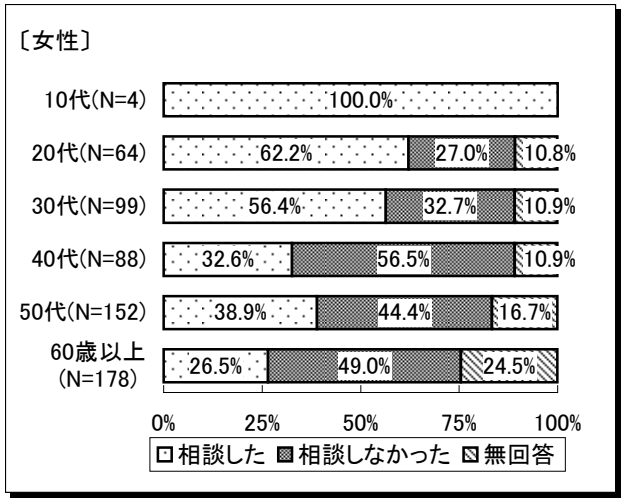


図4-(14)-3-②〈前回調査：暴力被害相談の有無（女性）〉



年代別に相談の有無を比較すると，内閣府調査では30代女性の相談した割合が高くなっているのに対し，本市調査では20代女性の割合が高くなっている。男性の傾向については，ともに30代，40代の割合が高くなっている。

図4-(14)-4-①〈暴力被害相談の有無（性・年代別）〉



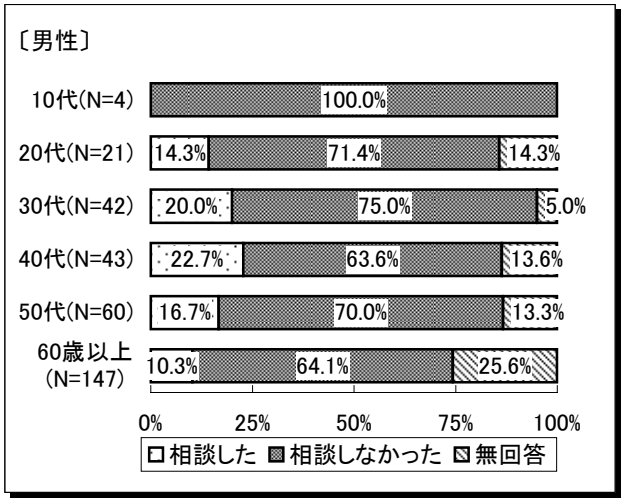
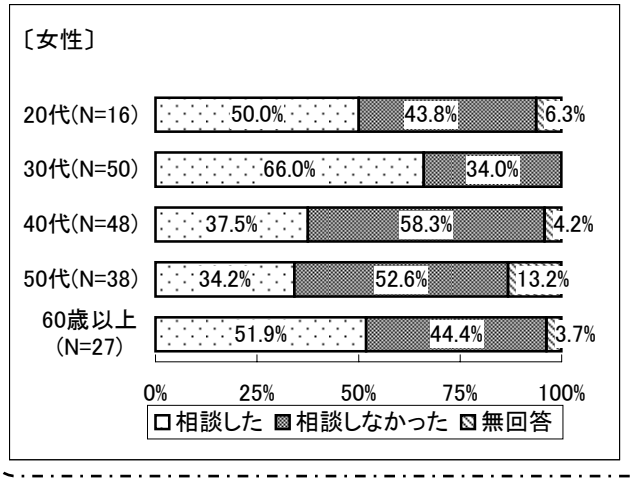
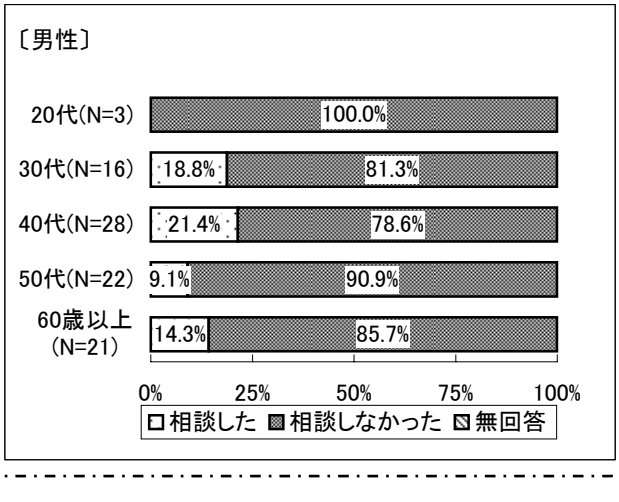


図4-(14)-4-②〈内閣府調査：暴力被害相談の有無（性・年代別）〉





【参考：前回調査・内閣府調査との比較】

暴力の被害を受けた人の相談先としては，本市前回調査及び内閣府調査ともに家族や友人・知人等の親しい相手の割合が高くなっており，今回調査と同様の傾向となっている。

図4-(14)-5-①〈前回調査：暴力被害相談先（女性）〉

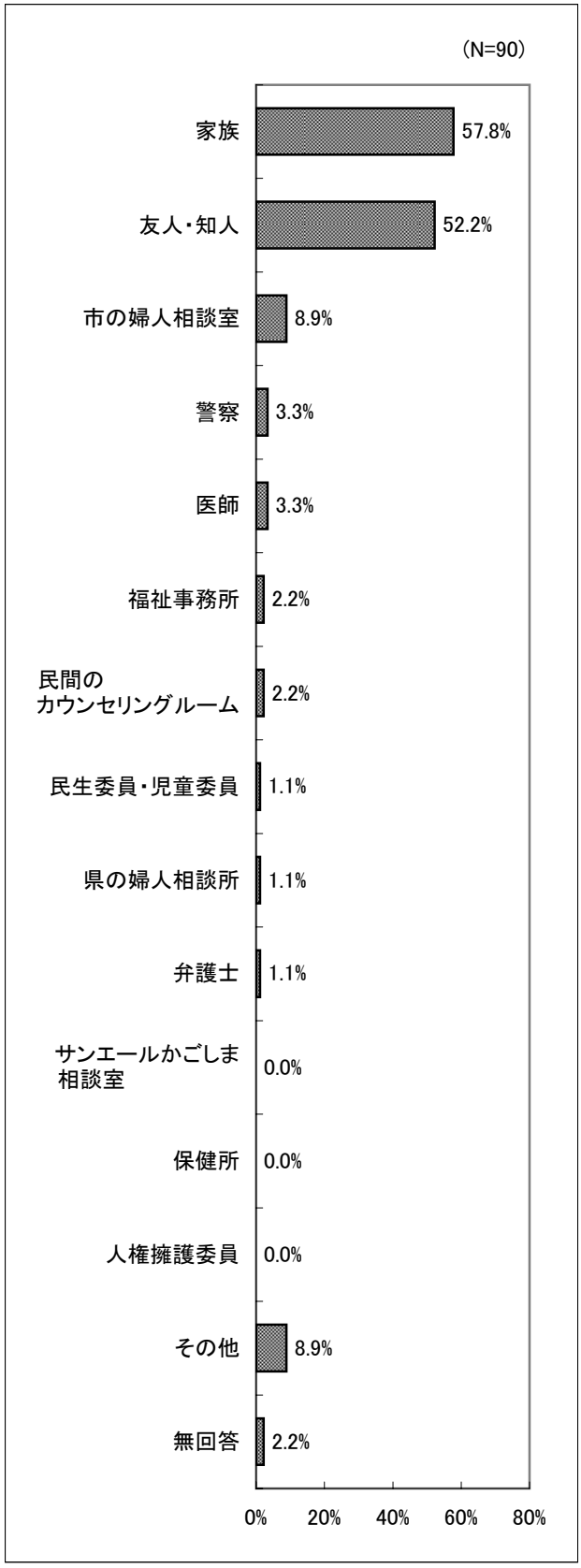
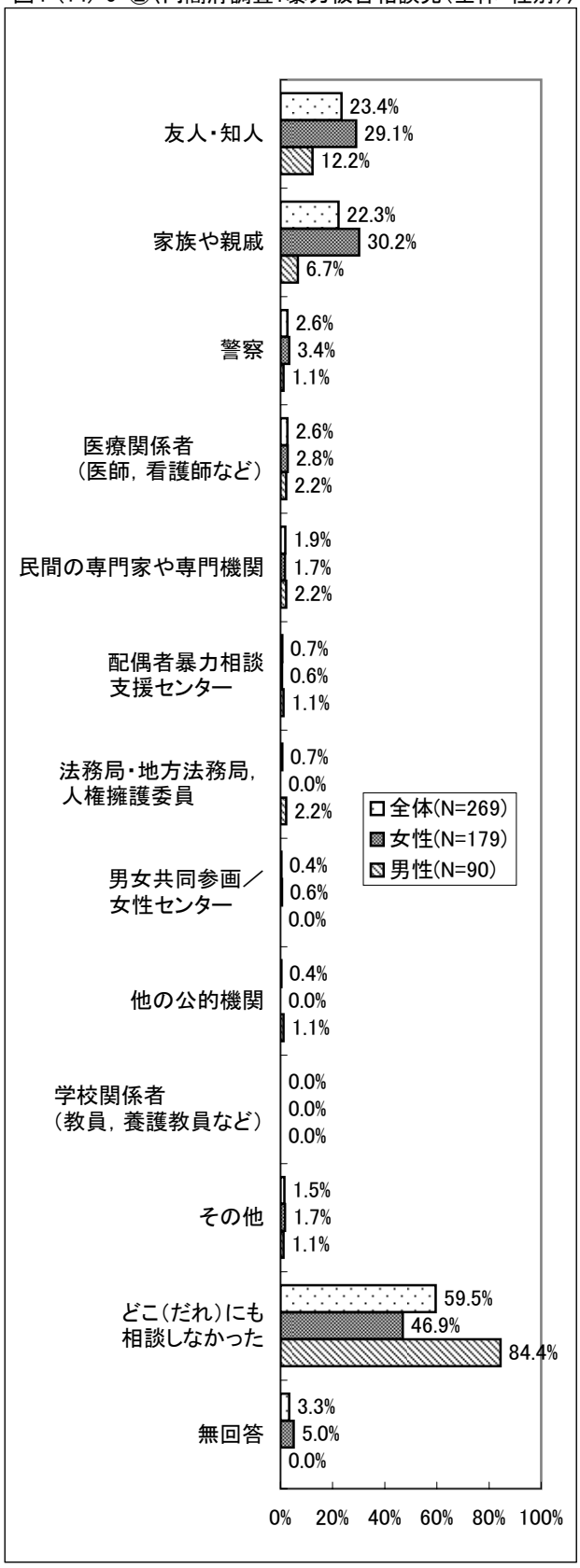


図4-(14)-5-②〈内閣府調査：暴力被害相談先（全体・性別）〉

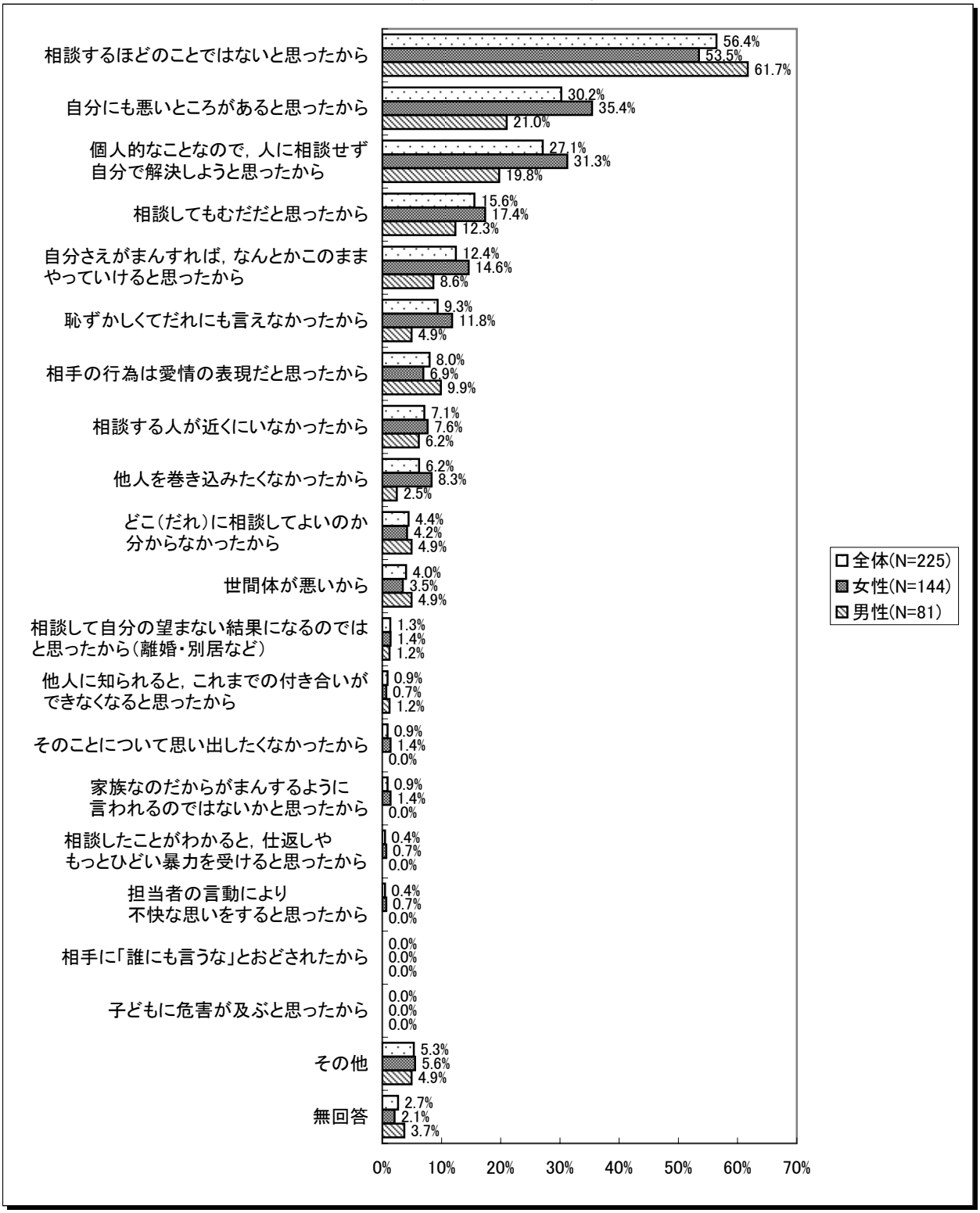


（15）相談しなかった理由について［複数回答］

「相談するほどのことではないと思ったから」が56.4%と最も高く，「自分にも悪いところがあると思ったから」(30.2%)，「個人的なことなので，人に相談せず自分で解決しようと思ったから」(27.1%)と続いている。

性別による傾向の違いは見られないが，「自分にも悪いところがあると思ったから」と「個人的なことなので，人に相談せず自分で解決しようと思ったから」では，女性が男性を10ポイント以上上回っている。

図4-(15)-1〈相談しなかった理由（全体・性別）〉



【参考：前回調査・内閣府調査との比較】

暴力被害を受けた女性がだれ（どこ）にも相談しなかった理由について，前回調査とは設問項目が異なるため単純に比較することはできないが，「自分にも悪いところがあると思った」，「個人的なことなので，人に相談せず自分で解決しようと思った」の割合が高くなっている点は，前回調査と同様の傾向である。

また，内閣府調査と比較すると，「相談するほどのことではないと思ったから」が最も高く，次いで「自分にも悪いところがあると思ったから」と同様の傾向を示している。

しかしながら，今回調査における「自分さえがまんすれば，なんとかこのままやっていけると思ったから」は，12.4%で前回調査及び内閣府調査と比べ低い割合となっている。

図4-(15)-2-①〈前回調査：相談しなかった理由（女性）〉

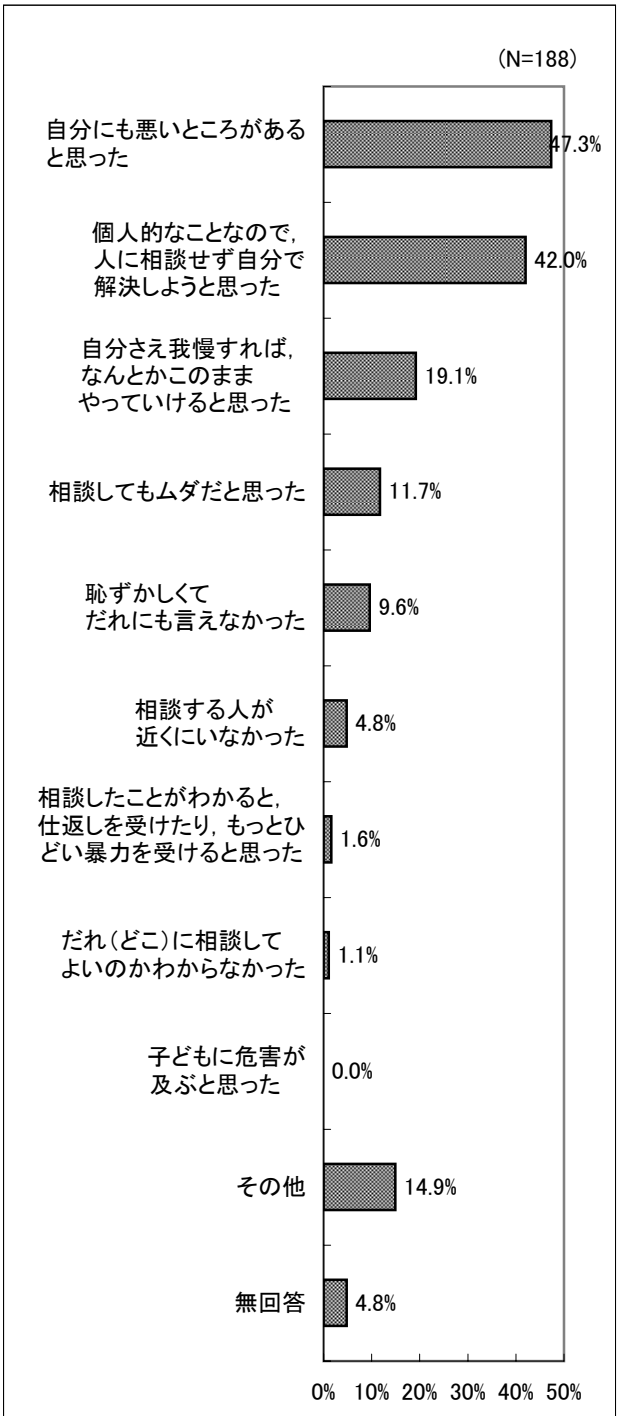


図4-(15)-2-②
〈内閣府調査：相談しなかった理由（全体・性別）〉

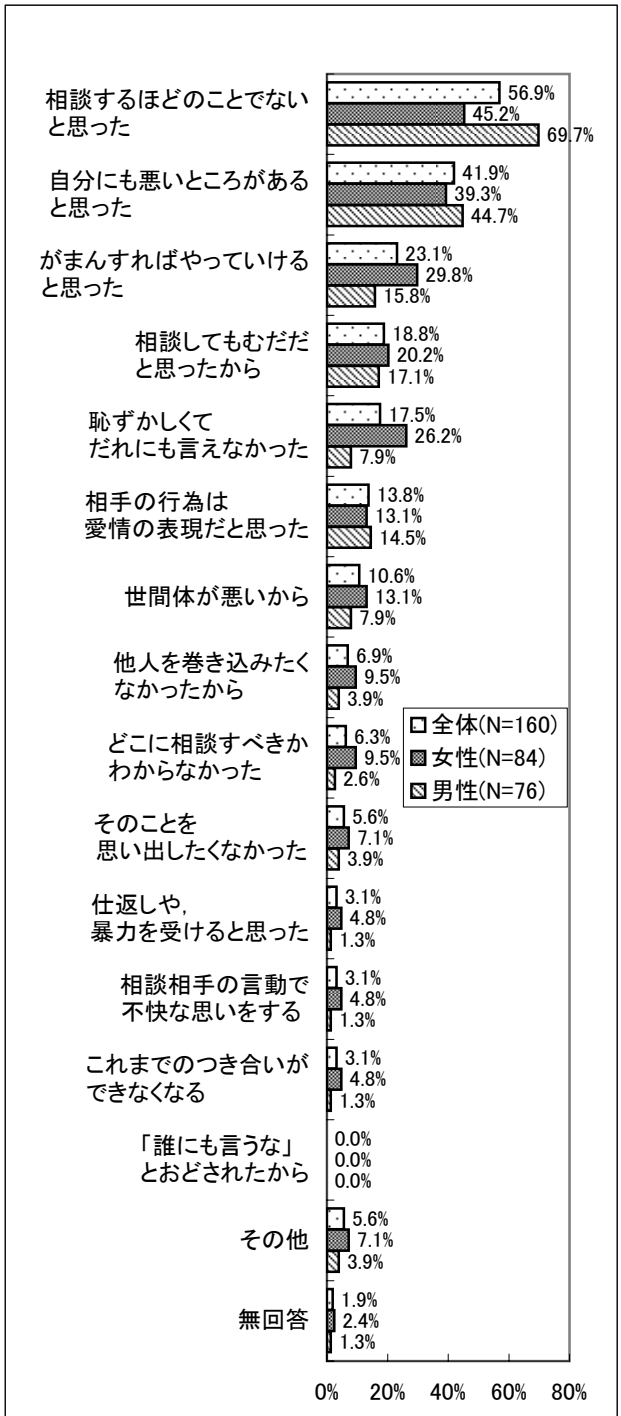


図4-(15)-3-①〈相談しなかった理由”何を言っても無視された”（全体・性別）〉

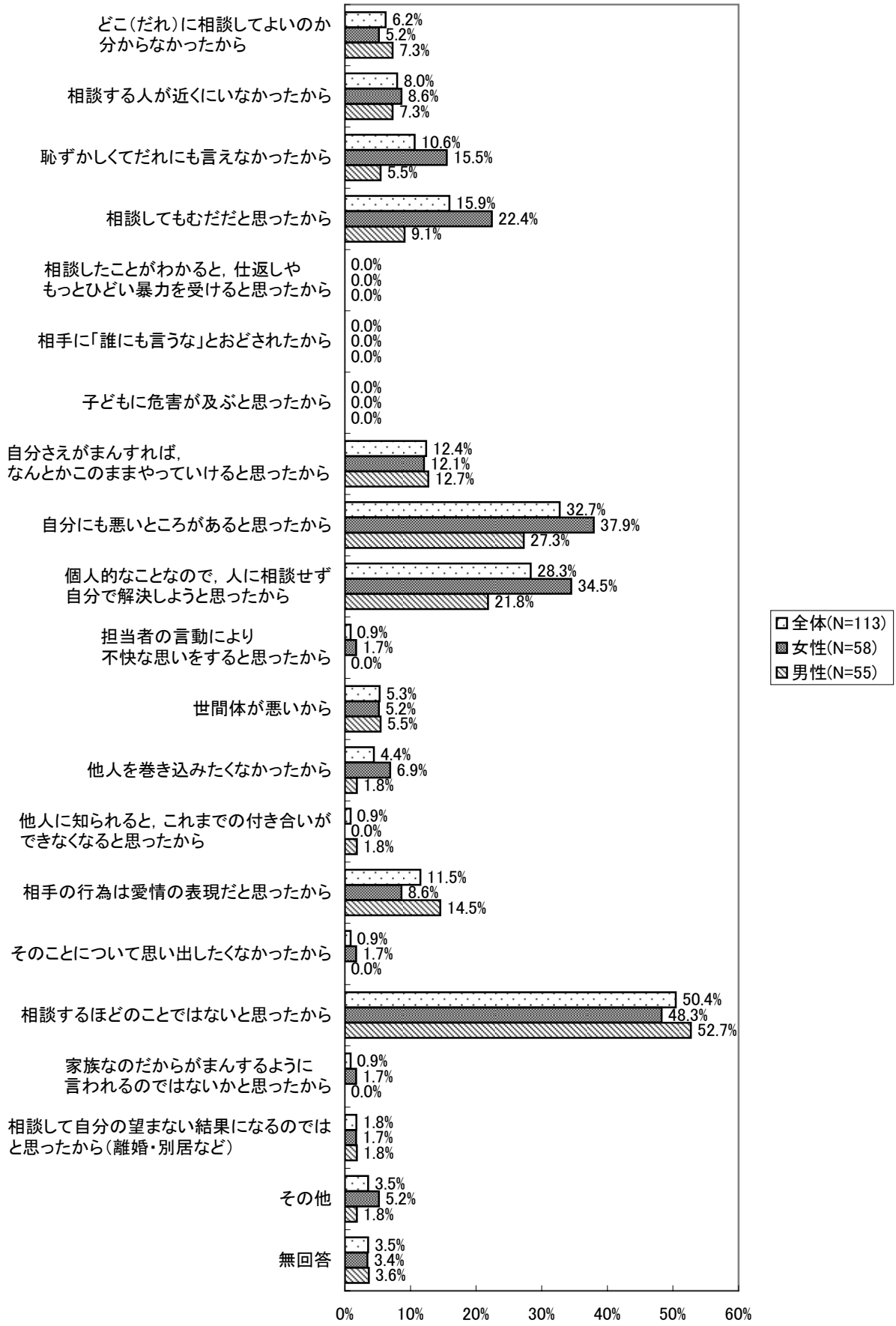


図4-(15)-3-②〈相談しなかった理由”大声でどなられた”（全体・性別）〉

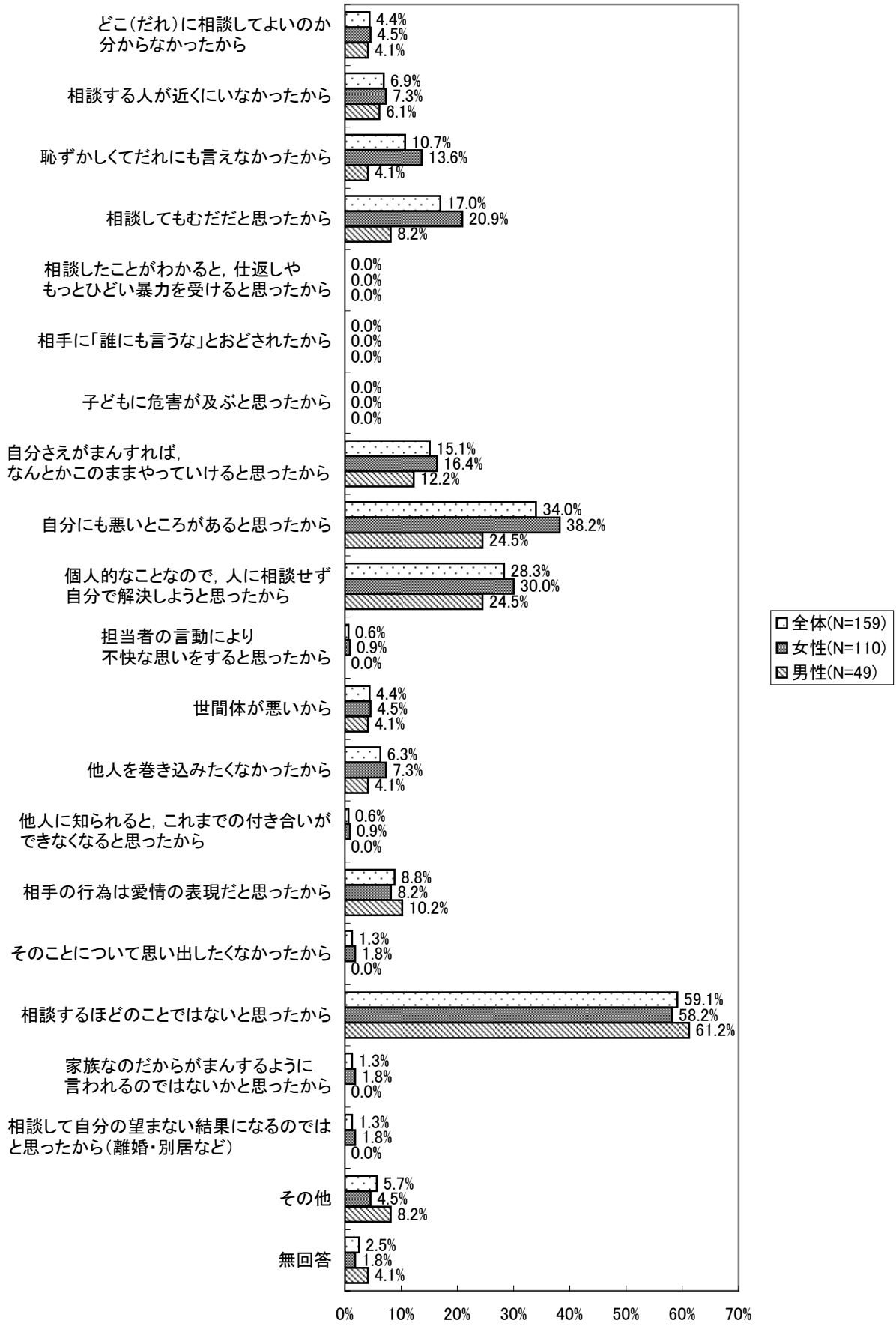


図4-(15)-3-③〈相談しなかった理由"あなたが大切にしているものをわざと壊されたり，捨てられたりした"（全体・性別）〉

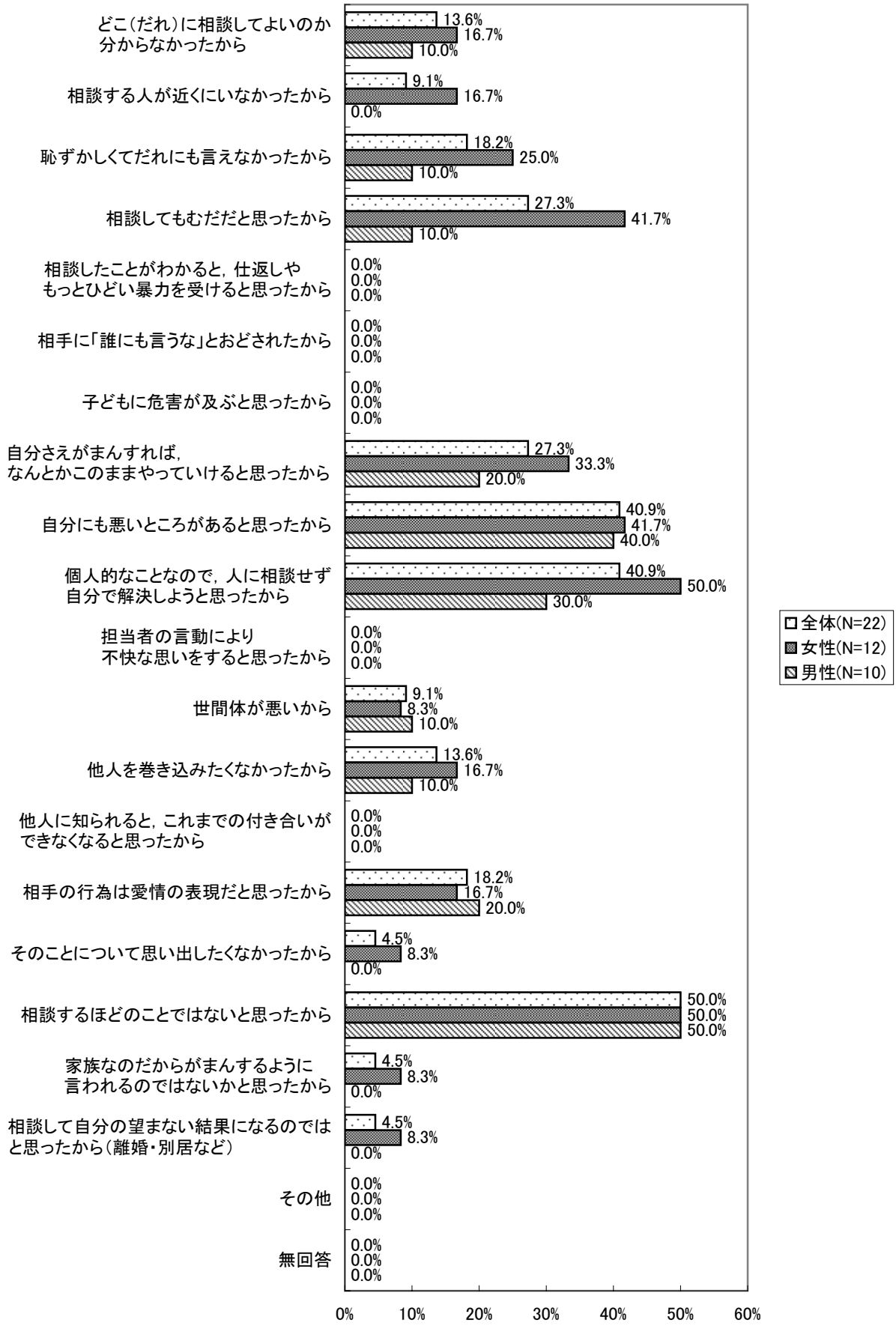


図4-(15)-3-④〈相談しなかった理由”交友関係や電話を細かく監視されたり，外出を制限されたりした”（全体・性別）〉

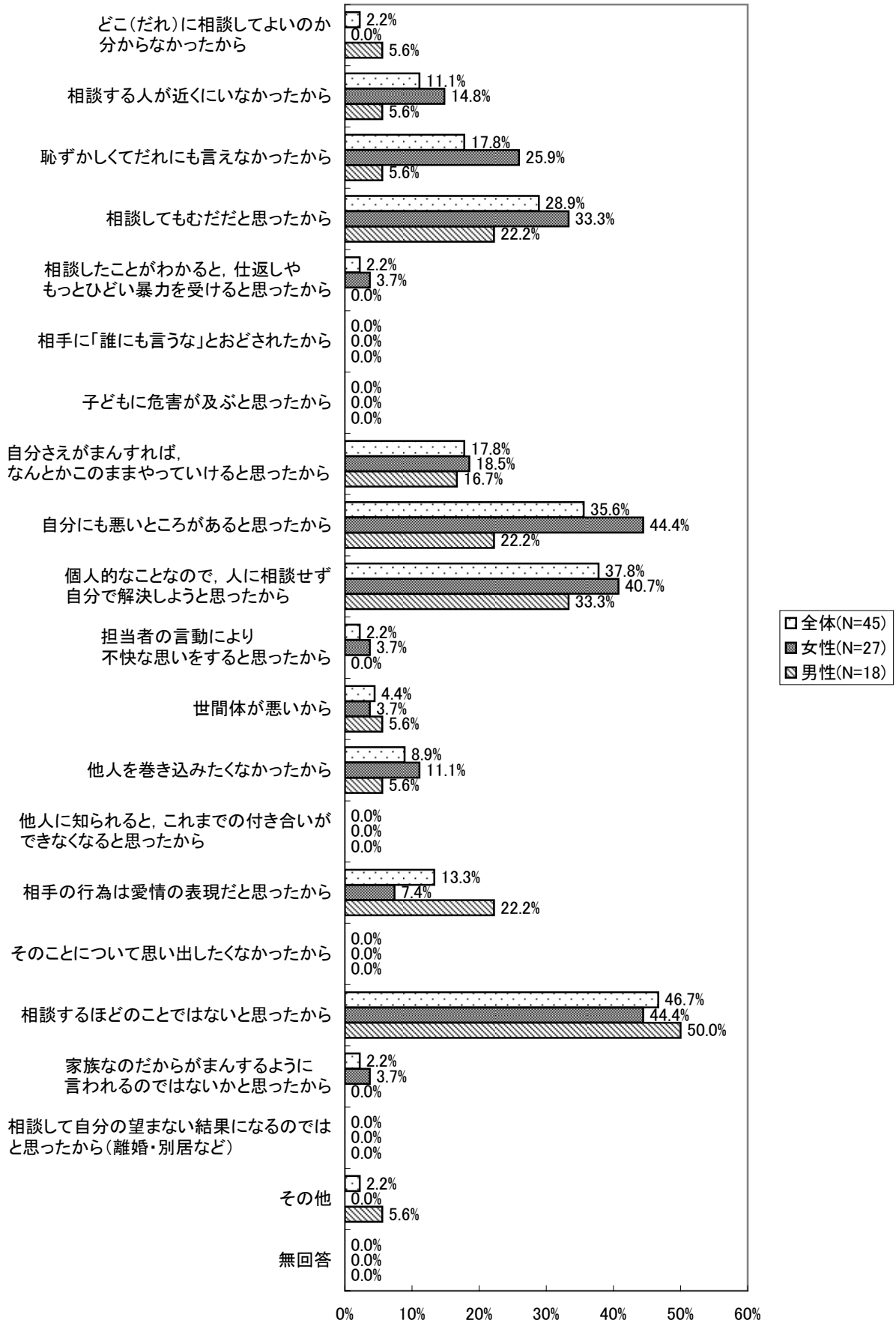


図4-(15)-3-⑤〈相談しなかった理由”実家の親・兄弟・姉妹，友人との付き合いをいやがり，禁止された”（全体・性別）〉

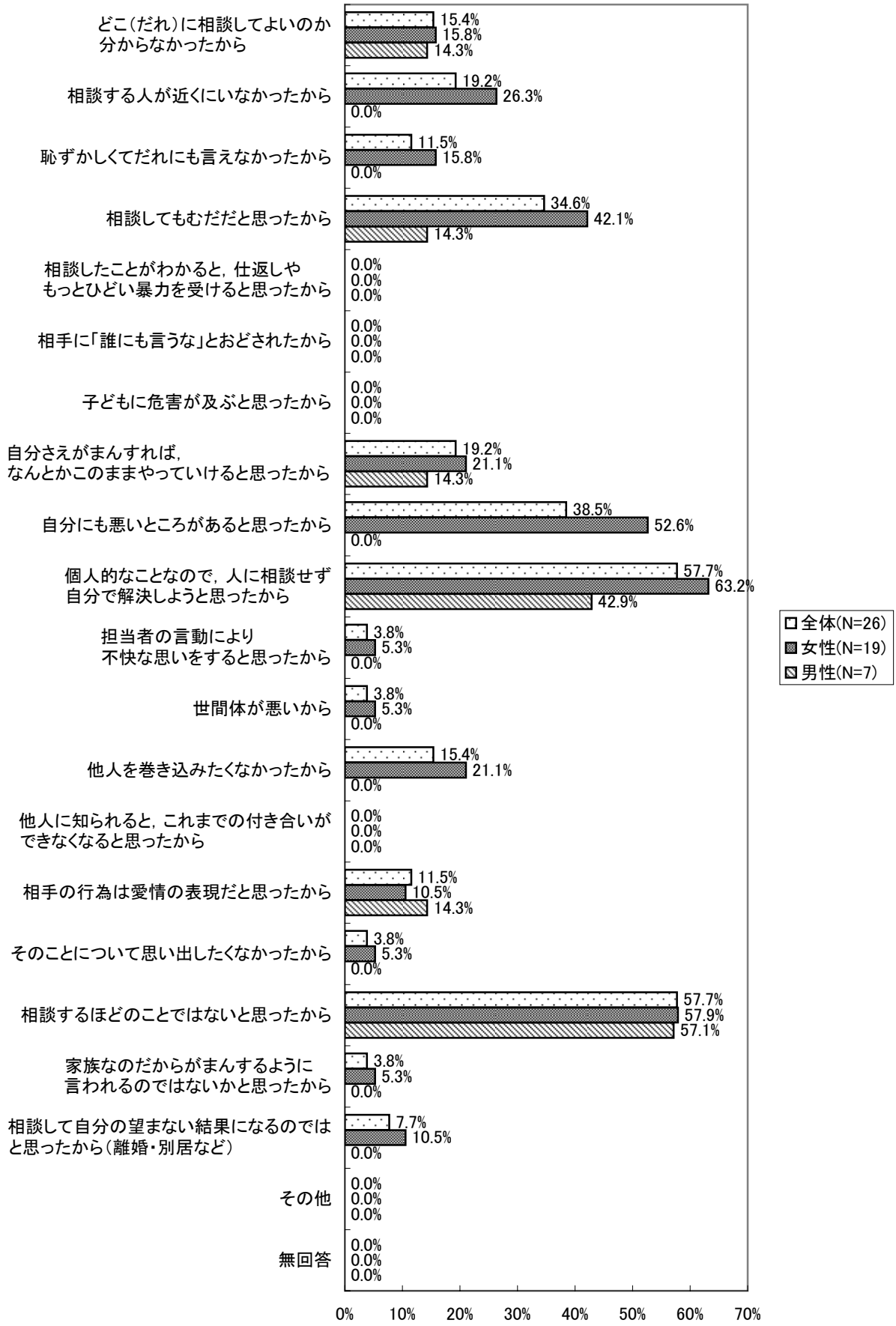


図4-(15)-3-⑥〈相談しなかった理由
”お金の使い道を細かくチェックされたり，生活費を少ししか（あるいは全然）渡されなかったりした”（全体・性別）〉

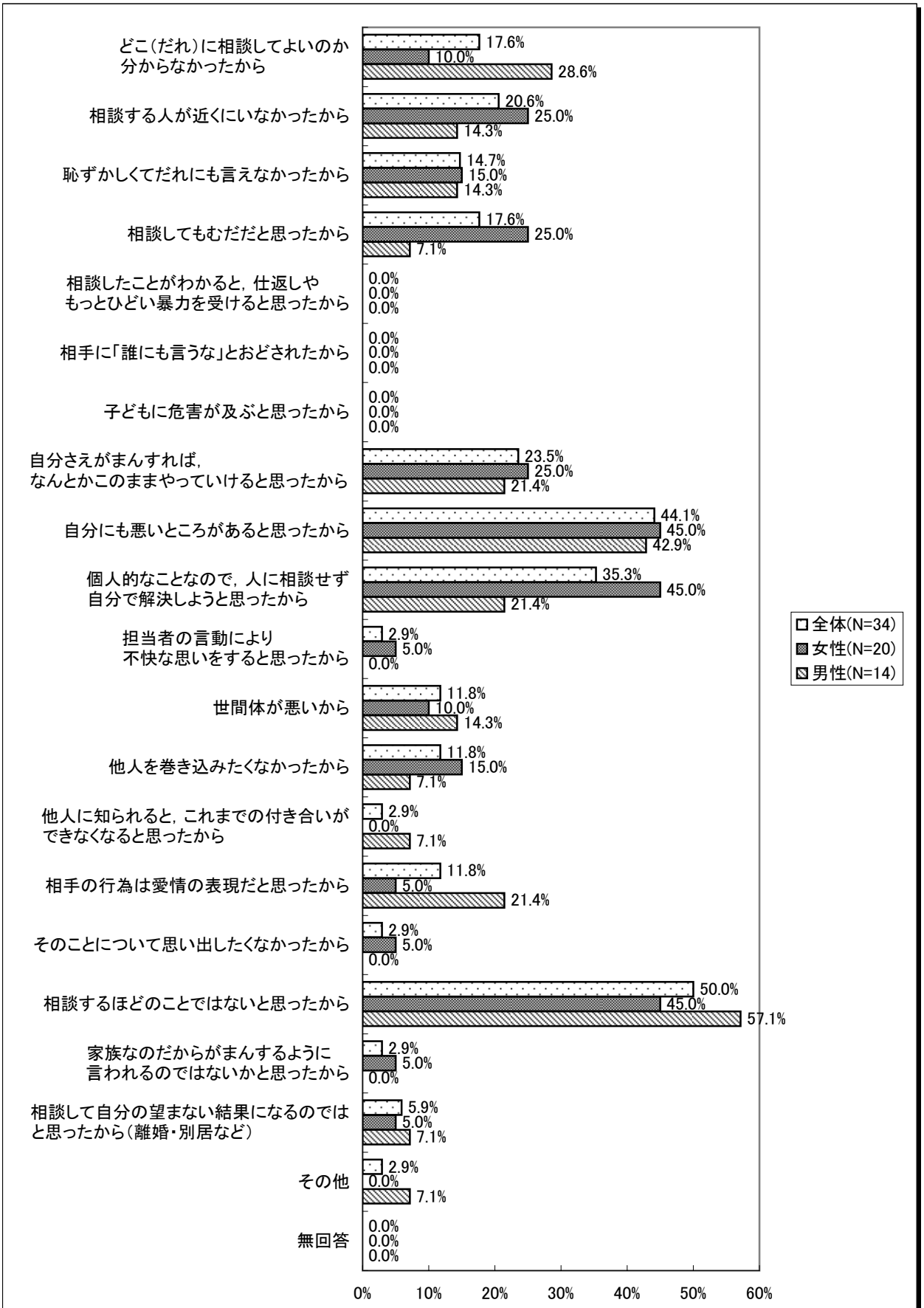


図4-(15)-3-⑦〈相談しなかった理由”「誰のおかげで生活できるんだ」「かいしょうなし」などと言われた”（全体・性別）〉

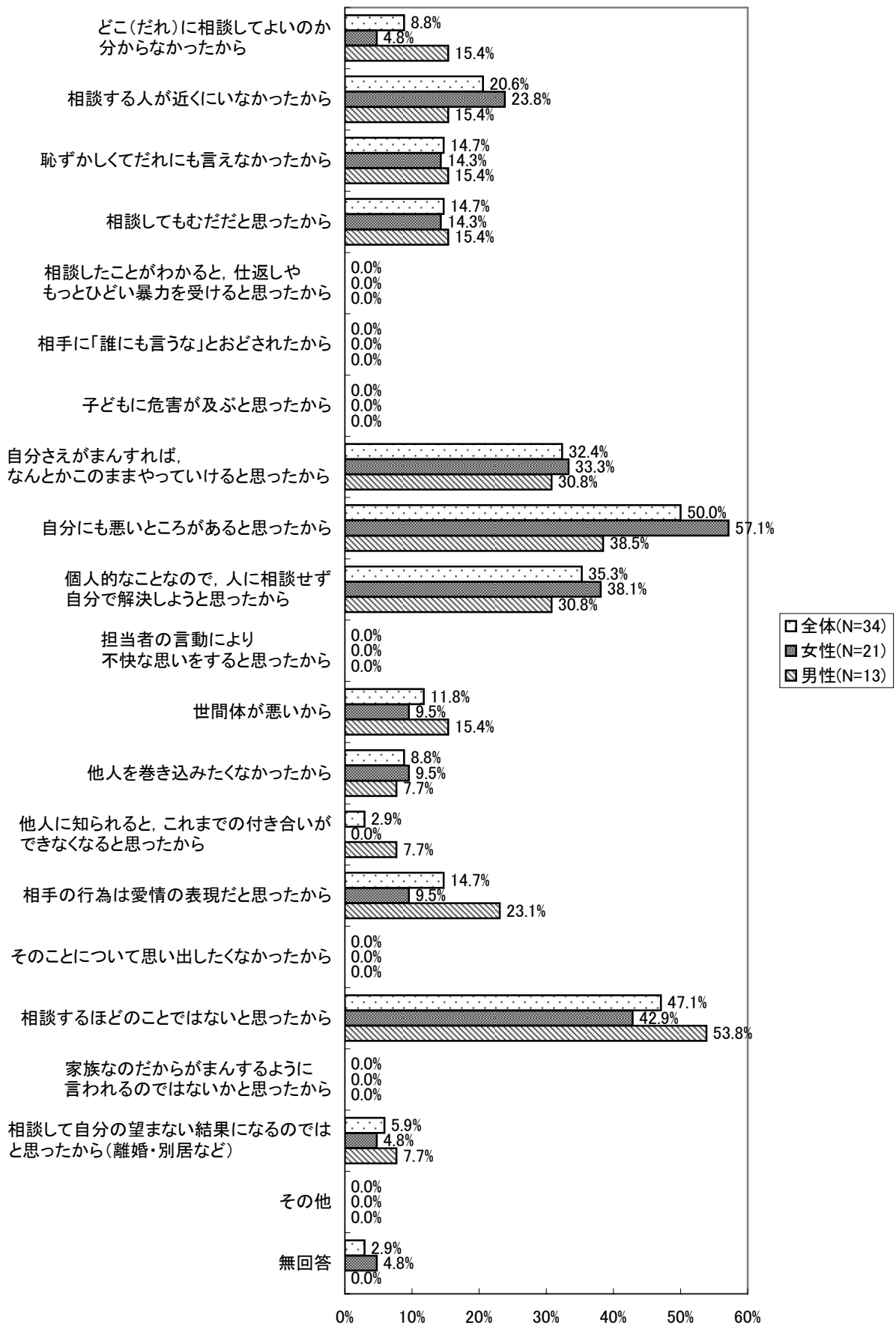


図4-(15)-3-⑧〈相談しなかった理由”なぐるふりをしておどされた”（全体・性別）〉

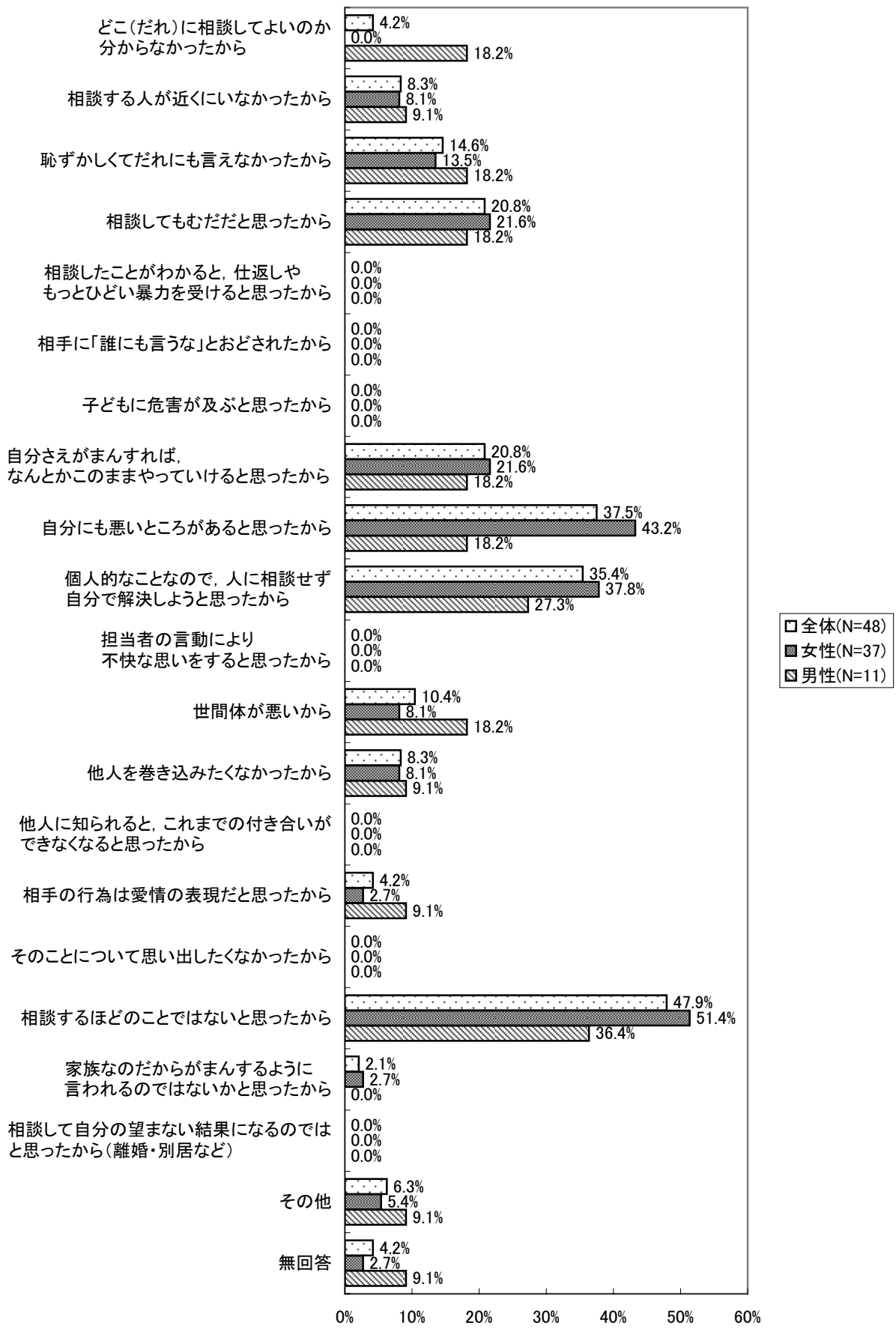


図4-(15)-3-⑨〈相談しなかった理由
”なぐったり，けったり，物を投げつけたり，突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行を受けた”（全体・性別）〉

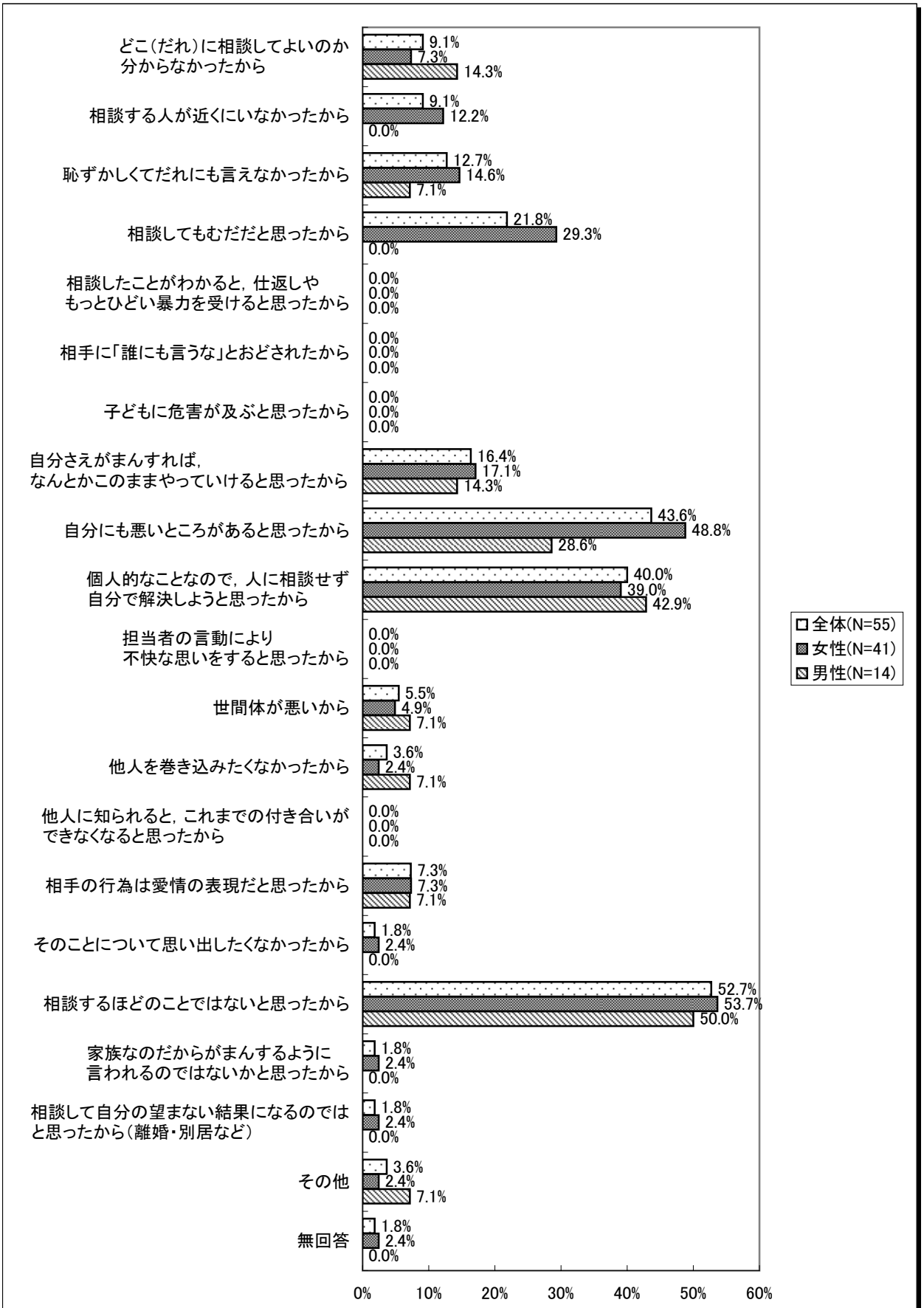


図4-(15)-3-⑩〈相談しなかった理由”見たくないのに，ポルノビデオやポルノ雑誌を見せられた”（全体・性別）〉

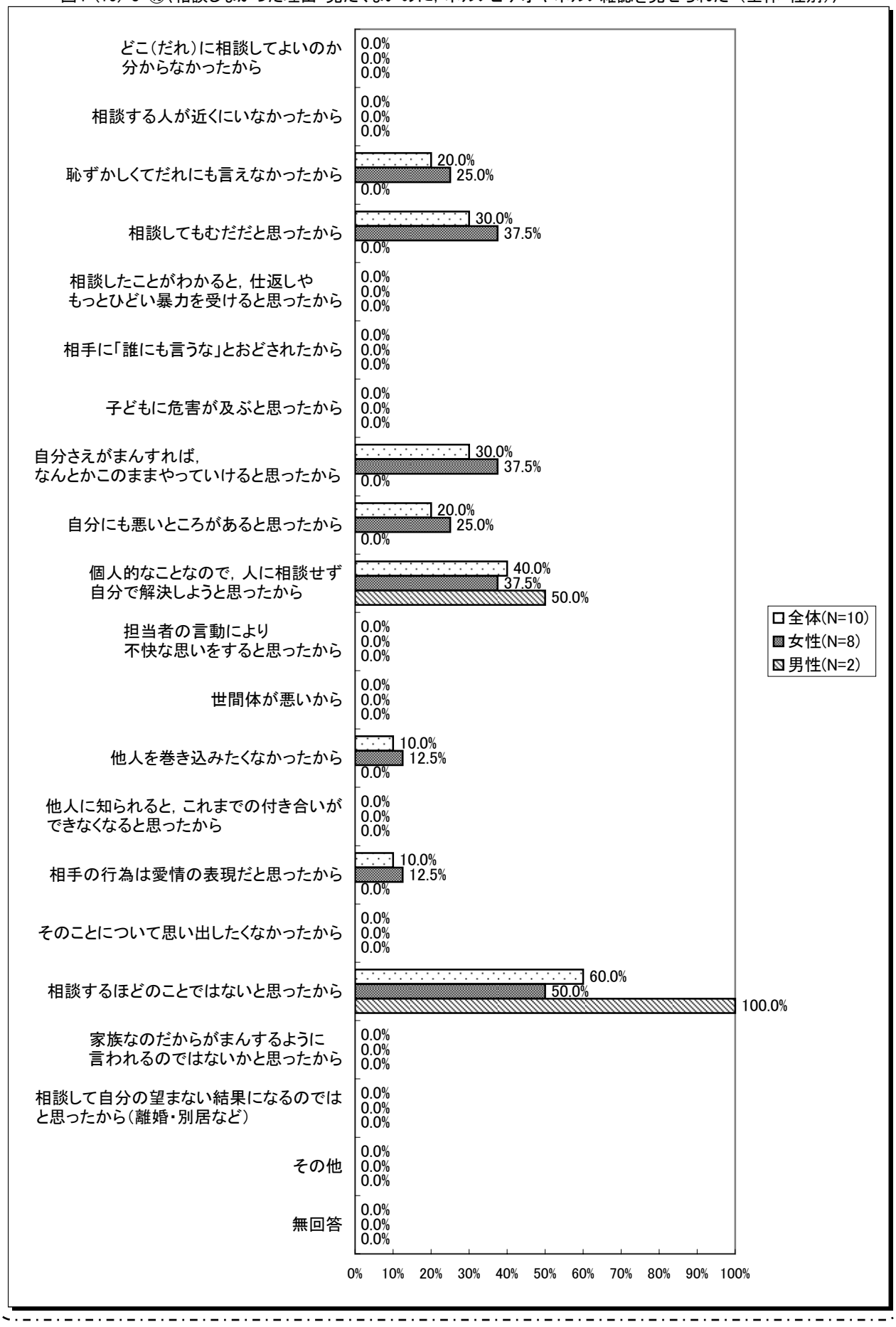


図4-(15)-3-⑪〈相談しなかった理由”避妊に協力しなかった”（全体・性別）〉

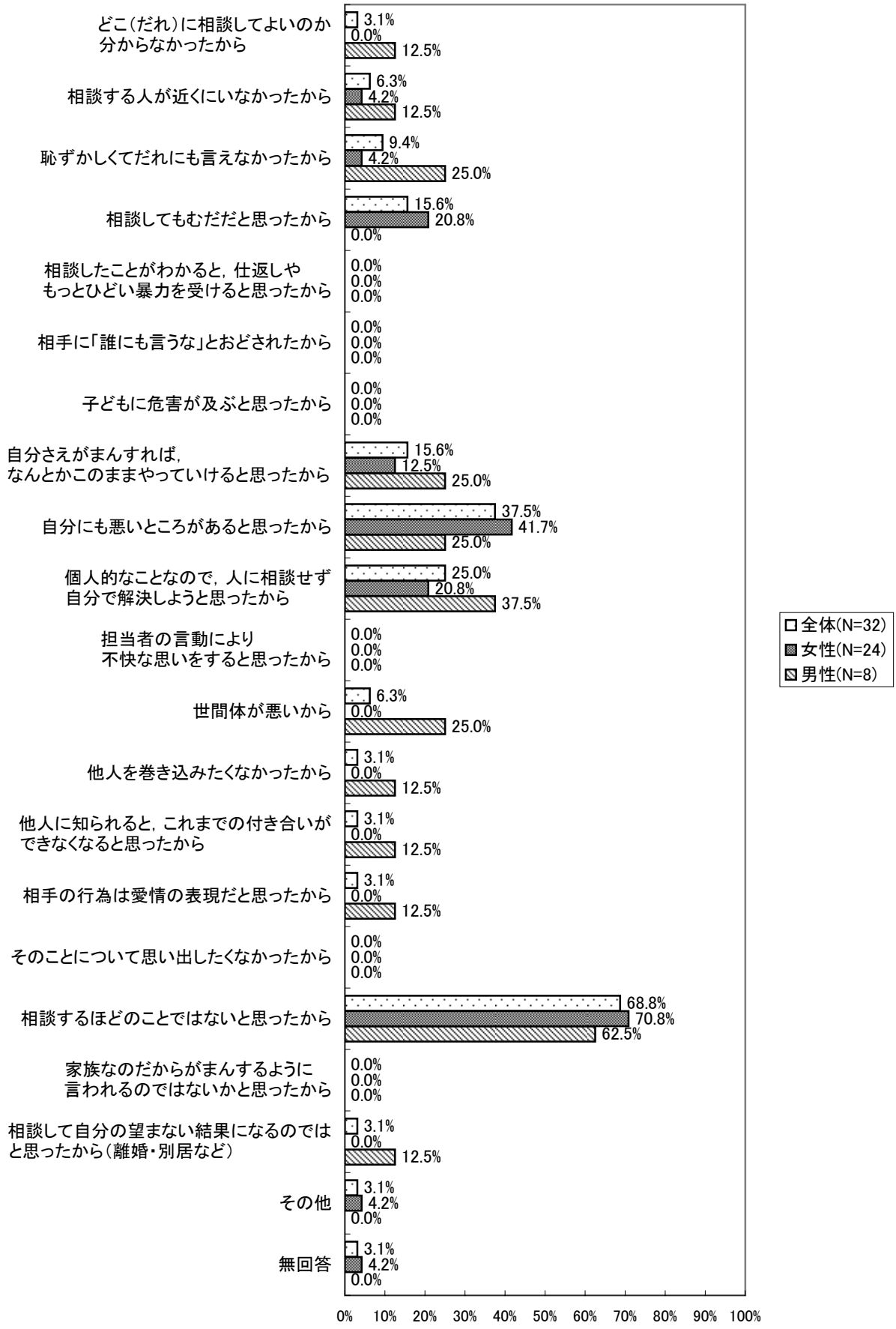
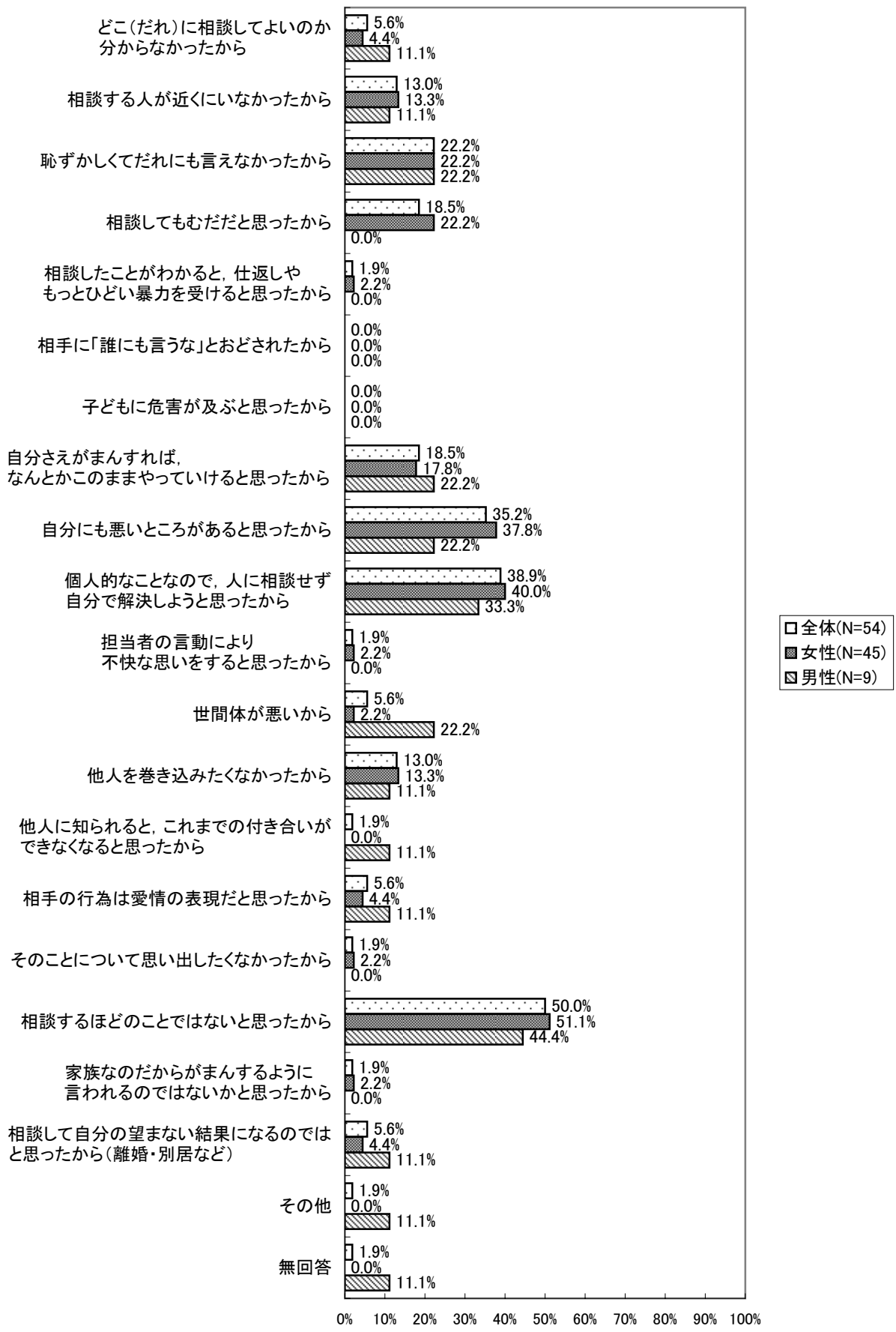


図4-(15)-3-⑫〈相談しなかった理由”嫌がっているのに性的な行為を強要された”（全体・性別）〉



5　配偶者等への加害経験について

（1）配偶者等への加害経験の有無

図5-(1)-1〈配偶者等への加害経験：1，2度あった（全体・性別）〉

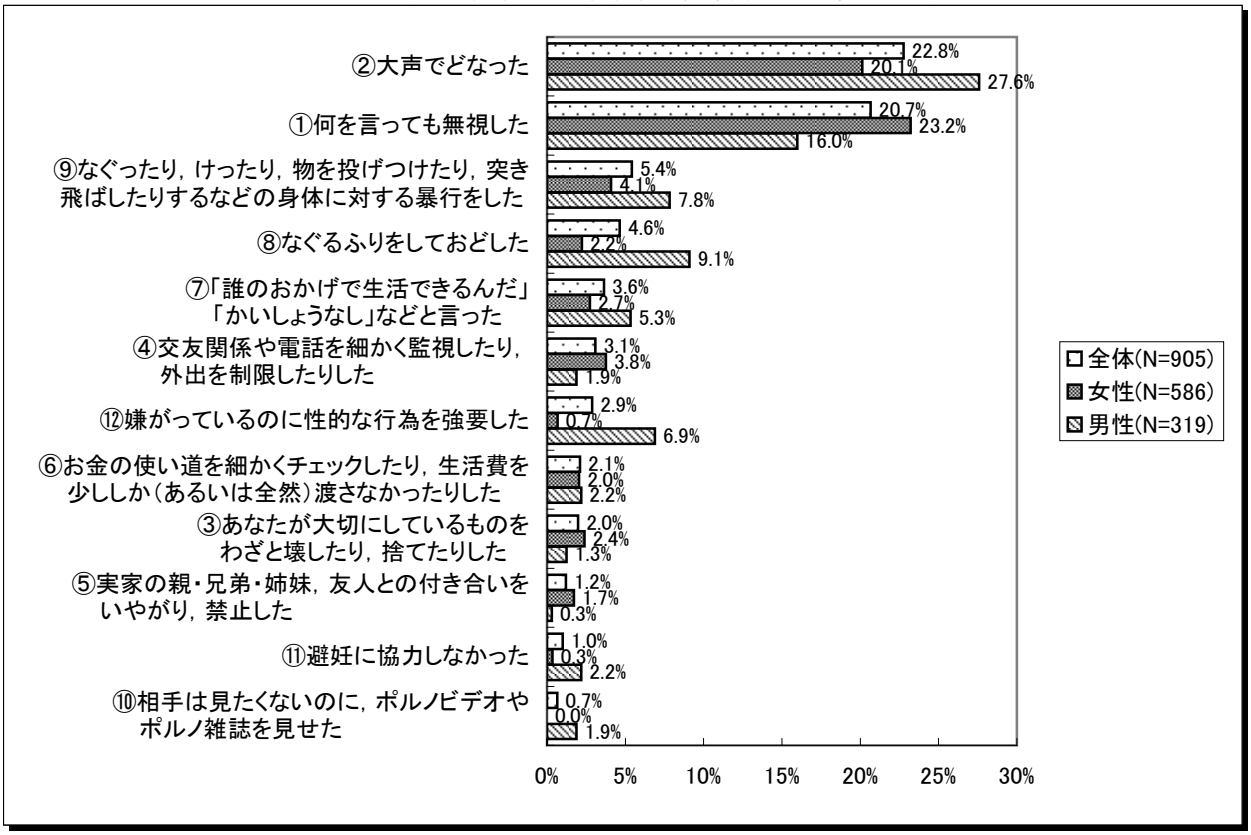
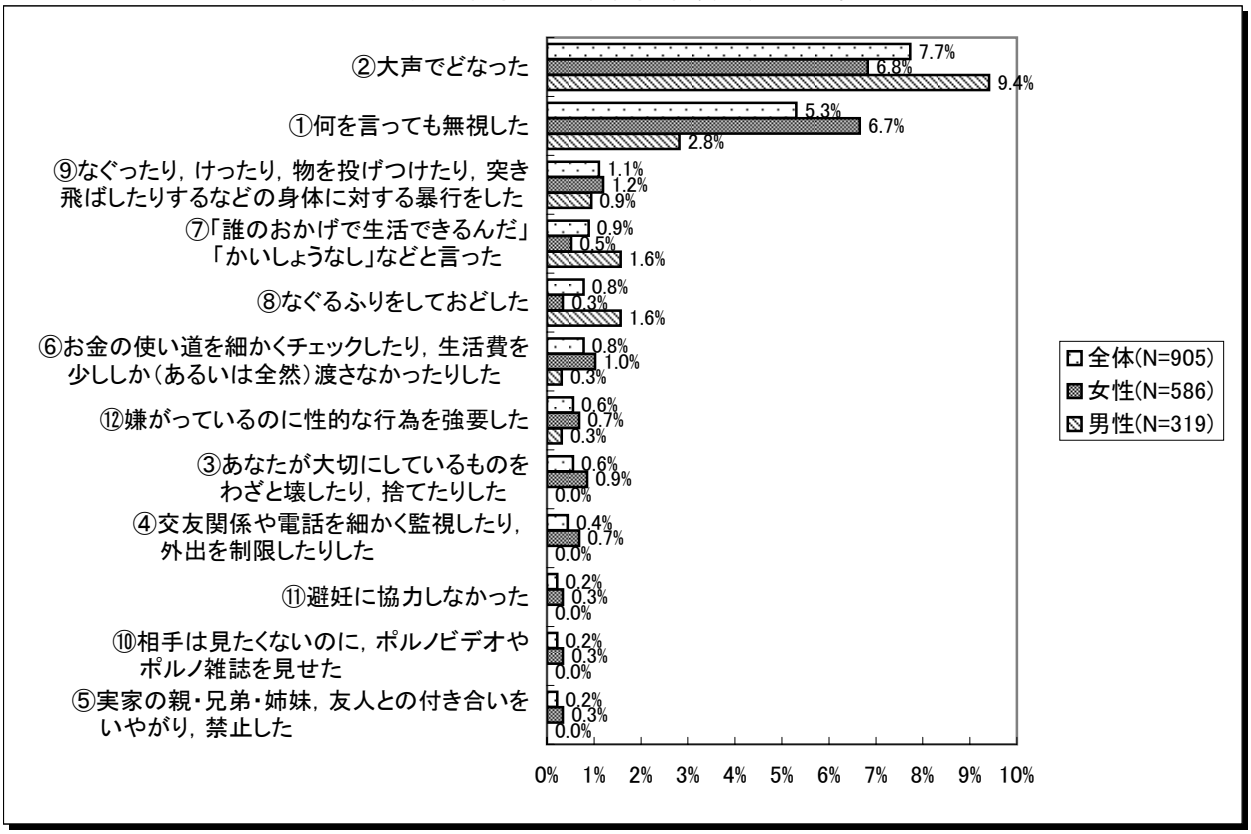


図5-(1)-2〈配偶者等への加害経験：何度もあった（全体・性別）〉



配偶者や恋人への暴力が「1，2度あった」「何度もあった」とした回答を暴力の種類別にみると，「大声でどなった」（女性：27.0%，男性：37.0%）と「何を言っても無視した」（女性：29.9%，男性：18.8%）の割合が高くなっている。

図5-(1)-3〈配偶者等への加害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

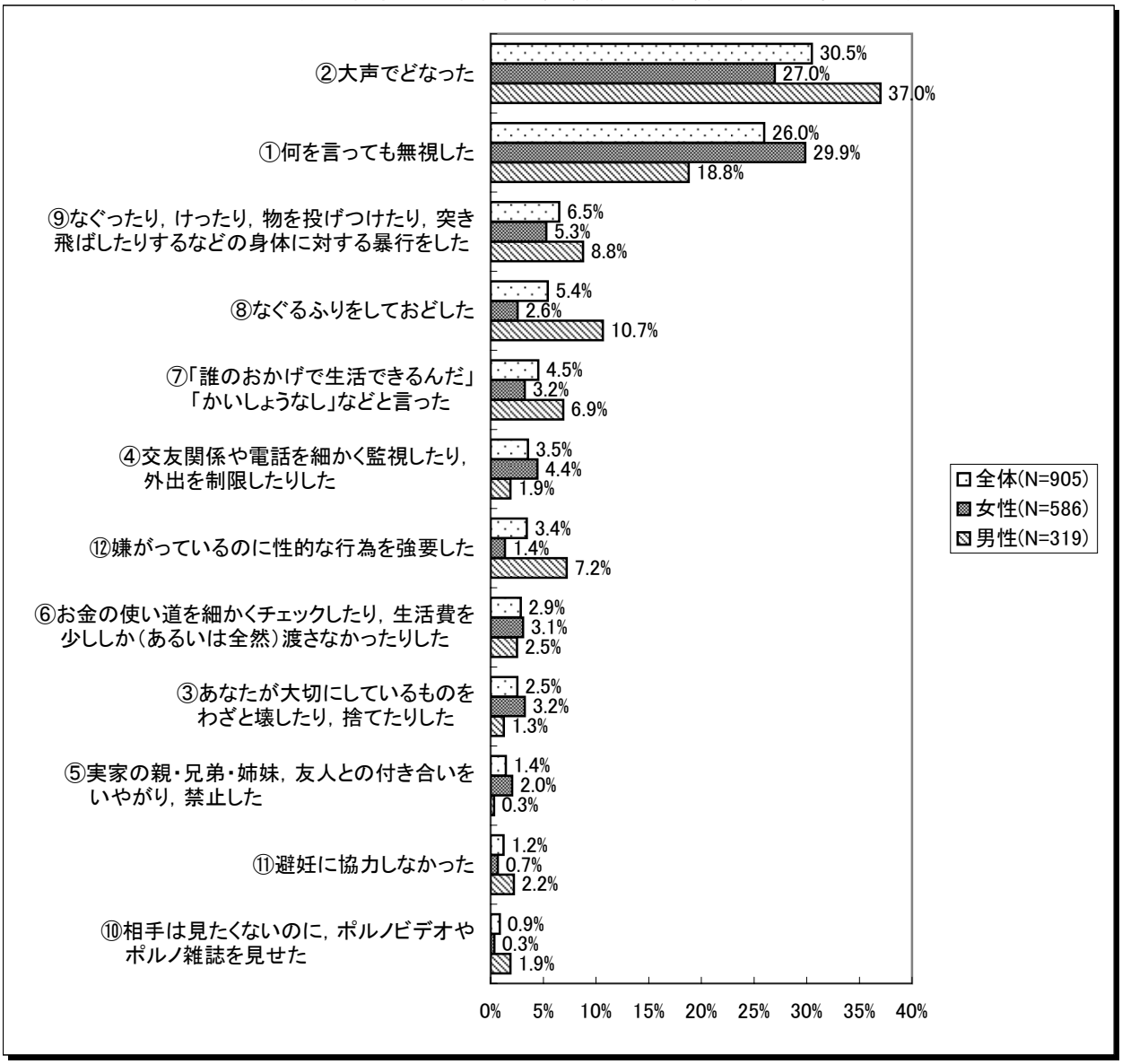


図5-(1)-4-①〈身体的暴力の加害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

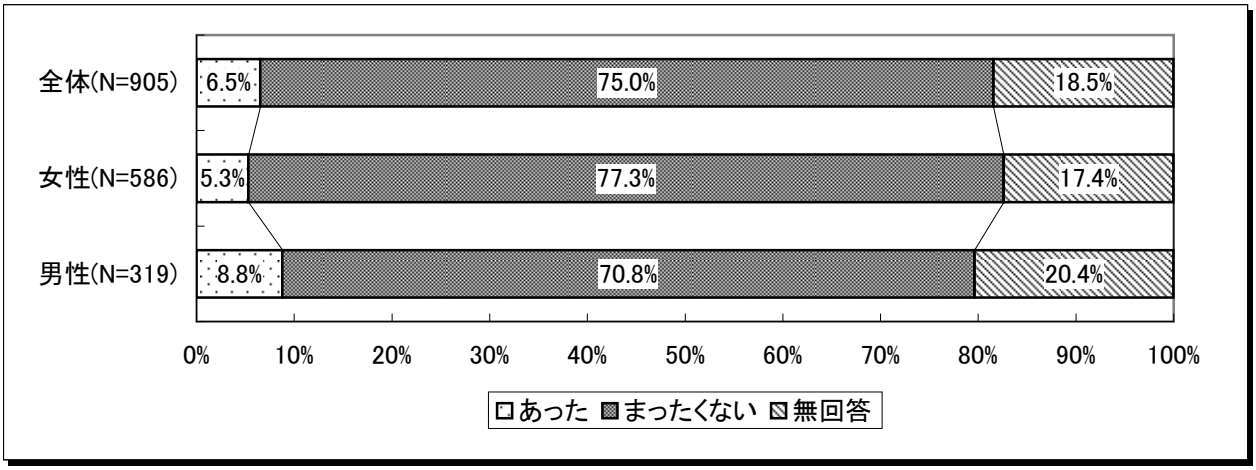


図5-(1)-4-②〈精神的暴力の加害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

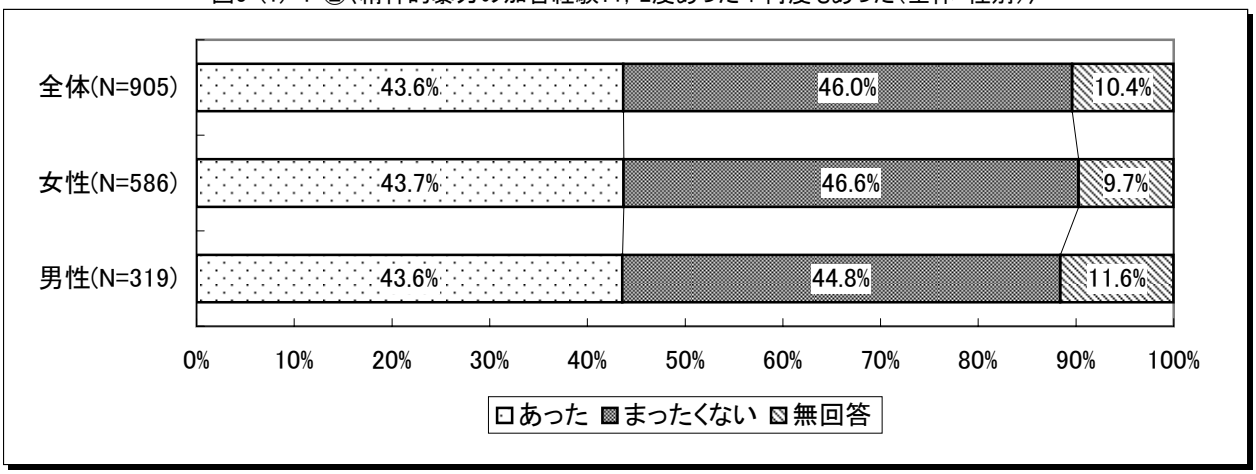


図5-(1)-4-③〈性的暴力の加害経験：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

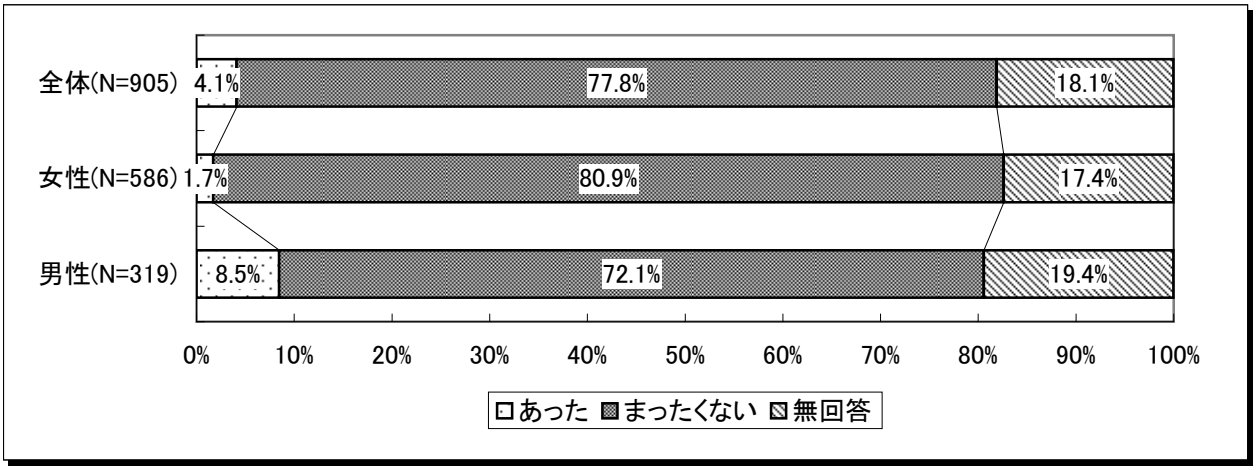
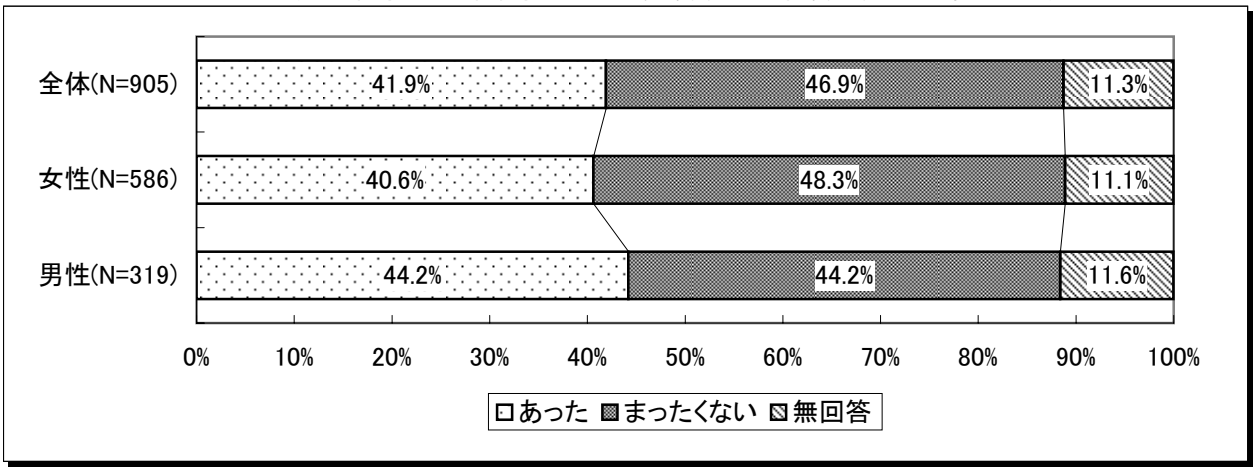


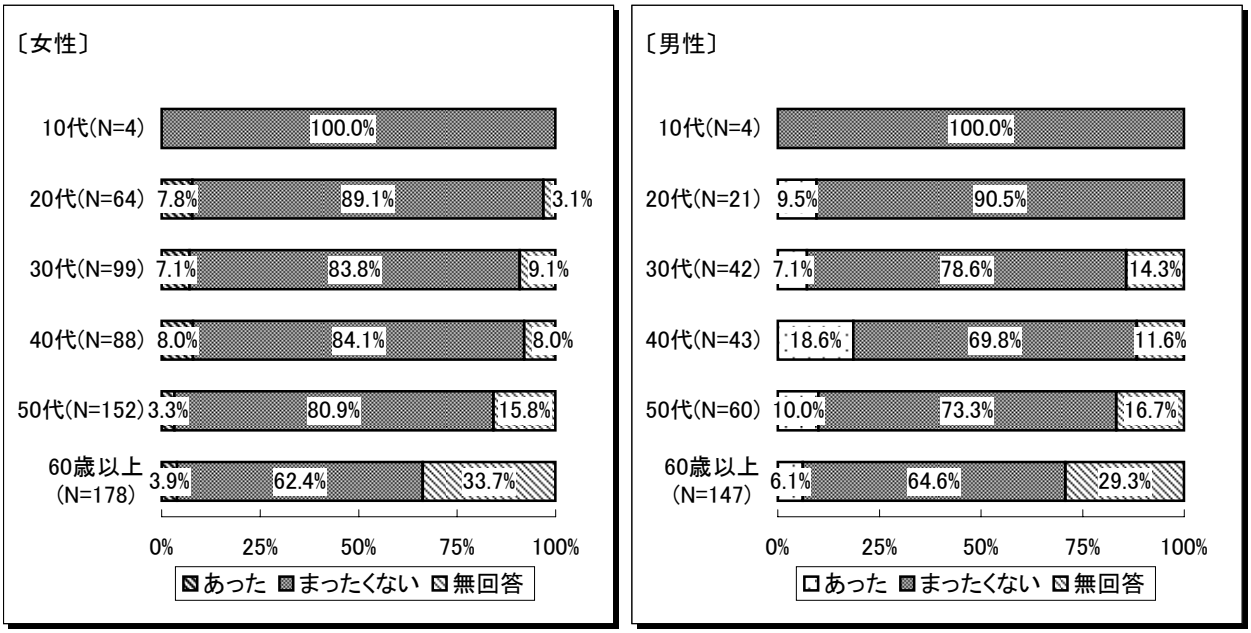
図5-(1)-5〈配偶者等への加害経験・まとめ：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉



※図5-(1)-5は，配偶者や恋人がいる（いた）人のうち，①～⑫のいずれかの暴力が「1，2度あった」若しくは「何度もあった」と回答した人の割合。

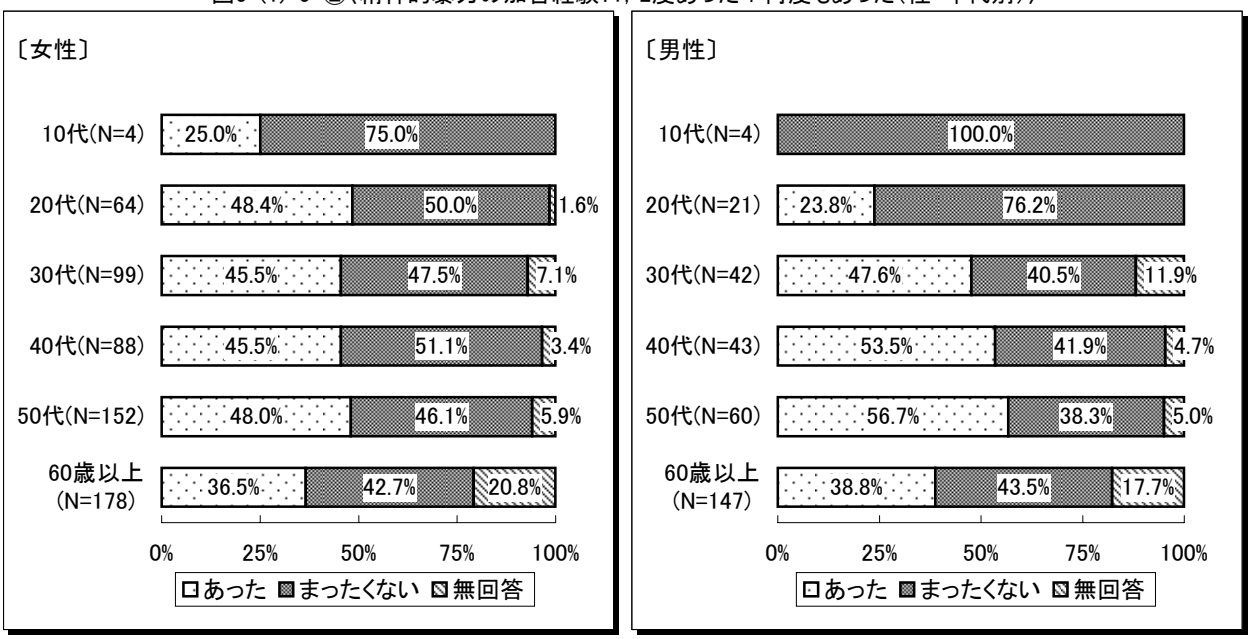
A:身体的暴力
「あった」とした回答は，女性は20代～40代，男性は40代の割合が高くなっている。

図5-(1)-5-①〈身体的暴力の加害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉



B:精神的暴力
「あった」とした回答は，女性は20代～50代，男性は30代～50代の割合が高くなっている。

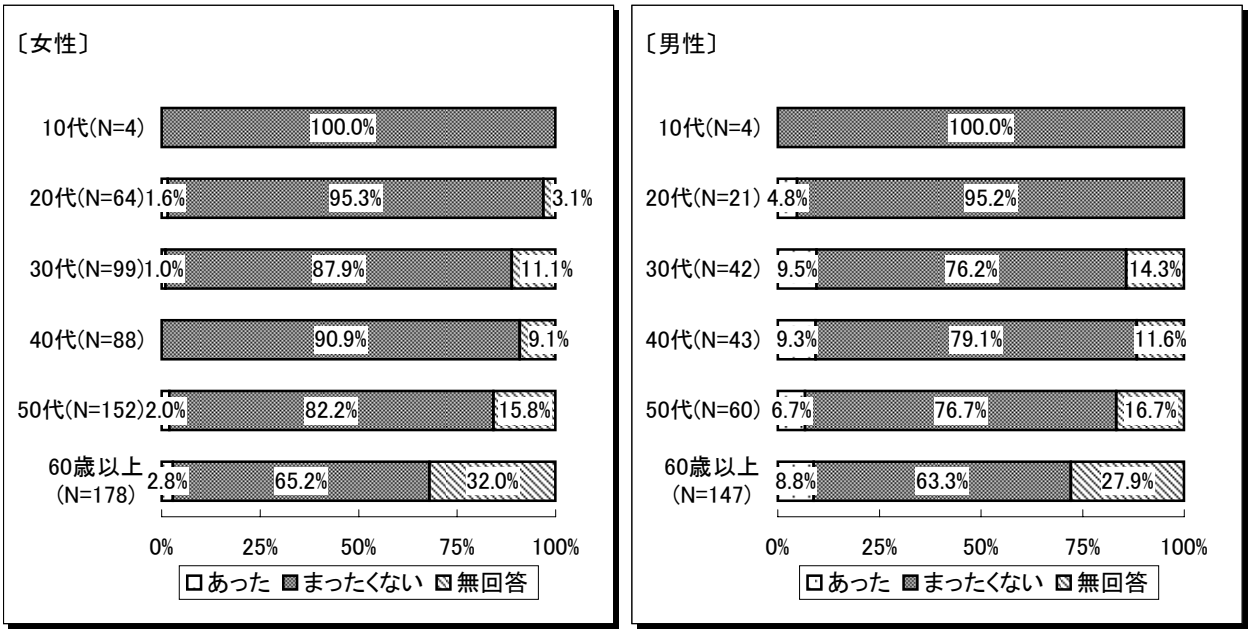
図5-(1)-5-②〈精神的暴力の加害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉



C:性的暴力

「あった」とした回答は，60代女性と30～40代男性の割合が最も高くなっている。

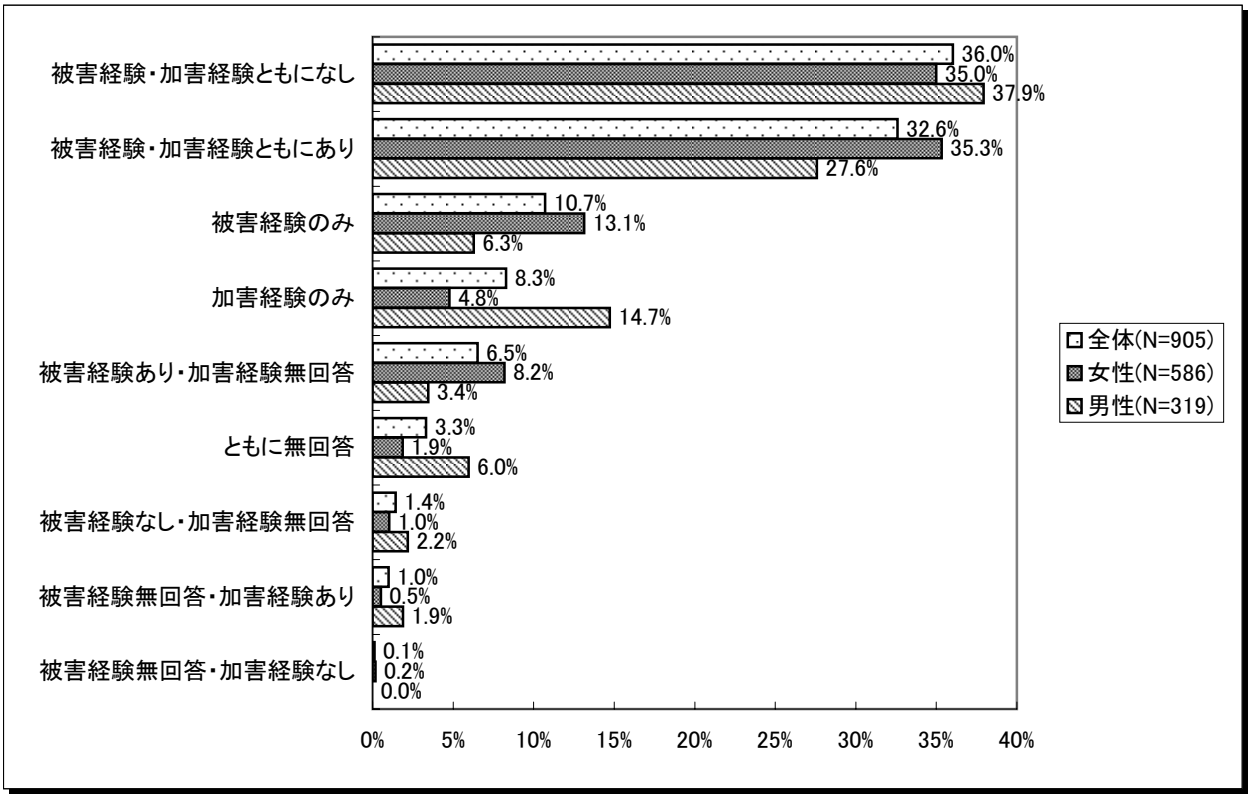
図5-(1)-5-③〈性的暴力の加害経験:1，2度あった＋何度もあった(性・年代別)〉



加害経験と被害経験の重複状況をみると，全体では，「被害経験・加害経験ともになし」(36.0%)の割合が最も高く，次いで「被害経験・加害経験ともにあり」(32.6%)となっている。

これを性別でみると，女性は「被害経験・加害経験ともにあり」(35.3%)の割合が最も高く，「被害経験・加害経験ともになし」(35.0%)と続いている。男性は「被害経験・加害経験ともになし」(37.9%)，「被害経験・加害経験ともにあり」(27.6%)の順となっている。

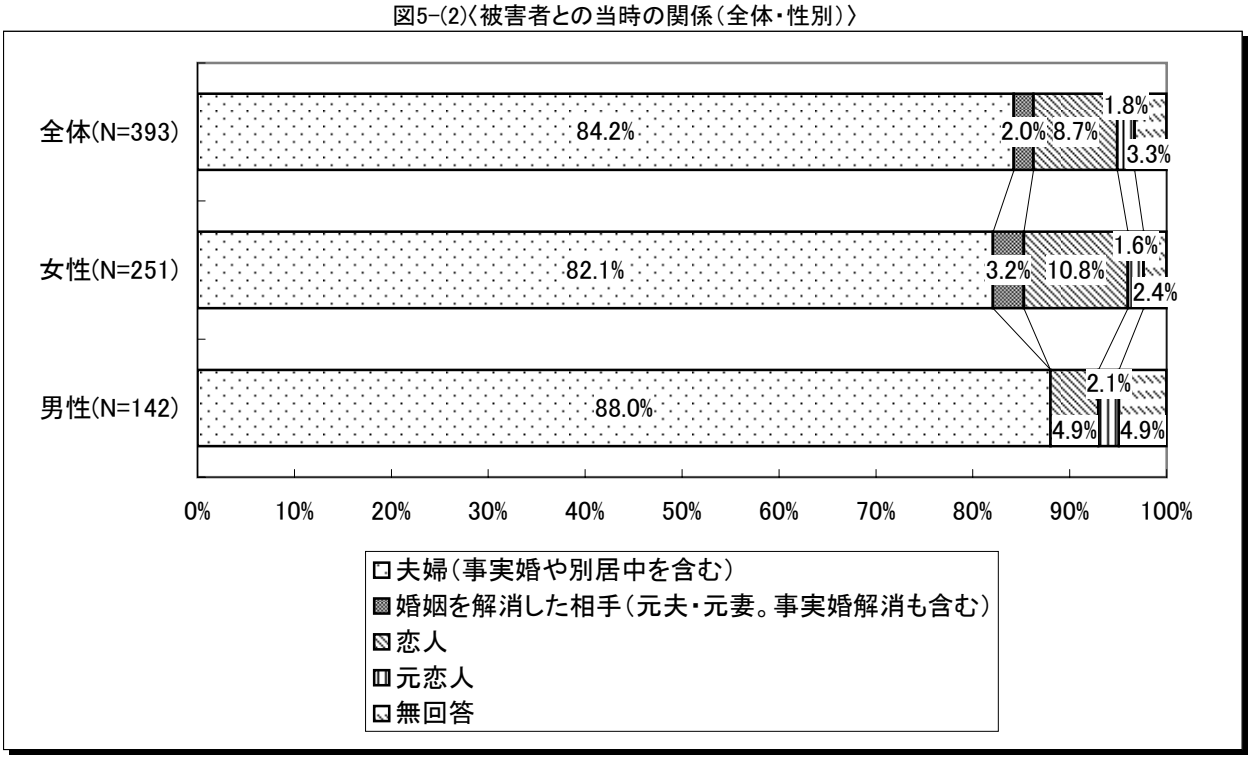
図5-(1)-4〈加害経験と被害経験の重複(全体・性別)〉



（２）被害者との当時の関係について

暴力をふるった相手との関係については，「夫婦（事実婚や別居中を含む）」が84.2%を占め，次いで「恋人」(8.7%)，「婚姻を解消した相手（元夫・元妻。事実婚解消も含む）」(2.0%)，「元恋人」(1.8%)となっている。

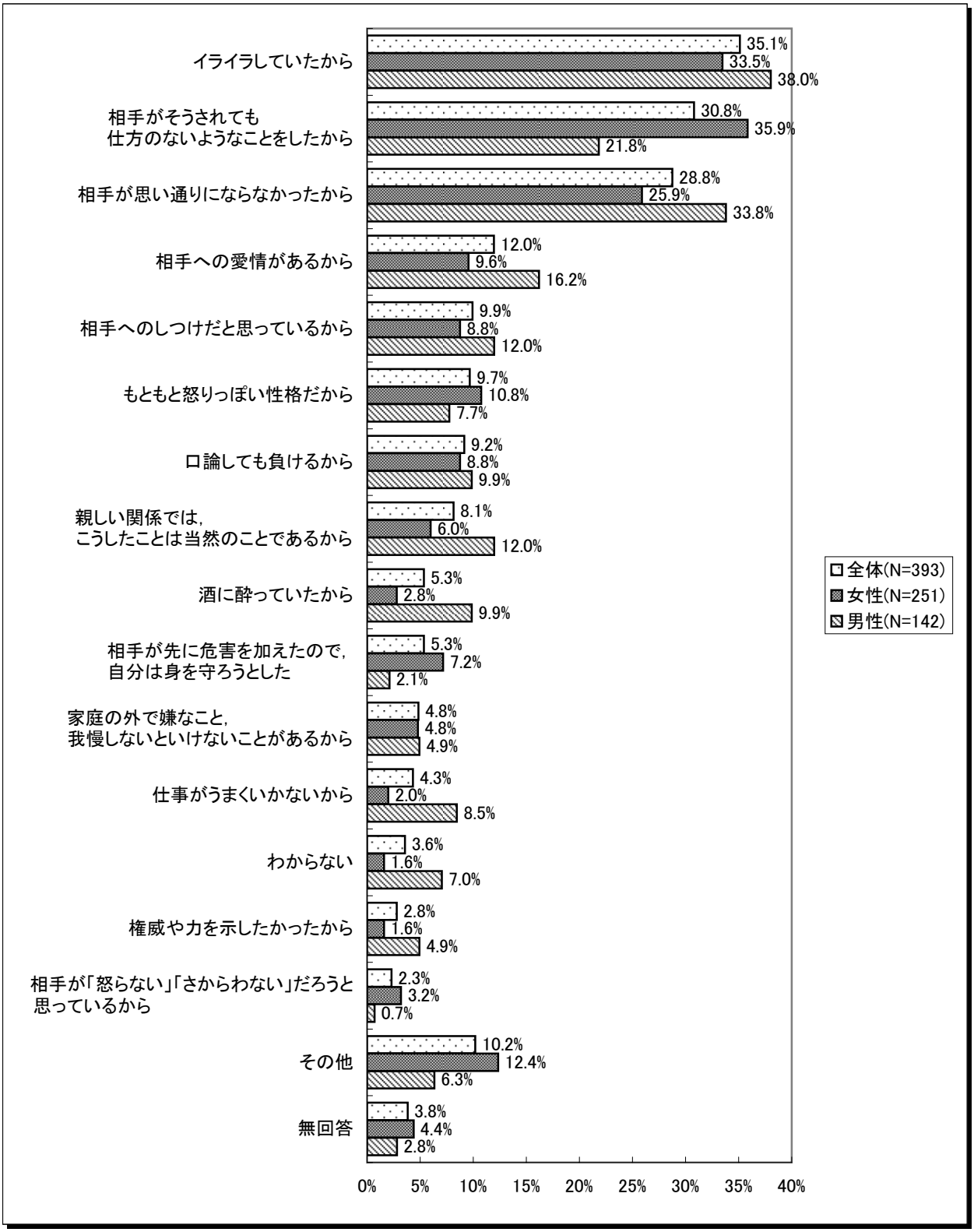
図5-(2)〈被害者との当時の関係（全体・性別）〉



（３）加害の理由について［複数回答］

「イライラしていたから」が35.1%，「相手がそうされても仕方のないようなことをしたから」が30.8%，「相手が思い通りにならなかったから」が28.8%と続いている。
性別でみると，女性は「相手がそうされても仕方のないようなことをしたから」(35.9%)が最も高く，一方男性は「イライラしていたから」(38.0%)が最も高くなっている。

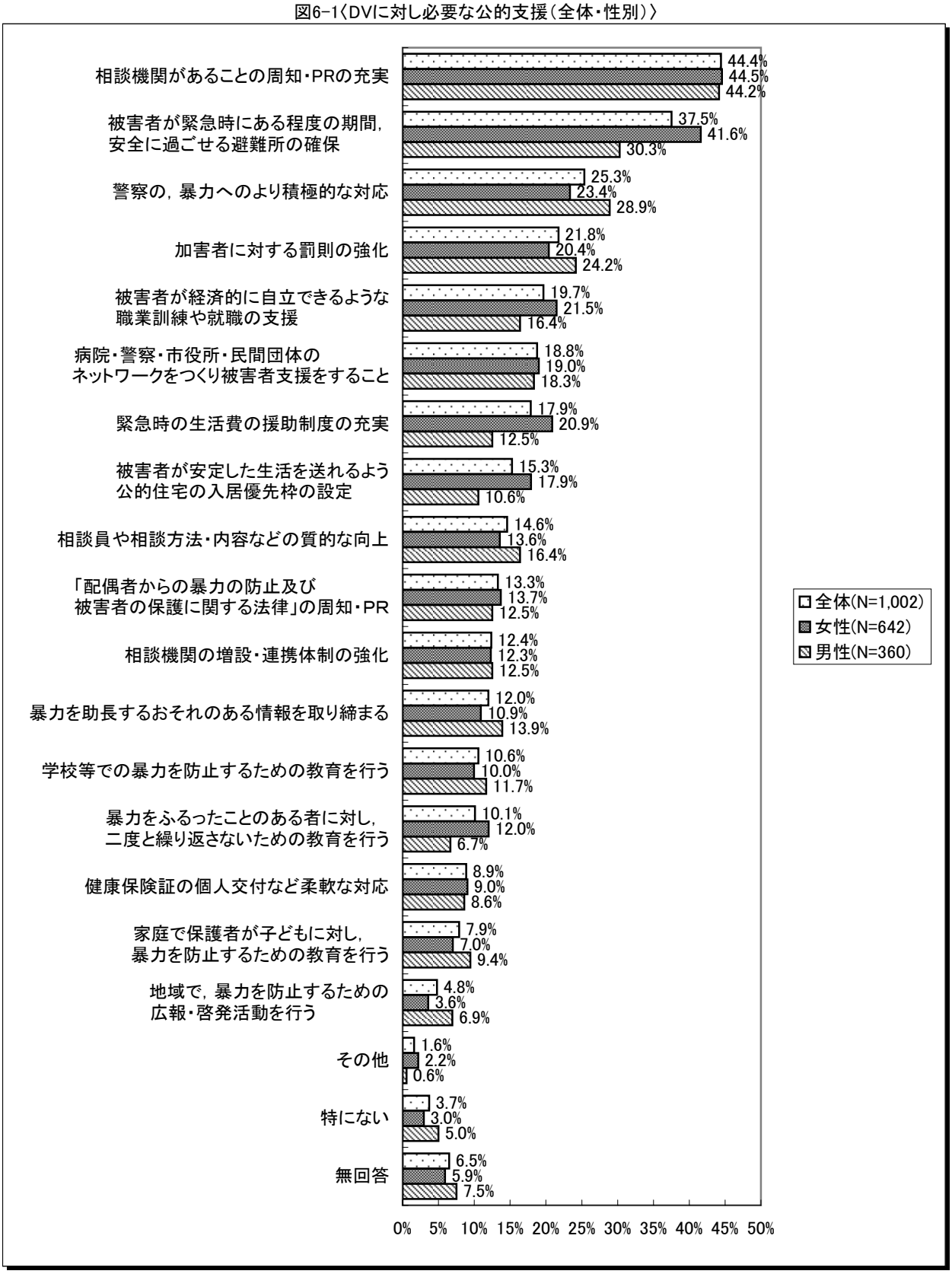
図5-(3)〈加害の理由（全体・性別）〉



6　ＤＶに対し必要な公的支援について［複数回答］

「相談機関があることの周知・ＰＲの充実」が44.4%と最も高く，次いで「被害者が緊急時にある程度の期間，安全に過ごせる避難所の確保」37.5%，「警察の，暴力へのより積極的な対応」25.3%と続いている。

図6-1〈DVに対し必要な公的支援（全体・性別）〉

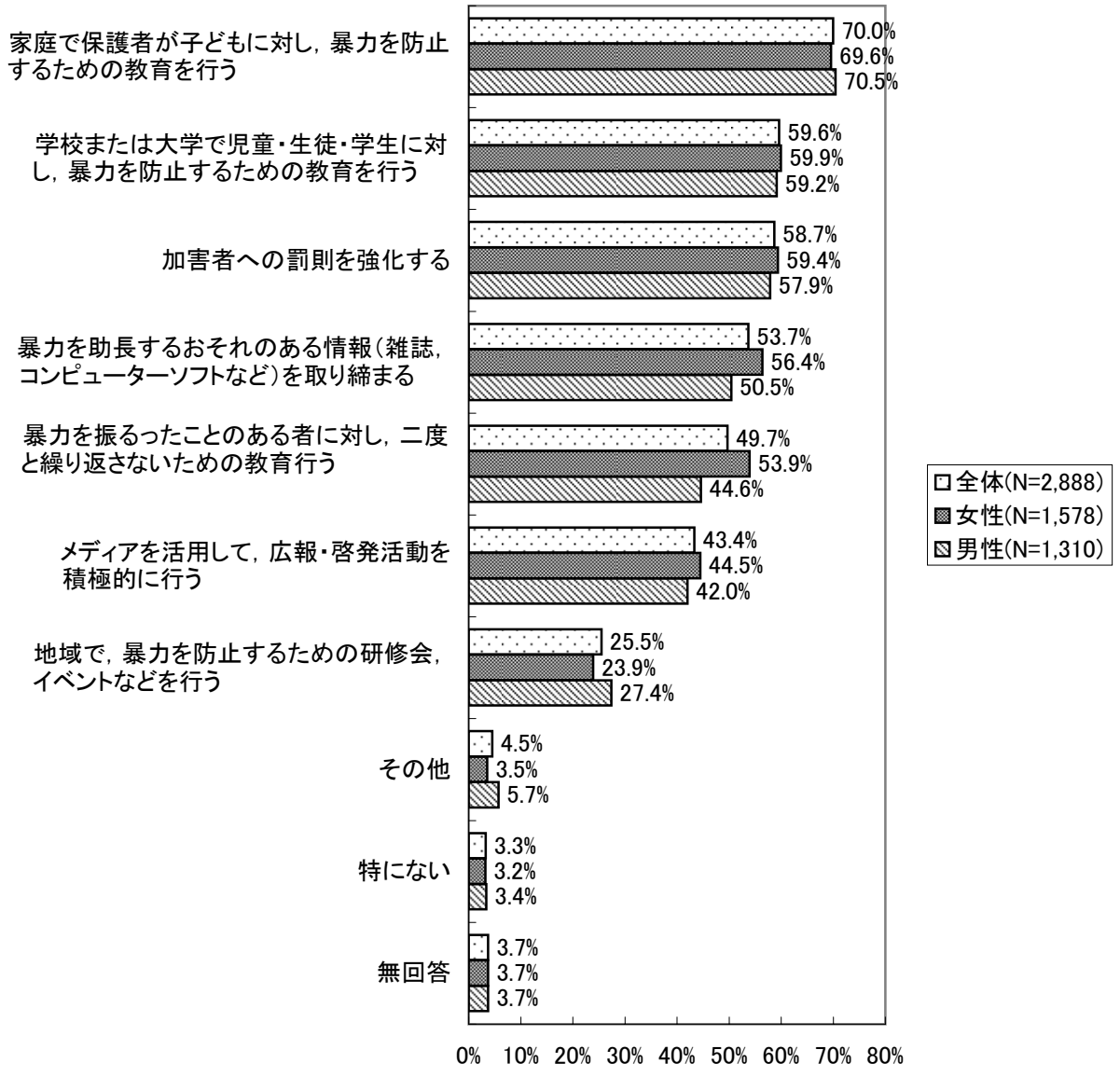


【参考：内閣府調査との比較】

内閣府調査では，「家庭で保護者が子どもに対し，暴力を防止するための教育を行う」(70.0%)，「学校または大学で児童・生徒・学生に対し，暴力を防止するための教育を行う」(59.6%)と子どもの頃からの教育の割合が高くなっており，「加害者への罰則を強化する」(58.7%)，「暴力を助長するおそれのある情報（雑誌，コンピューターソフトなど）を取り締まる」(53.7%)と続いている。

設問項目が異なるため単純な比較はできないが，本市調査では「学校等での暴力を防止するための教育を行う」が10.6%，「家庭で保護者が子どもに対し，暴力を防止するための教育を行う」が7.9%と低い割合となっている。

図6-2〈内閣府調査：男女間の暴力を防止するために必要なこと（全体・性別）〉



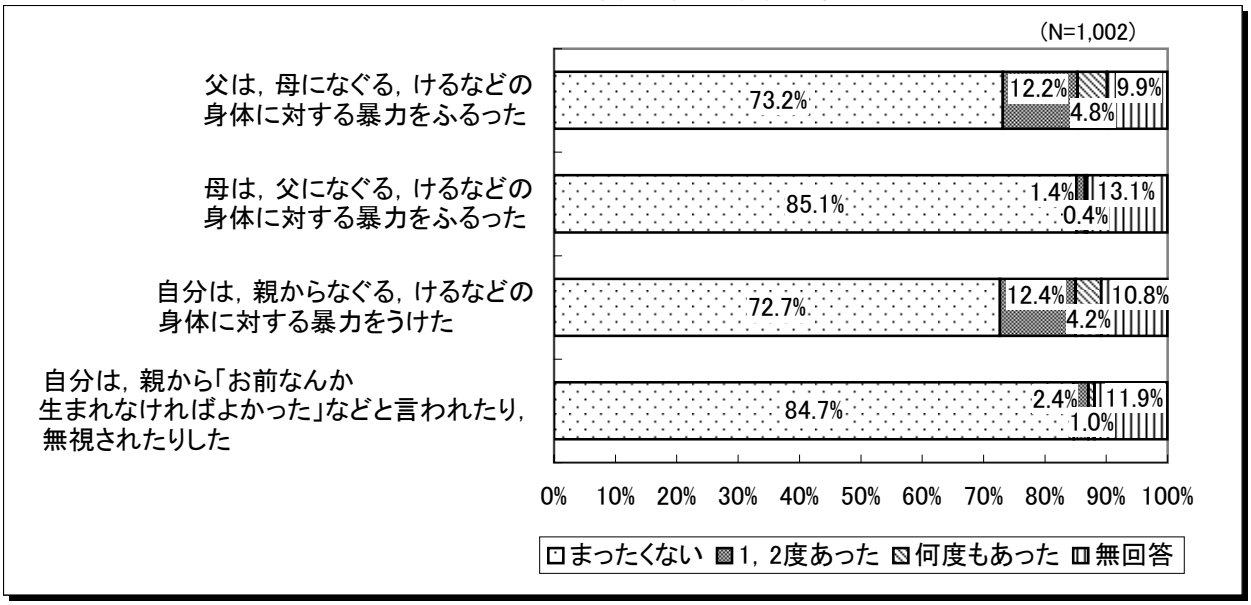
7　子どもの頃の家庭内暴力の経験について

「父は，母になぐる，けるなどの身体に対する暴力をふるった」ことが「1，2度あった」とした回答が12.2%，「何度もあった」が4.8%となっており，合わせて17.0%となっている。

「自分は，親からなぐる，けるなどの身体に対する暴力をうけた」ことが「1，2度あった」とした回答が12.4%，「何度もあった」が4.2%となっており，合わせて16.6%となっている。

「自分は，親から「お前なんか生まれなければよかった」などと言われたり無視されたりした」ことが「1，2度あった」とした回答が2.4%，「何度もあった」が1.0%となっており，合わせて3.4%となっている。

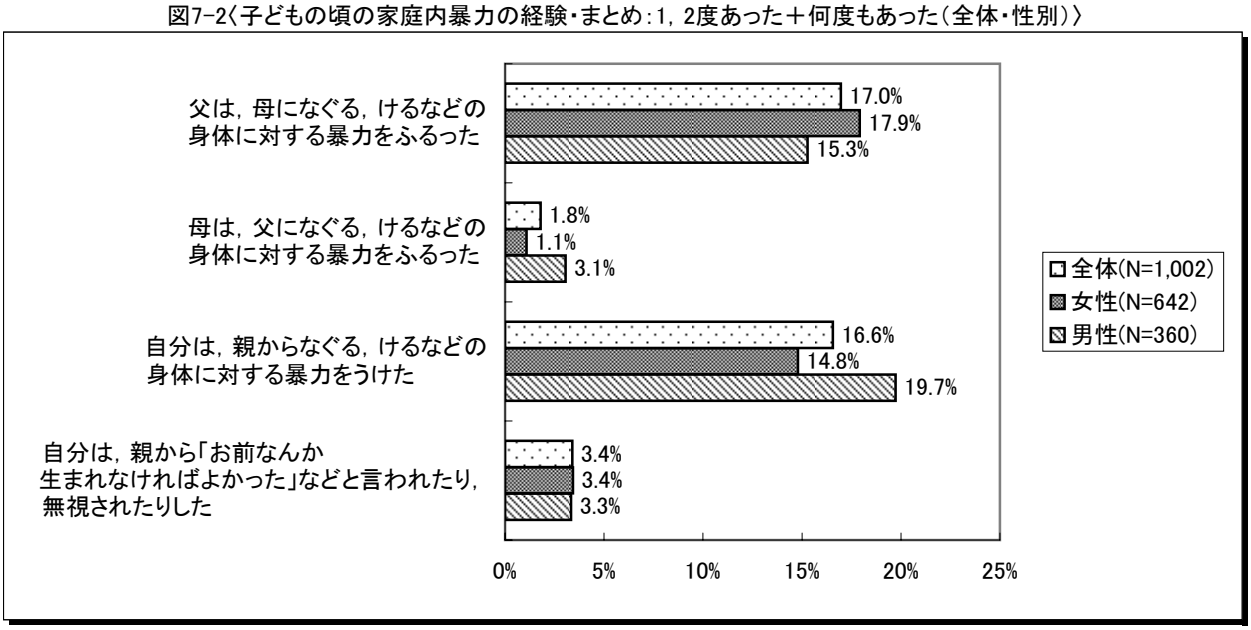
図7-1〈子どもの頃の家庭内暴力の経験（全体）〉



子どもの頃の家庭内暴力の経験が「1，2度あった」と「何度もあった」を合わせた傾向をみると，性別による傾向の違いはみられず，「父は，母になぐる，けるなどの身体に対する暴力をふるった」が「母は，父になぐる，けるなどの身体に対する暴力をふるった」を大きく上回っている。

また「自分は，親からなぐる，けるなどの身体に対する暴力をうけた」割合も高くなっている。

図7-2〈子どもの頃の家庭内暴力の経験・まとめ：1，2度あった＋何度もあった（全体・性別）〉

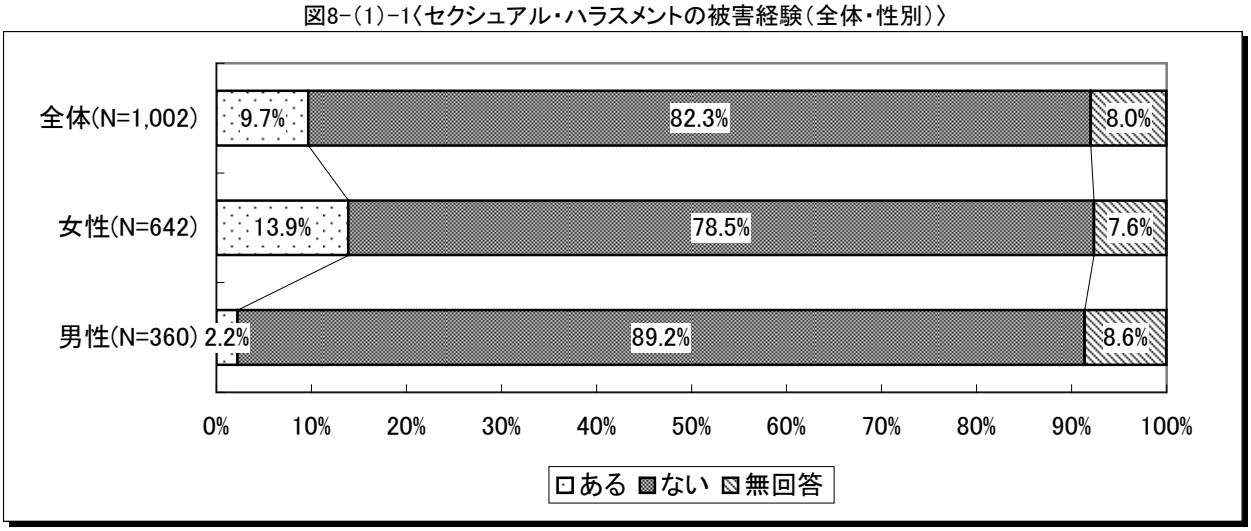


8　セクシュアル・ハラスメントについて

（1）セクシュアル・ハラスメント被害の経験について

「ある」が9.7%，「ない」が82.3%となっている。
性別でみると，「ある」と回答した女性が13.9%であることに対し，男性は2.2%となっている。

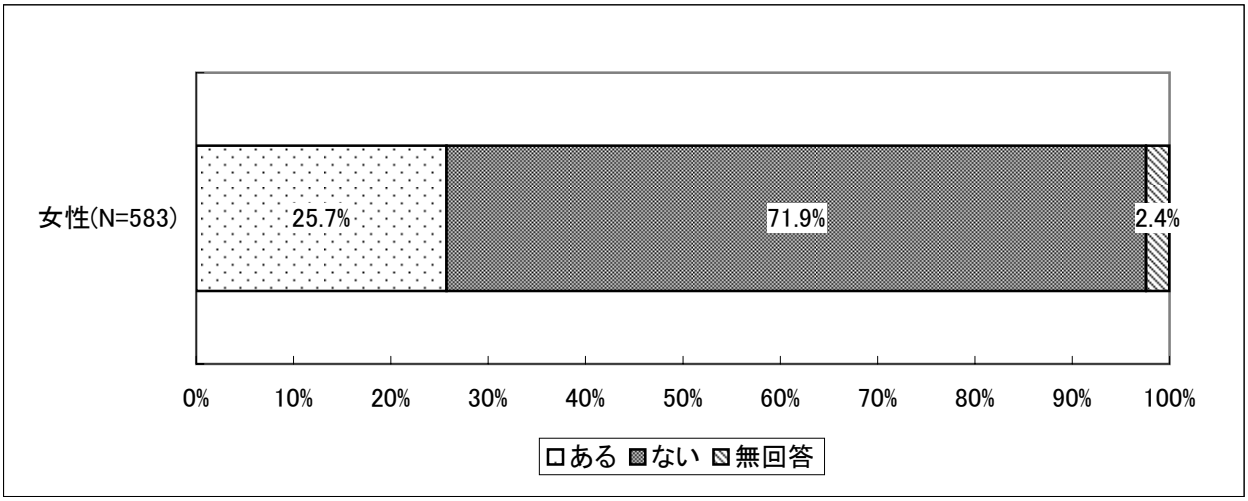
図8-(1)-1〈セクシュアル・ハラスメントの被害経験（全体・性別）〉



【参考：前回調査との比較】

前回調査では女性のみを対象とした設問であったが，これを今回調査結果と比較すると，前回調査では，セクシュアル・ハラスメント被害の経験が「ある」とした回答が25.7%であったのに対し，今回調査では13.9%となっている。また，被害の経験が「ない」とした回答は71.9%であったものが82.3%となっており，被害経験者が減少傾向を示している。

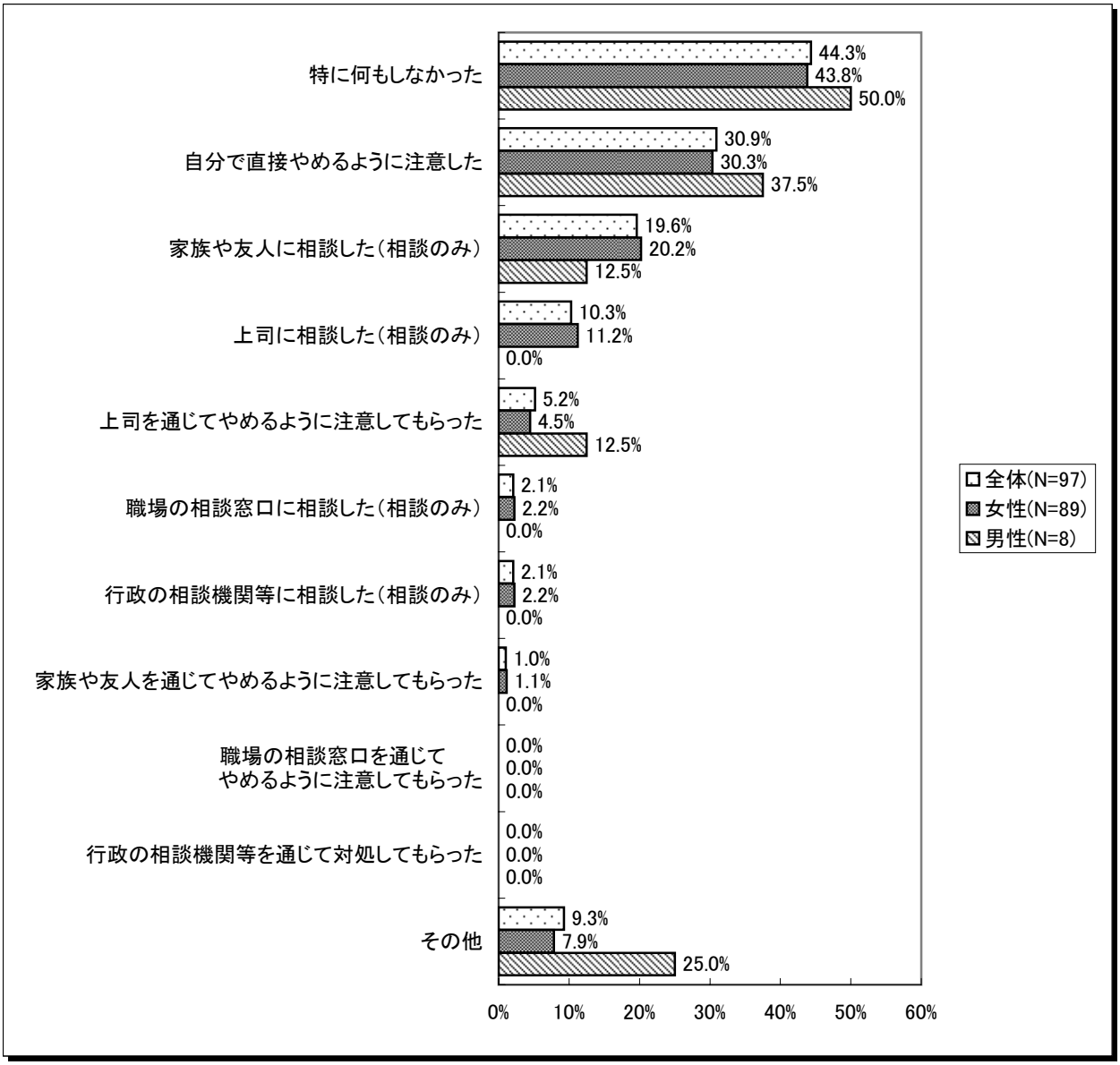
図8-(1)-2〈前回調査：セクシュアル・ハラスメントの被害経験（女性）〉



（２）セクシュアル・ハラスメントを受けたときの対応について［複数回答］

「特に何もしなかった」とした回答が44.3%と最も高く，次いで「自分で直接やめるように注意した」が30.9%，「家族や友人に相談した（相談のみ）」が19.6%となっている。

図8-(2)〈セクシュアル・ハラスメントを受けたときの対応（全体・性別）〉

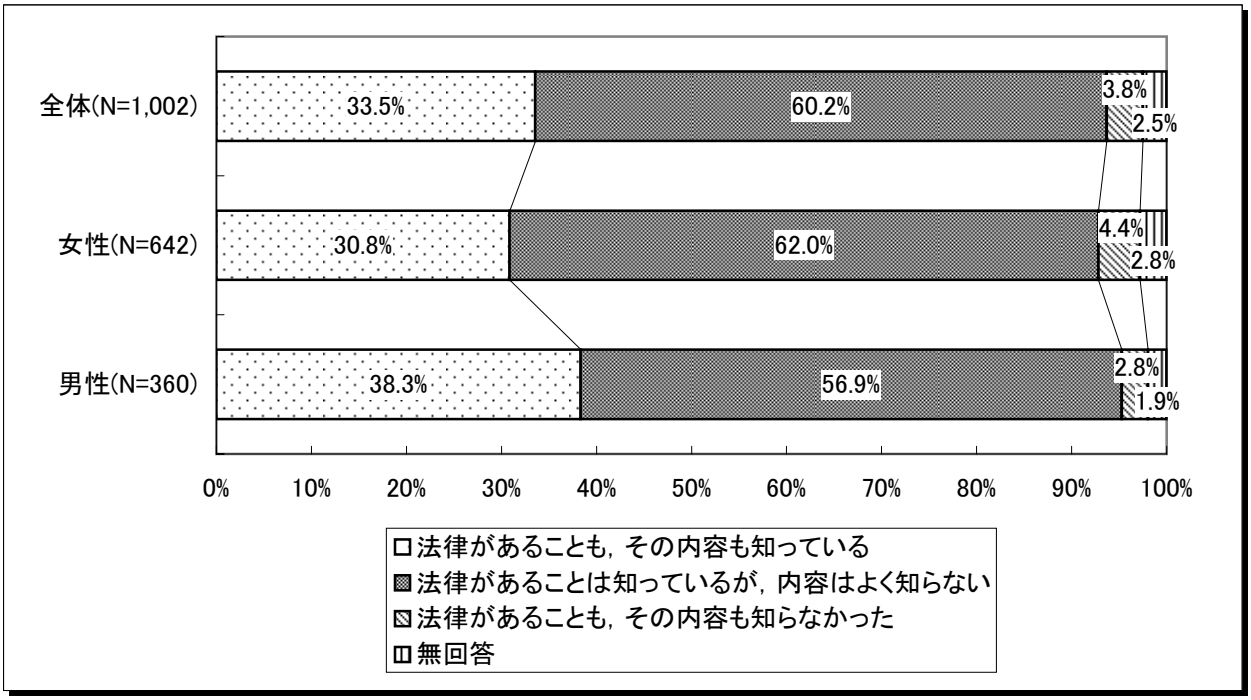


9　ストーカー行為について

（1）ストーカー規制法の認知度について

「法律があることも，その内容も知っている」が33.5%，「法律があることは知っているが，内容はよく知らない」が60.2%，「法律があることも，その内容も知らなかった」が3.8%となっている。
性別でみると，「法律があることも，その内容も知っている」男性が女性を7.5ポイント上回っている。

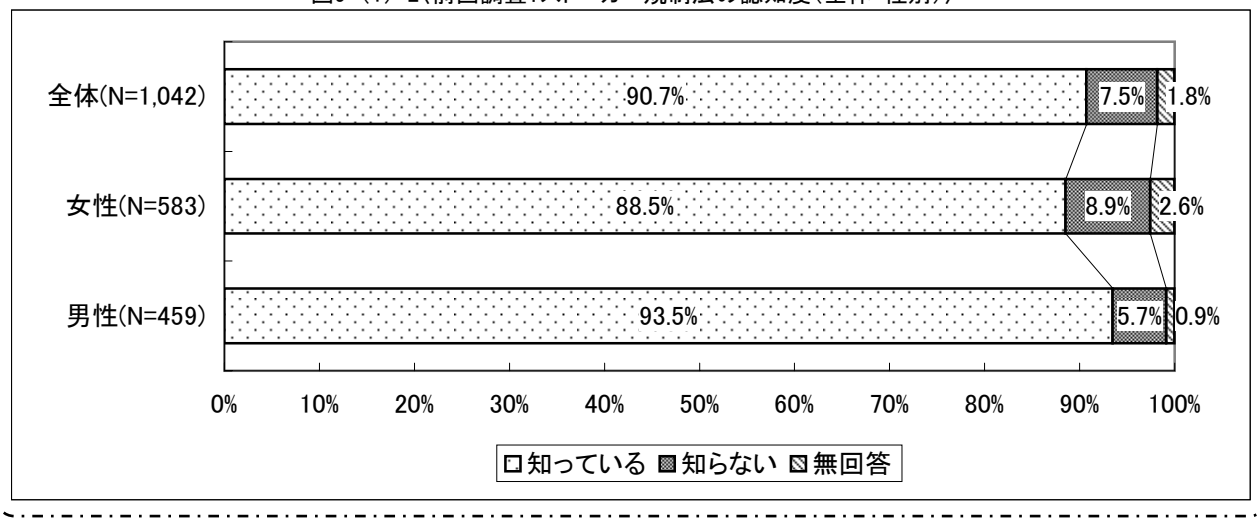
図9-(1)-1〈ストーカー規制法の認知度（全体・性別）〉



【参考：前回調査との比較】

前回調査では，ストーカー規制法によりストーカー行為に対して処罰されることを「知っている」か「知らない」かの二者択一として調査を行った。
全体では，「知っている」とした回答が90.7%，「知らない」が7.5%となっており，男性の認知度が女性より高くなっている。

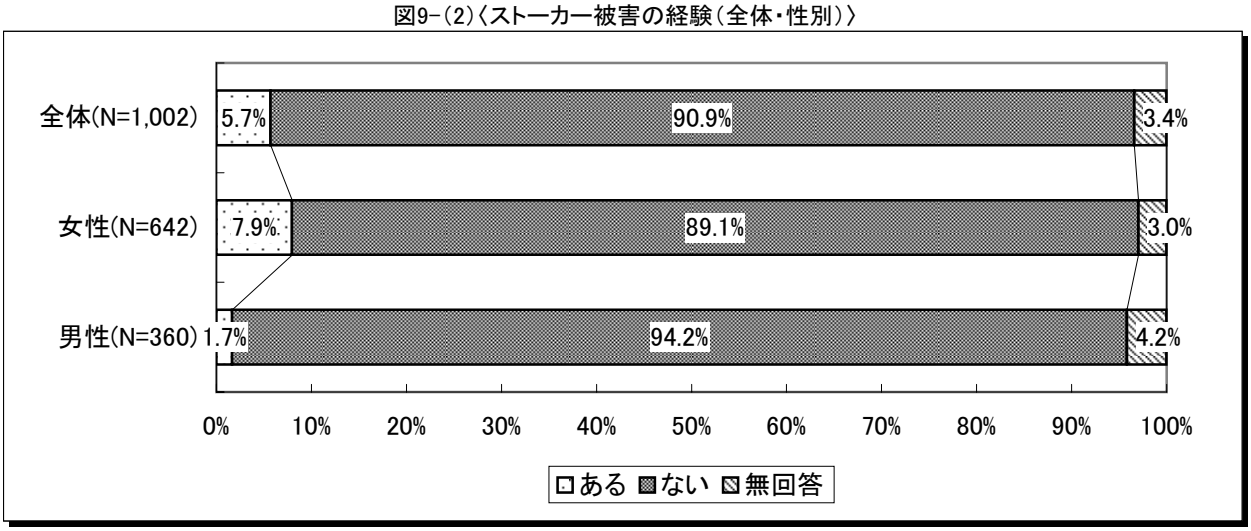
図9-(1)-2〈前回調査：ストーカー規制法の認知度（全体・性別）〉



（２）ストーカー被害の経験について

「ある」が5.7%，「ない」が90.9%となっている。
性別でみると，女性の7.9%が「ある」と回答していることに対し男性は1.7%となっている。

図9-(2)〈ストーカー被害の経験（全体・性別）〉



（３）ストーカー行為の加害者について［複数回答］

「相手が誰だかわからない」が21.1%，「ただの顔見知り」が19.3%，「まったく知らない人」が17.5%の順となっている。
性別でみると，女性は「相手が誰だかわからない」が23.5%，「まったく知らない人」が17.6%，「元恋人・元配偶者」が17.6%となり，男性は「ただの顔見知り」が50.0%，「まったく知らない人」が16.7%，「知人・友人」が16.7%となっている。

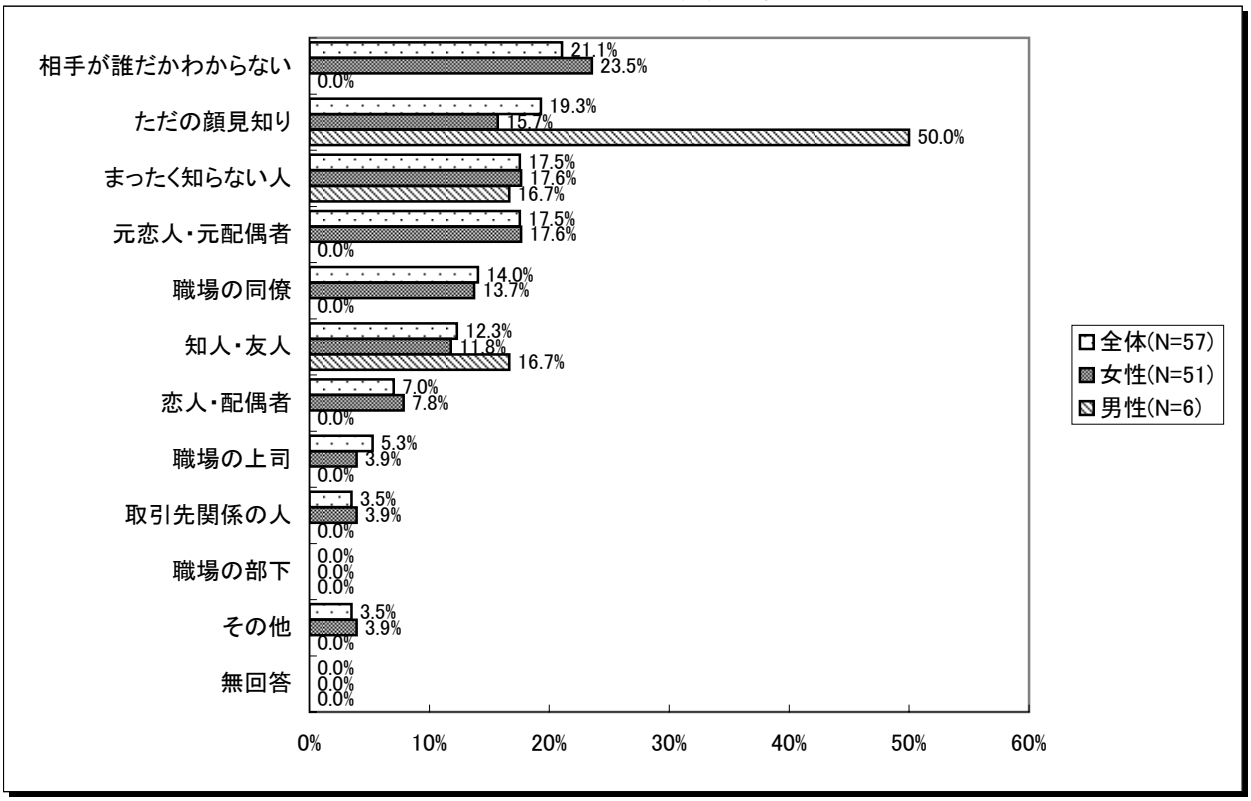



図9-(3)〈ストーカー行為の加害者（全体・性別）〉